俳句の街 まつやま

俳句ポスト 365
作品集 2014

http://haikutown.jp/

目次

季語解説

第1回 椿 1
〈春〉ツバキ科の常緑高木の花。一般には「藪椿」のことを指す。紅色や桃色、白色など、色はさまざまあり、早春に咲き始め、松山市の「市花」に制定されている。

第2回 春めく 1
〈春〉気候が穏やかになり、春らしくなること。

第3回 金縷梅 2
〈春〉マンサク科の落葉低木。金縷梅と記すとおり、黄色い紐状の四弁花を付ける。早春に咲くため珍重され、主に観賞用として栽培される。

第4回 日永 3
〈春〉春になり、日が永くなること。冬に比べ日差しも強くなり、明るくなってゆく頃。

第5回 春の月 4
〈春〉春に昇る月のこと。春は空気がかすみやすく、他の季節の月に比べ輪郭が曖昧になりがちである。

第6回 鳥帰る 5
〈春〉秋から冬にかけて渡来した鳥が、春になって北に帰って行くこと。

第7回 春愁 6
〈春〉何とも言い難い春の憂い。

第8回 万愚節 7
〈春〉エイプリルフール。四月馬鹿。

第9回 芹 8
〈春〉春の七草の一つ。湿地に群生する。

第10回 頬白 9
〈春〉雀よりやや大きい鳥。体は赤色で、目の上下に走る二筋の白斑が名の由来。鳴き声も親しまれてきた。

第11回 種蒔 10
〈春〉苗代に籾種を蒔くこと。春の彼岸過ぎから八十八夜前後に行われる。

第12回 蚕 11
〈春〉繭から絹糸をとるため古くから飼育されてきた昆虫。桑の葉を食べる。

第13回 鯉幟 11
〈夏〉端午の節供に立てる幟で、紙または布で鯉の形に作ったもの。

第14回 筍飯 12
〈夏〉初夏の味わいとしてかかせない筍を炊き込んだご飯。

第15回 夏蜜柑 13
〈夏〉酸味と苦味とを有する大きな柑橘。初夏に白色の花をつけ、秋に熟するが、翌年春から夏に食用にする。

第16回 蜘蛛 14
〈夏〉クモ綱クモ目の節足動物の総称。尻から糸をだす。その糸でつくられたものを「蜘蛛の巣」「蜘蛛の囲」という。

第17回 鵜飼 15
〈夏〉訓練した鵜にかがり火でおびき寄せたアユなど飲み込ませる漁法。岐阜県長良川のが有名。愛媛県では肱川で行われている。

第18回 冷し瓜 16
〈夏〉冷やした瓜のこと。かつては井戸水や湧き水などで冷やし食した。

第19回 鯵 17
〈夏〉アジ科の海魚。一般に真アジのことを指す。刺身やたたき、塩焼きなどにする。

第20回 夏木立 18
〈夏〉夏の生い茂った木々。

第21回 夏の空 19
〈夏〉夏の空のこと。晴れ渡って、日差しが強く、爽快なイメージ。

第22回 合歓の花 20
〈夏〉マメ科の落葉小高木。六～七月頃、雄蕊が長く刷毛のような形の薄紅色の花が咲く。

第23回 夏野 21
〈夏〉夏の野原のこと。夏の草の生い茂った緑の野。

第24回 日々草 22
〈夏〉キョウチクトウ科の一年草の花。西インド原産。夏の終わりから秋にかけて、茎頂に花をつける。花の色は、白、ピンク、赤、赤紫などがある。

第25回 金魚 23
〈夏〉鮒をもとに改良された観賞用の魚。和金出目金琉金蘭鋳など、様々な種類がある。

第26回 朝凪 24
〈夏〉海岸地帯の朝、夜に陸から吹いていた風が、海からの風へと移り変る時に、一時、風が止むこと。

第27回 オクラ 25
〈秋〉アオイ科の一年草。花は黄色で、咲いた次の日にはしぼみ莢ができる。ねばりに独特の風味がある。

第28回 桐一葉 26
〈秋〉他の木に先駆けて落葉を始める桐。風に誘われて舞い落ちる桐の葉一枚は、古くから我々に秋の訪れを感じさせてきた。

第29回 鯊釣 26
〈秋〉秋晴れの日の身近な行楽である

鯊釣り。簡単な仕掛けで誰にでも釣ることができる。

第30回　飛蝗　27

〈秋〉バッタ科の総称。殿様ばった、精霊ばったなど、種類が多い。

第31回　椎茸　28

〈秋〉キシメジ科。日本を代表する食用きのこで、世界三大栽培きのこの一つでもある。人工栽培もされる。

第32回　秋の雷　29

〈秋〉初秋の頃、上空に寒気が入りやすくなると、大気が不安定になり雷が起こることがある。

第33回　秋分　30

〈秋〉二十四節気の一つ。太陽は真東から昇り真西に沈み、昼夜の長さがほぼ等しくなる。

第34回　秋高し　30

〈秋〉大気が澄んで晴れ渡った秋の空は、高く感じられる。

第35回　秋祭　31

〈秋〉秋季に行われる、その年の五穀豊穣を神々に感謝する祭。

第36回　夜食　32

〈秋〉現在では夜に食べる軽食の意。元々は大正時代以前の〝夜なべ〟の習慣によるものであり、藁仕事や繕いといった夜なべ作業の後に摂る食事のことをいった。

第37回　木犀　33

〈秋〉金木犀、銀木犀、薄黄木犀などの総称。江戸時代に中国より渡来したといわれ、多く観賞用に庭木として植えられた。甘い芳香が特徴。

第38回　鵙（百舌鳥）　34

〈秋〉秋を告げる体表的な鳥。小鳥ながら肉食で、昆虫やトカゲ、ネズミなどの小動物を捕食する。また、それらを木の枝に刺しておく〝鵙の早贄〟と呼ばれる習慣がある。

第39回　鵯　35

〈秋〉ひよどり。山地の林で繁殖し、秋に群れで人里に渡る。翼をひろげては引き絞るように羽ばたきながら、波状に飛ぶ。「ピーヨピーヨ」という鳴き声が名前の由来ともいわれる。

第40回　初時雨　36

〈冬〉時雨とは、冬の初め頃によく降る通り雨のことだが、その冬に初めて降る時雨のことを「初時雨」という。

第41回　枯葎　37

〈冬〉かれむぐら。夏の間に荒れ地や野原で生い茂った葎の、蔓が絡みつき、もつれたまま、枯れ果てたもの。

第42回　蓮根掘る　38

〈冬〉秋半ばより蓮田の水が抜かれ収穫が始まるが、盛んになるのは初冬から。かつては農具で泥の中から掘り出す重労働だったが、最近では太いホースの水圧を利用する。

第43回　霜柱　39

〈冬〉地中の水分が地表にしみ出て凍結し、柱状になったもの。粒子の細かな柔らかい地質で形成されやすい。近年は温暖化や、主に開発の影響による地中水分の減少により見られなくなった地域が多い。

第44回　室咲　39

〈冬〉本来は春に咲く草木の花を、かつては土蔵作りの室に、現代では温室やビニールハウス入れて暖房で温めることで、冬のうちに早咲きにさせたもの。

第45回　枯野　40

〈冬〉草がまったく枯れ果てた冬の野原の景色。枯れ色が広がる様は寂しく静かである。

第46回　橙　41

〈冬〉インドのアッサム地方原産の柑橘類。日本へは中国より渡来。熟した果実をもがずに残すと、翌年夏には緑色に戻り何年も枝にとどまることから、「代々」の語呂合わせで縁起物にもされる。

第47回　仏の座　42

〈新年〉春の七草のひとつで、キク科の二年草であるコオニタビラコのこと。地面に張り付くように放射状に伸びる葉の様子を仏像の台座に見立てたところからこの名がある。

第48回　竹馬　43

〈冬〉古くからの子供の遊び。かつては笹の葉の付いた竹などを馬に見立て、跨って走る遊びのことを言っていたが、やがて足場を結わえた2本の竹に乗る遊びのことを言うようになった。

第49回　霜　44

〈冬〉地表の温度が零度以下になると、土や草を濡らしていた露が小さな結晶となって、白く見える。目にするのは早朝だが、実際には夜のうちに起こる現象。

第50回　葉牡丹　45

〈冬〉ヨーロッパ原産のアブラナ科の多年草。キャベツの鑑賞用品種で結球せず、花の無い冬の園芸用として広く栽培されている。

第51回　節分　46

〈冬〉本来は立春・立夏・立秋・立冬それぞれの前日の総称だったが、次第に立春の前日のことを指して言うようになった。陽暦では2月3日頃にあたる。

第52回　二月　47

〈春〉寒明け・立春を迎える時季であり、厳しい寒さが残る中にも、日差しや生命感など、どことなく春めいた気配を感じるようになる。

第53回　紅梅　47

〈春〉梅の紅色系の品種で、艶やかな色をしている。白梅の持つ、より気品のある印象に比べ、若々しい華やぎの印象が強い。

平成26年度兼題リスト　表5

365オフ会報告　表6

第1回　2013年1月24日週の兼題

椿（つばき）

天

松山の息吹きと思ふ椿かな　　**酔う太**

「椿」を市花とする「松山」への、この大らかなご挨拶句を、記念すべき第一回「天」の一句に推させていただきましょう。

久しぶりに訪れた「松山」を言祝いでの一句、遠い地に咲く「椿」を眺めての郷愁、春を迎える松山人としての感慨など、鑑賞はいかようにも膨らみます。「松山の息吹きと思ふ」までは作者の思いしか語られていないのですが、下五「椿かな」の詠嘆が目に入ったとたん、読者の脳裏にはつぎつぎに開いていく「椿」が早送りの画面のごとく鮮やかに広がります。その映像を想起させる力となるのが中七「息吹き」の一語。何万何千という「椿」が明るい「息吹き」を咲かせる頃、子規の愛した「松山」は最も美しい時期を迎えます。

地

綾取りの川から琴へ花椿　　**神楽坂リンダ**

「綾取りの」一本の紐が「川」となり「琴」となっていく変化をクローズアップの画面で見せておいて、下五「花椿」の鮮やかな赤へ切り替える映像的作品。「綾取り」を冬の季語として採録する歳時記もありますが、この場合は「綾取り」の紐の動きを活写することで「花椿」の豪奢な赤を印象的に描こうとしているわけですから、季重なりを指摘されたとしても全く気になりません。「綾取り」の赤い紐の動きとともに、「綾取り」をする人物の艶やかな着物の袖口までもが見えてきたかのようで、大変惹かれた作品です。

ややこれがかの碧梧桐椿かや　　**めろ**

「赤い椿白い椿と落ちにけり　河東碧梧桐」へ捧げるこの句も愉快なご挨拶です。「ややこれが」という大げさな言い方、「〜かや」のとぼけた問いかけにも味があります。「赤い方から落ちていくのが椿の生き方なのでしょうか？」という作者のコメントは何やら意味深。

玉砂利に雨のしみこむ椿かな　　**とりとり**

「伊勢神宮」での一句とのことですが、「玉砂利」の一語から神社の境内がありありと想像されます。「玉砂利」「雨」のモノトーンの映像から切り替わる「椿かな」の下五は、雨のしずくに濡れた真っ赤な椿に違いありません。

同時投句「とめどなく椿の落ちる日なりけり」「神島のフェリー乗り場の白椿」も心に残りました。

霊柩車椿へ触れて止まりたる　　**松本だりあ**

「霊柩車」の黒に対して白椿を想像してもよいのですが、葬式で黒白ではちとつまらない。真っ赤な「椿」に触れる位置まできて、止まったという一点に作者の感動を感知したい一句です。

「椿に」ではなく「椿へ」という助詞の効果は一長一短。椿に近づいていって止まったという僅かな距離のニュアンスを表現したかったのか、と好意的に受け止めました。

落椿ひとつ火口の静まりぬ　　**樫の木**

椿がひとつ落ちてその後に静けさがくる、という発想の句は幾らでもありますが、「火口」の一語が入ることで「静まりぬ」という言葉のイメージが重層的に広がります。

「学生時代に旅行した萩市の笠山（火山）の椿の群生地を思い出して作りました。松山市でなくてすいません。」とのコメントも添えられていましたが、いえいえ、さまざまな土地のさまざまな句が集まってくることもこのサイトの大きな楽しみ。各地の風物を詠んだ句もどんどんお寄せ下さい。

熱の子の家赤椿赤椿　　**初蒸気**

同級生の家の前でしょうか。「熱の子の家」という表現には少し突き放した感じがあります。気になるんだけど、訪ねて行くというほどでもない、そんな感じ。「熱」の一語に対して「赤椿赤椿」と畳みかける手法に静かな迫力があります。

窓ぢゆうが空であるなり山椿　　**ローストビーフ**

「窓ぢゆうが空」というのですから大きな大きなガラス窓を想像します。さらに「〜であるなり」と断定されると、「窓」に近づきつつしげしげと「空」を見上げる気分になりました。最後に「山椿」という季語が出現したとたん、私の眼下には「山椿」の森が広がり、嗚呼この窓はこんな高いところにある窓だったのかというささやかな感動が生まれました。

赤深し日本語学校の椿　　**雨月**

いきなり「赤深し」から始まる一句。何の赤だろうと思った瞬間、「日本」という単語が目に飛び込むため、一瞬日の丸の印象も脳裏を過ぎります。上五で「赤深し」と言い切った点は勿論ですが、「日本語学校の」と長い言葉を費やしつつ、最後に「椿」と季語一語を浮かび上がらせる手法が、なんとも巧い作品です。

ころころと風の手毬や落椿　　**曲狸**

「落椿」に対する「風の手毬」という見立てや「ころころ」というオノマトペが分かり易すぎると感じる人もあるでしょうが、「落椿」が風に押されて転がるさまを素直に表現した点に好感を持ちます。季語の現場に立ち、「落椿」の転がるさまに作者の心が動いたという実感が嫌みなく伝わってきた一句です。

朝湯して乙女椿が当たりけり　　**ぼたん**

一読、露天風呂を思いました。湯舟に落ちてきたものが「乙女椿」だったとは、なんとも風流。名前の印象から、小さな花かと思えば、日本国語大辞典には以下のような解説がありました。【花はやや大形の重弁花で、各片が少し内に巻き、中央部は小球状となり雄しべを持たない。色は白色、淡紅色など変化がある。】

ある日の「朝湯」のこんな小さな事件が詩となり得る、それが俳句という短詩系文学の楽しさであります。

第2回　2013年1月31日週の兼題

春めく（はる）

天

行くあてのなき犬海は春めかん　　**理酔**

風も空も波もすべてがひかりの粒を弾きはじめるのが春という季節です。「行くあてのなき犬」までを一気に読ませた後に出現する「海」には、冷たくも明るい光の波がひしめきあっています。

そんな春めく埠頭には野犬が一匹。首を垂れ餌を漁る「犬」を「行くあてのなき」ものとして見つめる作者のまなざしにあるのは、憐れみか、いたわりか、自身の境遇を投影した自嘲でしょうか。

「行くあてのなき」は、痩せて汚れた「犬」を連想させるだけではなく、作者の心を暗示する言葉として働くことに気づくと、一句に心理的奥行きが広がります。「海の」ではなく「海は春めかん」と呟く心、春を希求する作者の心情に寄り添いたくなった一句です。

地

「春めく」と告げマラソンの中継車　　**樫の木**

松山の早春の風物詩となっているのが愛媛マラソン。毎年、俳句仲間たちが出場するものですから、私も応援吟行に参加します。先日二月十日に行われた今年の大会には八千人がエントリー。まさに「春めく」一日でありました。

この句を読んだとたん、大会当日のテレビ「中継車」のアナウンサーが、この季語でもって、あの日の麗かな日射しやまだ冷たい風を表現していたに違い

ない！と確信しました（笑）。俳句には馴染みにくいカギ括弧をうまく使いこなしてもいます。

樫の木さんからは「愛媛マラソンが近づいてきました。選手の皆さん頑張ってください。いつき組マラソン部の皆さん応援してます！」というお便りも頂きました！　来年は是非、樫の木さんも応援吟行に来て下さいね～。楽しいよ～♪

春めきてジャム煮る音のモデラート　登美子

「モデラート」は【中庸の速さ】を意味する音楽用語だそうです。春光のあふれる台所で煮ているのは何の「ジャム」でしょうか。「ジャム煮る音」を「モデラート」と表現するセンスが素敵。春もゆっくりモデラートでやってきます。

同時投句は、発想がユニークな二句です。「春兆すムンクのような欠伸する」「地球儀の芯の蠢き春動く」

遺されし私が春めくだなんて　根子屋

「遺る」は【後世に伝わる。死後消えないである】の意。もし「残る」の字が使われていたら、失恋かも…という読みもあり得ますが、「遺る」によって死別したとの読みが確定します。

「遺されし」が文語で「春めくだなんて」が口語と、異質な文体が混じっていますが、「遺された私が春めくだなんて」と口語で統一した時の感触が、少し軽いと感じ、特殊な文体混合の言い回しを選ばれたのではないかと推測します。

何もかもが「春めく」なか、遺された人間の悲しみは何度目の春を迎えれば癒やされていくのでしょうか。

春めくやメレンゲに角生ゆるまで　神楽坂リンダ

「メレンゲ」を作るために卵白を泡立てているのですね。「春めく」という映像を持たない季語は、映像や音など具体的な要素を取り合わせるのが定石です。

「春めく」気分と「メレンゲ」の質感の取り合わせがうまくマッチし、メレンゲに「角」が生えてくるという発想も楽しい一句でした。

同時投句「春めいてアイロン進む布の海」も家事から生まれた素敵な発想です。

春めくや積木のような丘の家　甘えび

「春めくや」という上五の詠嘆には、春らしくなってきたなあという気分はありますが、具体的な映像はありません。「～や」の詠嘆の後に「積木のような丘の家」が出現することで、「春めく」という季語そのものが彩り豊かに表現される、取り合わせの一句。

季語が「春めく」であり「積木のような家」でありますから、心理的な深読みは不要。積木を積んで作ったかのような可愛い家を想像すればいいですね。

同時投句は、色彩が印象的な二句です。「春めいて埠頭の鳥は白ばかり」「春めくや空に銀色飛行船」

医薬酒のあまき草の香春めける　緑の手

「医薬酒」というと養命酒を思い浮かべてしまうワタクシですが、勿論それに限定する必要はありません。「医薬酒」の匂いを「あまき草の香」と表現することで、こくのあるとろんと香る薬酒がうかんできます。

下五「春めける」は連体形。倒置法で語順が入れ替えられていますので、意味としては「春めける医薬酒」「春めけるあまき草の香」と解釈することができます。

日の終る春めく水を飲んでいる　兼光

「日の終る」は一日が終わる、の意。上五で切れがあると読むか、「日の終る～水」と繋がると考えるか、迷うところではありますが、私は上五で切って読みました。さらに、「日の終る」は、一日の労働が終わったよ、という安堵の夕暮れを意味していると解釈。「春めく水」はその温度であり、美味い水としてのほのかな甘さであり、水を生み出す春という季節への喜びでもあるのでしょう。下五「飲んでいる」の淡々たる語りに、静かな臨場感があります。

同時投句「グランマルニエ一滴落とす春めく夜」にも惹かれました。「グランマルニエ」とは、甘口のリキュール。「春めく夜」の艶めく香りです。

城山の今日は春めくものを撮る　ポメロ親父

日本各地に「城山」を真ん中に置いた城下町がありますが、松山の町もその一つです。松山城に登るルートは幾つかありますが、毎朝散歩やジョギングの人たちが天守閣を目指して上ってきます。

一昔前でしたら「撮る」といえば、ずっしりと重い大仰なカメラしか思い浮かびませんでしたが、今はケイタイで誰でも「撮る」ことができる時代。この句の「今日は春めくものを撮る」という言い回しもまた、イマドキの軽やかさですね。

〇〇を撮ると具体的に提示せず、敢えて「春めくものを撮る」と表現したことで、読み手の心にさまざまな「春めくもの」を想像させます。そこに作者の工夫がみえる一句です。

春めくや熊のやうなる男来る　村夫子

「熊」は冬の季語ではありますが、この場合は比喩として使われていますから、主たる季語は上五「春めく」ですね。「熊のやうなる男」とは、体格？性格？

いま冬眠から覚めたような寝ぼけた顔つきかもしれませんね。のっそりと現れた「男」と季語「春めく」の取り合わせが愉快な一句です。

作者村夫子さんからこんなコメントも頂きました。「大学生のころ、同学年に春だけ姿を見せる男がいた。秋田の出身で、普段は下宿で万葉集を読みふけっているという噂だった。4月には授業料を納めに来ていたらしい。春になると姿を見せる熊のようなやつだと仲間内で言っていた。今頃どうしているだろうか。」　万葉集読んでるとは、気が合いそうな「熊」です？（笑）

首回りさうなアンテナ春めける　ハラミータ

この発想も実に愉快です。昔ながらの枝を張ってるような「アンテナ」ではなく、家庭のベランダなどに取り付けてある丸いパラボラアンテナを想像しました。「アンテナ」の「首」という発想もさることながら、首が回らない（やりくりがつかない）という諺も想像され、尚更愉快。「春めく」光景って、こんなところにもあったんだなあと共感した一句です。

第3回　2013年2月7日週の兼題

金縷梅（まんさく）

天

金縷梅や右ポケットに「春と修羅」　樫の木

北国の春を告げて最初に咲くから「まんず咲く＝まんさく」と名が付いたとの説はご存じの通りですが、「金縷梅」「まんさく」「満作」どの表記を選ぶかで、作品の印象が随分違ってくるのもこの季語の特徴。「金縷梅」の表記に、「春と修羅」の響きや字面がこんな具合に似合うのかと、軽い驚きを持って読んだ一句です。

『春と修羅』は宮沢賢治の詩集。序に次ぐ最初の一編「屈折率」は「七つ森のこっちのひとつが／水の中よりもっと明るく」という一節から始まります。季語「金縷梅」の印象はまさに賢治が生きた北の大地。ひかりの躍る春です。「右ポケット」には愛読の詩集、賢治の国の「金縷梅」は、今その縺れた花弁を解こうとしています。

地

金縷梅のマス目はみ出すこどもの詩　初蒸気

「金縷梅のマス目」とマ音の響きで始まる一句は、言葉遊びの楽しさ。生き生きと書かれる「こどもの詩」は「マス目」をはみ出す勢いで、生まれてきます。上五を「金縷梅や」と切らず、「金縷梅の」としたのは、その溢れるイメージを表現するための工夫ではないかと推測します。低学年用ノートの「マス目」をはみ出す「こども」の躍るような文字

が見えてくるような一句でした。

同時投句「金縷梅や出来損ないですが何か」の「金縷梅」になりきった開き直りの台詞も愉快！

まんさくが咲いたと津軽便りかな　甘えび

「まんさく」という平仮名表記がいかにも柔らかに感じられる一句。「津軽」という地名もさることながら、「津軽便りかな」の詠嘆がはろばろと彼の地を思う心にあふれています。

「咲いた」は口語表現ですが、「〜かな」は文語の詠嘆。文体が入り混じった一句ですが、文語に統一して「まんさくが咲きぬと津軽便りかな」とすると、「咲く」という動詞の鮮度が落ちるように感じ、敢えてこの表現を選ばれたのではないかと思います。

同時投句「まんさくや風にめくれる賢治の詩」は、今週の「天」の作品と同じ発想から生まれた一句。

金縷梅やゴッホになると言ふ男　たかこ

「わだばゴッホになる」と言った「男」とは、青森生まれの版画家棟方志功。彼がこの言葉を叫んだエピソードを、今回改めて読み耽りました。早春の寒さの中で一番に花を咲かせる「金縷梅」は、片目失明を乗り越え、ゴッホのように我流を貫き通した「男」に、確かに相応しい花であると共感致しました。

同時投句「まんさくや方言で読む賢治の詩」は、なんと、先ほどの甘えびさんの句と上五下五が同じ。これもまた短詩系文学の面白さです。

まんさくの花東北の力たれ　村夫子

「まんさくの花」に、日本中の思いを込めたメッセージソング。いち早く春を告げる「まんさく」は、まさに復興への願いそのものです。「たれ」は断定の助動詞の命令形。「東北の力たれ」という力強い措辞に胸を打たれた一句です。

「東日本大震災の時、イギリスにいました。研修旅行の子供たちを引率していて、状況も分からず、帰国できるかどうかも分からず不安でした。帰国後、実態を知るごとに言葉をなくしました。今も震災については語る言葉がありません。昨年の夏、宮城と岩手を訪ねました。何もできなかったけれど、高野ムツオさんが、「来てくれるだけで」と言ってくれた言葉を励みに、遅まきながら、震災と向き合いたいと思うようになりました。句は、自分へのエールでもあります。／村夫子」

まんさくのクラッカー空へ次々　睡花

「まんさく」の花の形状を、空へ向かって鳴らす「クラッカー」に喩えたのが痛快にして愉快。パーンと飛び散る感じが、花の形態にも似ています。5534の破調のリズムですが、これがまた内容にぴったり！ 明るい春の訪れを祝福する「クラッカー」です。

同時投句「荷をほどくようにまんさく咲きはじめ」も、「まんさく」の咲くさまを喩えた一句ですが、素朴な味わいです。

金縷梅やちりちりちりと充電す　空

三橋鷹女の「昼顔に電流かよひゐはせぬか」を思い浮かべましたが、作品の趣きは全く違います。「金縷梅」の形状はまさに「ちりちりちり」と縺れたような花。その「ちりちりちり」というオノマトペが「充電」という言葉を連想させたのかもしれません。「充電」が終われば、空へと春を放電するのかもしれないと、そんなことも考えました。

金縷梅や山では父が先に行く　四万十太郎

「山では」という条件が付くことで、山以外では「父」が先を歩いたりはしないこと、「父」は「山」の仕事で生涯を過ごしてきたに違いないこと、そんなある日の「父」を頼もしく微笑ましくある日の「父」を頼もしく微笑ましく懐かしく眺めている作者がいること等が、立ちどころに思い浮かんできます。かつてこの「父」から、春を告げる「金縷梅」の花を教えてもらったのかもしれないなあと、そんな想像も生まれます。

まんさくや子山羊に峰の名をつけて　ふづき

春を待つようにして生まれた「子山羊」に「峰」の名前をつけたという一句。「子山羊」の生まれた村から見える「峰」でしょうか。飼い主がいつか行ってみたいと思っている「峰」の名かもしれません。「まんさく」の花の黄と、「子山羊」の白との対比も春らしいですね。

まず咲いてまんさくという名に恥じず　逸子

「まんさく」という名の由来を詠み込んだ句は沢山ありましたが、ここまでストレートに詠んで、尚且つ詩として成立させているのは、やはりお見事！と誉めるしかないですね。「〜という名に恥じず」の語りに淡々たる説得力があります。

まんさくやわらしべ長者のその後のこと　松本だりあ

こんな発想も愉快だなあ。拾った藁を他の何かと交換しながら歩いて、ついには長者さまになってしまうのが「わらしべ長者」のお話ですが、「その後」に思いを馳せたことはありませんでした（笑）。長者になってめでたしめでたし……では終わらない物語があるのかもなあ。

この花がよく咲くとその秋の実りが豊かになると言われることから名付けられたのが、「まんさく」の名のもう一つの由来。「まんさく」「わらしべ長者」の付かず離れずのイメージが楽しい作品です。

第4回　2013年2月14日週の兼題

日永（ひなが）

天

饅頭に人相のある日永かな　めろ

死んだ祖母さんは「饅頭」作りの名人でした。春になると祖母さんに連れられ、山にサンキラの葉を取りに行きます。「饅頭」の下に敷く葉の正しい名が「山帰来」だと知ったのは、俳句を始めてから。その赤い実の写真を歳時記に見つけ、懐かしく思い出しました。

祖母さんの「饅頭」は、上品な味の餡子と美しい形が評判でした。村の人たちが「千代子さんの饅頭には品がある」と口々に誉めるのを聞くのは子ども心にも嬉しかったものですから、春になって祖母さんに声をかけられると、やはりいそいそとサンキラを取りに行きました。祖母さんの「饅頭」と「日永」の頃の記憶が、この句の向こう側からぽっかりと現れてきたことが何とも懐かしい驚きでした。

地

永き日の鳩小屋に満つ鳩の息　神楽坂リンダ

一読、餌の乾いた臭いと糞の臭いと鳩の羽ばたきの温い風が、一気に押し寄せ、想像力の豊かなワタクシと致しましては（笑）少々たじろぎました。この生々しい感じを与えるのが下五「〜息」という最後の押さえ。逆の言い方をすれば、「永き日」という季語の持つ心地と日射しが、下五「鳩の息」をありありと追体験させてくれるということでしょう。

同時投句「永き日の読点となれ白ワイン」は、ぐっとお洒落にして機知に富んだ発想の一句です。

日永訳せばアルカイックスマイル　根子屋

発想に軽い驚きを覚えました。「日永」という季語を訳すとすれば「アルカイックスマイル」であるという詩的断定が大胆。「アルカイックスマイル」とは【ギリシャのアルカイック彫刻にみられる、口もとに微笑を浮かべた表情。中国六朝（りくちょう）時代や日本の飛鳥（あすか）時代の仏像の表情をもいう】と辞書には解説してありますが、お釈迦様の涅槃の頃でもある季語「日永」と「アルカイックスマイル」、発想の原点はそんなところにあるのかもしれません。

虎の眼が覚めるを待つてゐる日永　てんきゅう

動物園の光景でしょう。たしかに猛獣類って、いつ行っても寝てますから「虎の眼が覚めるを待つて」は誰もが共感

するフレーズでしょう。「日永」は、どの時間帯を指すというものではなく、なんとなく日が永くなってきたなあ〜という気分。「虎の眼が覚めるを待つて」と言いつつ、覚めるまで真剣に待つかというとそうでもなく、気が向けば次の檻に歩くともなく歩いていく、それもまた「日永」の心持ちでありましょう。

同時投句「永き日の紙風船の気流かな」は、「紙風船」も春の季語ですから明らかに季重なりなんですが、この感覚に惹かれております。「空気の粒の一つ一つが緩んで間延びしたような感じが、私の『日永』のイメージです」と語るてんきゅうさんです。

瞬かぬハシビロコウと会う日永　亜桜みかり

「ハシビロコウ」ってどんな鳥だったっけ?と、ネットで画像検索。おおおーアナタでしたか!と、のけぞってしまうぐらいの独特の風貌の持ち主でした。【全長約1.2m、体重約5kgの大型の鳥類である。巨大な嘴を持ち、獲物を狙うときは数時間にわたってほとんど動かないのが特徴】とありますから、確かに「瞬かぬ」…なのでしょう。「虎」が眼を覚ますのを待つ時間もさることながら、「ハシビロコウ」が獲物を捕るまでの時間は、まさに「日永」か(笑)。「ハシビロコウ」という長い名前を中七にストンと入れての手法が軽やかにして巧みです。

永き日の峠に行かん城を見に　酔う太

一瞬、子規さんの句ではないかと思いましたが(笑)、少し古風で穏やかなこの世界もまた「永き日」ですねえ。中七で「峠に行かん」と意志を語り、なぜ出かけていくかというと目的を下五で「城を見に」と語り添える呼吸が、季語「永き日」にほのぼのと似合います。季語の持つ時間と心のゆとりが、中七下五のフレーズにそのまま生かされた気負いのない一句です。

同時投句「バクに草食べさせてゐる日永かな」も動物園の光景でしょうか。皆さん「日永」には動物園吟行にいくようですね(笑)。

永き日の墓地に箒の女かな　大五郎

この「墓地」に入ってきた時、「女」は確かにあの場所で「箒」を持って地面を掃いていたのに、墓参を終えてまたここまで戻ってきてみると全く同じ場所を同じように掃いている、という光景。訝しく思う気持ちと、その「女」に対する興味ともいえない…ささやかな引っかかり。漱石の小説の中にこんな場面があったのではないかと妄想させられた「永き日」の一点描であります。

門前に餅焼く家業日永し　あねご

「門前」という場所の映像、「餅焼く」匂い、「家業」として餅を焼いている人物。これらが「日永」という下五の世界の中、まるで書き割りのごとく立ち上がってきます。山門を目指して上がっていく人、餅を買う人、冷やかして過ぎて行く人、遍路の一団。読み手の脳裏で、さまざまな人物が次々に動き出していくさまは、見事な一行の下書きのような味わい。

一日で「猫」読み終ゆる日永かな　八木高穂

「猫」とは、夏目漱石著『我が輩は猫である』でしょう。何の予定もない休日の「日永」、久しぶりにこれでも読むかと手にとった一冊。「日永」という時間のイメージを含む季語との取り合わせは、近いといえば近いのですが、作為や嫌みのない宜しき近さ。ごろりと寝転がって読んでいる作者の傍らには、愛猫も長々と寝そべっていたのではないでしょうか。

永き日の耳鳴りに詞を付けてみん　ハラミータ

ワタクシも時折「耳鳴り」に悩まされますが、それは不快なものの代名詞の如き症状であって、音楽とはほど遠いものです。その「耳鳴り」をメロディーだと聴き止め、ならば「詞」でもつけてやろう、と言い放つのですから、愉快というか、お見事というか!「永き日」ののんびりとした気分が生んだ発想でありましょうねえ。

スプーンの中の世界の日永かな　紗蘭

この発想も全く想定外のものでした。手にあるのは一本の「スプーン」のみ。その「スプーン」に映り込んでいるのは、歪んだ私の鼻、歪んだティーカップ、歪んだテーブル、歪んだ部屋、そんな世界の中では「日永」という時間も歪んでいるのでしょうね。こんなモノに「日永」の心地をキャッチする中学生俳人の感覚、侮れないなあ!

第5回　2013年2月21日週の兼題

春の月（はるつき）

天

春の月もぐらの罠の濡れてゐる　松本だりあ

「朧月」という季語もあるように、「春の月」は湿度を帯びて滲んでいる印象があります。それを思うと「濡れてゐる」はいかにもありそうな下五ですが、「もぐらの罠の」という中七の措辞により、一句の光景は薄闇の中から確かな手応えで浮かび上がります。

この「もぐらの罠」はどんなものでしょう。「もぐら」の進路に仕掛けられ、挟んだり突き刺したりする金属製の「罠」を想像しました。「春の月」の朧なる湿度は冷たい鉄の「罠」を濡らし、その「罠」の存在を感じつつ「もぐら」は息を潜めます。「春の月」の湿りが、やがて土中の「もぐら」たちへと及んでいくかのような夜の静けさ。優しい微笑みのような「春の月」の悪意。

地

一山は花の篁春の月　水

「篁」は「たかむら」と読みます。【竹が群がって生えている所。たけやぶ】の意です。いやあー、それにしても佳い光景をごらんになりましたね!

「ここに住んで二度目の竹の花です。二度目は二十数年前の女竹の花。二度目は今の真竹の花です。あまりにも美しい満月に照らされた篁でした。」と語る水さん。羨ましいなあ。

「竹の花」は何十年に一度咲いて、その後一気に枯れてしまうのだと聞いております。「一山を覆い尽くした篁の花」の光景は、やがて愕然と枯れる「篁」のさまをオーバーラップさせます。下五に現れる「春の月」は、山の背後に現れる美しい月。「一山とまではないのですが少しオーバーに詠みました」とも書いてらっしゃいましたが、いえいえ、これは表現上の誇張。「一山」という言葉の持つ格調が、一句の世界を凜と広げます。

春月を吸い込むやうに象の鼻　ぼたん

アニメーションのようなこんな味わいの一句にも惹かれました。夜の空にある「春月」のやわらかな光が優しくもあり、切なくもあり。「象のお腹がひかり浮いて故郷へ帰れたらいいです」という作者ぼたんさんの思いにも共感いたします。

春の月凭れて眠る象使　たかこ

こちらも絵本のような一句。「象使」が象に「凭れて(もたれて)」眠っている、と読みました。サーカスのテントの片隅で、小さな象と小さな象使いが寄り添うように眠っている光景を「春の月」が優しく見守る、そんな物語を想像しました。

同時投句「スプーンに乗せれば溶けて春の月」の発想も愉快です。

ペンギンの低く啼きたり春満月　毛利あづき

動物が続きますが(笑)、大きな「春満月」と俯いた「ペンギン」のシルエットだけだとリアリティーの分量にやや不足を感じますが、中七「低く啼きたり」が「ペンギン」の存在を確かなものにしますね。自分が飼育係になって「ペンギン」のすぐ近くで、かすかな唸りのような声を聞いたかのような気持ちになりました。

純白の鸚鵡献ぜよ春の月　神楽坂リンダ

またも生き物ですが、この一句は随分趣きが違います。一読したとたん、ワタクシの脳内に出現したのは、西太后の宮殿。「純白の鸚鵡（おうむ）献ぜよ」という静かな命令口調が、そんな妄想を引き出したのでしょうか。色鮮やかな「鸚鵡」ではなく「純白」という高貴と「春の月」の艶美な妖しさが、心を惹きつけてやまない一句でした。

宿題をしない子とゐて春の月　阿昼

「宿題はなかなかしないけど、好きなことのいっぱいある子です。月を見ることもそのひとつ」と語る阿昼（あひる）さん。この句の「春の月」は実に優しい色合いですね。「宿題をしない子」のやんちゃに手を焼きながらも、「春の月」の美しさには心を動かす子なのでしょうね。「～とゐて」の措辞に、親子で過ごすささやかな時間の感触を受け止めました。

当の「宿題をしない子」からも届いておりました。「春の月おかあちゃんはへんなひと／ソウソウ」ははは！ いいなあ、こんな親子。「へんなひと」呼ばわりされている「おかあちゃん」は、子どもの宿題が終わっても、縁側で「春の月」をじーっと眺めてるような「ひと」かもしれないなあ（笑）。

春月と明日には歌う金糸雀と　すな恵

この「春月」は淡いカナリア色なのでしょうね。♪歌を忘れたカナリアは♪という歌がありましたが、「明日には歌う」に違いない「金糸雀」は、今は籠のなかで静かに眠っているのでしょう。「～と～と」という並立と切れのない型が、一句の内容にも似合っています。

春の月花のかたちの蒙古斑　ふづき

「蒙古斑」は赤ん坊のお尻にある青い痣のこと。大きくなっていくうちに消えていくものですが、その「蒙古斑」が何かの「花のかたち」に似ているという小さな発見。赤ん坊のもも いろのお尻、もも いろの「花」、俳句で「花」といえば桜を指しますから、その連想もまた「春」のイメージに繋がります。潤んだような「春の月」が、しっとりと美しい夜です。

病む姉の春の月へと横たはる　てん点

この句の眼目は「春の月へと」という表現。「病む姉」が寝ていて、そのベッドの向こうに「春の月」が見えるという単純な光景にしてないのが、「～へと」という措辞でしょう。「へ」は動作の方向、「と」は変化の結果を意味しますから、「春の月」へ向かってその場所へと今、横たわった…というニュアンス。「病む姉」の実体が「春の月」のように柔らかい微光を発しているような印象もあり、「春」という一語の感触に救われた心持ちになりました。

退院前夜色あるものは春の月　初蒸気

いよいよ明日が「退院」という夜。「色あるものは春の月」ということは、色のないものが別にあるということ？ 病院の白い壁、我が家ではない場所、そこで過ごした日々、それらに対して「退院前夜」の「春の月」は「色あるもの」として作者の心に息づいているのでしょう。明日の夜は、我が家で見ることができる「春の月」でありますね。

春の月光の縺れあつてゐる　樫の木

さて、皆さんはこの句をどこで切って読みますか。「春の月」で切って「光の縺（もつ）れあつてゐる」と読めば五七五のリズムになりますが、「春の月光（げっこう）の縺れあつてゐる」と読むと、八八の破調となります。

「春の月」の「光」は柔らかく、あえかで、かすかな湿度をおびていて、月光の一筋ひとすじは細い絹糸のように縺れ合っている、という感覚がいかにも繊細な一句。これは好みの問題になってくるのかもしれませんが、ワタシは断然「春の月光」と読みたい派です。なだれるような声調が一句の心をさらにかきたてると思うのですが、いかがでしょうか。

第6回　2013年2月28日週の兼題

鳥帰（とりかえ）る

天

大阿蘇は凹んだ目当て鳥帰る　樫の木

今、眼下にあるのは「大阿蘇」の火口です。「凹んだ」ドームのような山影、広がる山裾が下萌の草千里へと続く広大な光景。来年戻ってくる日の「目当て」として、凹んだ「大阿蘇」を目の奥に刻みつけ、「鳥」たちの編隊は悠々と北を目指します。

試みに下五を「鳥雲に」としてみましょう。一見似た光景ですが、作品の鮮度は俄然落ちます。「鳥雲に」は人間の側から渡り鳥の遠ざかる空を眺める視点の季語ですが、中七「凹んだ目当て」は鳥の視線に成りきっての表現。この一句には、季語「鳥帰る」にある主体的な鳥の存在が必要だということです。「鳥」自身の俯瞰として眺めるとき、春の「大阿蘇」の凹みの、なんと雄大な優しさでありましょう。

地

鳥帰る國の都に塔数多　ポメロ親父

「鳥帰る國」はロシアを想像しました。その「都」には「数多（あまた）」の「塔」が立ち並んでいるよという一句ですが、まるで「鳥」たちの脳裏を透視してその光景を眺めているかのような感触を受けとめました。「國」の旧字が古い都を思わせ、鳥たちの帰心を募らせます。

銃声の聞こえる方へ鳥帰る　いーなん

「鳥」が「帰る」のですから、「〇〇の方へ」という発想も当然でてきますが、「銃声の聞こえる方へ」の措辞に胸が痛みます。「例えその地が戦争をしていても鳥たちは帰らなければなりません」と語る作者いーなんさん。生々しい「銃声」を思う時、「鳥雲に」という茫洋たる気分ではなく、一羽一羽の「鳥」という存在が感じ取られる季語「鳥帰る」の力が生きているなと感じます。

銅像の指差すほうへ鳥帰る　ひで

「boys be ambitious! のイメージで詠みました。『鳥帰る』という季語には『帰る』という淋しげな言葉が入っていますが、どこか希望に満ちた旅立ちのような印象を受けます」と語るのが大学生俳人ひで君。「鳥帰る」という季語の成分には（その分量の過多はともかく、鳥の側に立って考えれば）、なるほど「どこか希望に満ちた旅立ちのような印象」も含まれているかもしれません。「銅像の指差すほうへ」という措辞に、その思いが読み取れる一句です。

鳥帰る方へ線路の伸びてゆく　紗蘭

オーストラリアから参加の紗蘭ちゃんは、中学生俳人。先ほどの一句に続くこの句を読んで、若い人たちは「鳥帰る」という季語にどこかを目指して伸びていく希望めいたイメージを受け取るのだなあと、納得しました。「鳥帰る方へ」と空を指し、足元の「線路」へと視線を移し、下五「伸びてゆく」の措辞が一句に奥行きを生み出す。この映像の作り方に工夫がある一句です。

イヤホンの中だけの歌鳥帰る　ミル

季語「鳥帰る」に聴覚の気分を感じ取る人たちもいました。「イヤホンの中だけ」に溢れている「歌」は、耳の中でぐるぐると反響します。「イヤホンの中」から出られない音、その音とは隔絶された空を帰っていく「鳥」。二つの事実が小さな詩を織りなします。

鳥帰る内耳磁石のルビー色　めいおう星

「内耳磁石」は人工内耳に使用される「磁石」と読みました。人間の「内耳」に代わる働きをするものの一部が「ルビー色」であるという小さな発見。その色の鮮やかさが強く印象に残ります。

帰っていく「鳥」たちは体内に独特の方位磁石を持っていて、自分の帰るべき国をまっしぐらに目指しますが、ひょっとすると彼等の「内耳」にも同じ

「ルビー色」の「磁石」が入っているのかもしれないと、そんな想像もしました。

鳥帰る窓辺の椅子は海の色　小野更紗

「鳥帰る窓辺」に「椅子」が置いてある、という発想の句はあろうかと思いますが、下五「海の色」によって、一句にささやかなオリジナリティが生まれます。春の淡い海の色を思う人もいれば、北国の冷たい海の色、南国のコバルトブルーの海の色を思う人もいるでしょう。「鳥帰る」という季語は、そんなさまざまな「海の色」への思いを広げてくれます。

ギターケースに投げこむコイン鳥帰る　鯛飯

「ギターケース」の内側の真っ赤な天鵞絨（ビロード）、そこに投げ込まれる「コイン」の銀色。ギターが演奏するのは、美しくもメランコリックな曲なのでしょう。「鳥帰る」という季語の力がそのような想像を広げます。

「鶴は帰って行ってるようですが、カモやツグミ、冬の小鳥たちはまだ楽しめます」という情報も添えてくれたバーダー俳人鯛飯さんです。

鳥帰るまた八人の村となる　道草

中七下五「また八人の村となる」という措辞に愕然たるリアリティを感じます。「八人」の中で夫婦なのはせいぜい二組か二組、あとは独居の村人たちに違いないと。老人ばかりの限界集落を思わせる「八人の村」、数詞の力、恐るべしの一句です。

山裾の天地返しや鳥帰る　あねご

「天地返し」とは何か？ 作者のコメントでその意味を初めて知りました。『「天地返し」という言葉を知ったので忘れんように俳句にしました。耕地の土を深く耕して表層と下層の土を入れ替えることだそうです』と作者あねごさん。「山裾」の畑を耕す姿だけだと平凡な句になりますが、「天地返し」という言葉の持つイメージが、「山裾」「鳥帰る」どちらの言葉にも響き合い、一句に独特の個性を獲得させます。

その気無きに三羽含め鳥帰る　めろ

読んだとたん、一人爆笑してしまいました。そうだよな、あの鳥の群れの中には「オレ、ここに居てもいいんだけど…」なんて思ってるヤツがいるに違いないよ（笑）。「周りについつられて飛び立ったはいいけど、それが北へ帰る覚悟を決めた集団だったとは…今さら『ち、ちがいます』とは言えず…とほほ。こんな鳥、この前見ました。」と断言するめろさんです（笑）。

ざらざらの日本列島鳥帰る　逸子

帰っていく「鳥」の目から俯瞰すれば、こんな感触かもしれないなあ。ちょうどこの季節、「日本列島」は黄砂に見舞われます。昨今はさらに有害物質だ放射能だと「ざらざら」したニュースばかり。果たして鳥たちは「ざらざらの日本列島」に来年も戻って来てくれるのでしょうか。

第7回　2013年3月7日週の兼題

春愁（しゅんしゅう）

天

春愁の嚢ペリカンの嘴　めいおう星

「春愁」を描く表現として、「嚢」の一語がでてくることに驚きます。そもそも「春愁の嚢（ふくろ）」とは何でしょう。同じ読み方をする「袋」はモノですが、「嚢」は肉体の部位めいた印象があります。かたや「ペリカンの嘴」ですが、下嘴から喉にかけての袋状の皮膚が咽喉嚢と呼ばれることを今回初めて知りました。そうか、これも「嚢」か！となれば、一句の読みが俄然動き出します。

「ペリカン」が大量の魚を「嘴」から喉へ詰め込むように、「春愁」という名の生き物は、色とりどりの物思いを食い尽くし、己の「嚢」に溜め込みます。その飽くことの無い食欲は、やがて己自身を食い尽くすのか…と、そんな妄想をも抱かせてくれた一句です。

地

春愁のボクサー走る走る走る　理酔

鍛えられた肉体にやどる「春愁」という発想、言われてみればこれもあり！ですね。

「春愁」に取り憑かれた「ボクサー」ならば、ランニングではなく、サンドバッグ等を「殴る」行為でもいいのでは？とも思ったのですが、「殴る」「叩く」「撃つ」といった相手へ向けられる攻撃性は、「春愁」の感触とは違うのかもしれないと考え直しました。

「春愁のボクサー殴る殴る殴る」は当たり前といえば当たり前だし、読み方を間違えると…傷害罪みたいだし（笑）、「走る走る走る」と畳かける勢いが「ボクサー」の「春愁」を美しく昇華していくなと納得。読めば読むほど好きになった作品です。

皇后の屈みて歩む春愁　登美子

一読、ハッと「皇后」さまの前屈みの立ち姿、白髪交じりのまとめ髪、天皇陛下の少し後を静かに「歩む」姿がありありと浮かんできました。あの風貌、品位、立ち居振る舞いの中に「春愁」という季語の核となる感覚があるのだという感知に、共感を覚えます。「春愁」という季語には気品の要素もあったのだなあと、認識を新たにした次第です。

ジャックにもキングにも髭はうれひ　ローストビーフ

トランプの「ジャック」と「キング」にある「髭」を物憂い気分で眺めながら、トランプ占いでもしているのでしょうか。「髭」のない「クイーン」が、隣の「ジャック」と「キング」を横目で眺めながら「はうれひ」に囚われている、と読んでも面白いかもしれません。

トランプの色合いは、ハートあるいはダイヤの赤を想像しました。季語の持つ春の気分ゆえの連想でしょうか。

春愁もろともにだるまウヰスキー　もね

「だるまといえば、昔は高級ウイスキー。ちょびちょび飲んでましたが、今では二気飲みもできるような大衆酒になりました」と語るもねさん。確かに、私たちが若い頃はそうでしたねえ。

「春愁（しゅんしゅう）もろともに／だるまウヰスキー」と、9・8のリズムで読みました。起き上がり小法師めいた「だるま」という愛称が何度でも押し寄せてくる「春愁」の気分に似合うのだなあと納得。「春愁」も「もろともに」飲みこんだつもりでも、なかなか晴れはしないのが「春愁」という感情です。

春愁の自画像は雲を見ている　大五郎

「自画像は雲を見ている春愁、自画像の雲をみる眼や春愁、色々考えましたが、自分の気分は、この句です」と作句工房を明かす大五郎さん。5・5・7のリズムを選んだ掲出句が、自分の表現したい内容に一番似合っているという判断に共感します。他の二句との一番の違いは、季語「春愁」を「自画像」の表情として機能させた点です。「春愁の自画像」の措辞から表情が想像できるので、後半「雲を見ている」に説得力が生まれるのでしょう。

春愁の数だけ耳鼻科に列できる　だいあ

「春愁って、花粉症みたいなものですか？」と問いかける小学生俳人だいあちゃん。「春愁」で元気のない大人たちは、神経内科じゃなくて「耳鼻科」に行って鼻の奥をシュシュと洗ってもらったら治ってしまうんじゃないの、なんて発想が実に愉快。さらに「春愁の数だけ」という表現で、この発想を詩にしてしまってるのだから、大したものではありませんか。

春愁や夕日見ながら立っている　ソウソウ

「いつもあそぶともだちが、ケガしたり、ならいごとでいなかったりしたので、こうえんで一人であそんで、夕日を見て立っていました」と語るのは、四月から二年生になるソウソウ君。「春愁」って

どんな気持ちなんだろう…と考えていると、ある日の「夕日」の光景を思い出したのでしょう。「夕日見ながら立っている」と自分自身を客観的に描写する力が、一句を詩にしました。小さな俳人たち侮れませんね！

カーテンに巻かれて息す春愁　ミル

子どもたちの感じ取る「春愁」に近いイメージで読みました。おうちの中でかくれんぼしてて、隠れるとこなくなって「カーテン」に「巻かれて」いる感じ！(笑)

後半の「息す」で、ちょっと埃を吸ってそうな「カーテン」の匂いをありありと追体験したのですが、大人が作った句だとわかって、イメージが大いに変わりました。かなり（アブナイ?）重傷の「春愁」か、コケティシュな女性の「春愁」か。それもまた味わいです。

同時投句は感覚的な一句。「春愁が通る喉の鈴鳴らして」

春愁の臍の緒どこに仕舞ったつけ　初蒸気

「臍の緒どこに仕舞ったつけ」という台詞は、我が子の臍の緒を入れた木箱のことがふと気になり呟いたものかもしれません。

が、上五に「春愁の」がくっつくことで、一句は大きく変質します。「春愁」そのものが生まれてくる時に「臍の緒」を残しており、「春愁」が鎌首を持ち上げる頃になると「臍の緒」は小さな木箱の中でしくしくと泣き出す…なんて妄想が頭の中で動き出し、ワタクシ、しばらく呆然（苦笑）。詩という化け物もまた「臍の緒」を持っているのかもしれず…ああ実に、怖ろしいことでございますよ、皆さん。

同時投句もヒタヒタと怖い。「本閉じるみたく死ぬから春愁ひ」

春愁や亀にも臍があるという　睡花

え、ほんとに?と思えば「大きくなるとなくなるそうです」とのコメントも添えられておりました。「亀にも臍がある」となれば「亀にも」春の愁いがあるのではないか、との読みも生まれてきます。「春愁」に捕らえられた「亀」は自分に「臍」があることの不思議を悩むのでしょうか、それとも無くなってしまった「臍」を思って憂うのでありましょうか。

同時投句は、はろばろと美しい一句。「空と海溶け合うところ春愁う」

残りたる胃のほのかろし春うれい　のり茶づけ

「残りたる胃」ですから手術で切り取った胃。手術後の胃の違和感を「ほのかろし」と自在に言いとめたところが巧い一句。ほのかな俳味もあります。「残りたる」「ほのかろし」など選ばれるべき言葉が選ばれ、各々が置かれるべき位置に置かれている確かさを誉めたいですね。「残りたる胃」と共に生きていく覚悟を決めるための「春うれい」かもしれません。

春愁ひ鏡に映る吾磨き　舞

「春愁」と「鏡」を取り合わせた句は幾つかあったのですが、これを「地」に推させて頂きました。「春愁」という季語の世界に置かれた「鏡」に「吾」が映っているだけでは物足りないですが、最後の「磨き」という行為にオリジナリティが添ってきます。「鏡に映る吾」をどんなに磨いたところで「春愁」が晴れるはずもありませんが、こんな日は身体を動かすのがいいのだ!と割り切ってキュッキュッと磨き続ける作者なのでしょう。

同時投句は、ユーモラスな一句。「鍵三つかけて春愁忘れけり」

第8回　2013年3月14日週の兼題

万愚節（ばんぐせつ）

天

万愚節の雲獅子になり熊になり　甘えび

誰をだましても良い日という意味だけが一人歩きしがちな季語「万愚節＝エイプリルフール」ですが、考えてみれば四月一日は春という季節のど真ん中。本来この季語が種別として持つ春の明るさに思いを馳せれば、こんな一句に心がそよぎました。

今日は、どんな嘘をついても叱られない日。どんな嘘をつけば皆がビックリするだろう、面白がってくれるだろう、そんなことを考えながら見上げる空。水色の春空に浮かぶ「雲」は、ときに「獅子」となり、ときに「熊」となり、ぐんぐんと流れていきます。

流れる雲を描く句は沢山ありますが、「万愚節」がこんなにも豊かで爽快な季語であることを教えてくれた作品に、心からの感謝。

地

万愚節くらやみに咲く静電気　めいおう星

一読ドキッとしました。先ほどの「天」の句が季語「万愚節」の光の部分だとすれば、こちらは影の感情を描いた一句といえるでしょう。「万愚」という言葉そのものが「くらやみに咲く静電気」のようだ、という比喩の感覚にも驚きましたが、「静電気」の起こるさまを「咲く」という動詞で描写した感性にも脱帽します。

自分の言いたいことを一句にぐちゃぐちゃ押し込めないと気が済まない時期もあったこの作家、どうやら何かを掴んだのではないかと、嬉しい予感のする春であります。

万愚節魚を綺麗に食べる人　ヤッチー

「魚を綺麗に食べる人」って、ほんと半端ないぐらい骨格だけ残しますよね。それを箸ではなく、ナイフとフォークでやってのける人に出会うと、もう驚嘆です！

「魚を綺麗に食べる人」というフレーズに「万愚節」を取り合わせたのは…確かに天晴れだけど、ちと呆れる!?ってニュアンスではないかなと読んだのですが、作者の意図はどうだったでしょう?

「フランス語では『4月の魚』というらしい」とのコメントが添えられていたので、調べてみました。フランス人の洒落っ気と反骨に溢れた面白いエピソード。また一つ物知りになったな～ヤッチーさん、ありがとう～♪

万愚節炎使わぬ暮らしして　鞠月

電化住宅を意味するのか、調理されたものを買ってくれば足りる生活を意味するのか…は、ともかく、「炎使わぬ暮らし」が成立していることに、ふと疑問を持つ作者。

かつて人類は「炎」を手にし、そこから文明を手にしてきました。今、「炎を使わぬ暮らし」を手に入れた末に、人類が支払った代償とは何だったのか、そんな作者の自問自答が漏れくる一句です。

万愚節電波時計は狂わない　樫の木

先ほどの鞠月さんの句の根底にある思いが、この句にも読み取れます。しょっちゅう狂う時計も困るけど、一秒の誤差もない時計がどれほど役立つというのだろうか、という反問。季語「万愚節」との取り合わせに、その意識がありありと読み取れます。

『電波時計の誤差は10万年に1秒！』と言うが、日常生活にはそんな正確さは必要ない。『太陽電池式の腕時計は半永久的に電池交換の必要が無い！』と宣伝しているが、その前に腕時計自体が壊れる。どうも世の中がおかしなってきているような…」と呟く樫の木くんです。

九十二の元素数える万愚節　しまうま海道

『『元素図鑑・宇宙』は92この元素でできている』というベストセラーの図鑑をこどもの教育用に買いましたが、親の私しか読みません」というコメントが可笑しいよ、しまうま海道くん。その図鑑によると【自然界を構成するのは92個の元素であり、92番目はウラン】なのだそうです。

ふん、成る程ね…というしかないワタクシですが（笑）、あんなこんなの科学的事実がなんとも認知しにくいよ、とい

う実感もまた「万愚節」の気分。「九十二」は、なにも理解できぬ俗人を小馬鹿にしているかのような数詞でありますなあ(笑)。

山羊の目が疑っている万愚節　猫ふぐ

ヤギ族には申し訳ない偏見ですが、「山羊の目」って非常に陰険だと思います。ついでに言うと、ウサギの目はもっと陰険だ!と思っているのですが、この意見に関しては、ウチの娘が猛烈に反対します。

ま、そんなことはともかく、その陰険な「山羊の目」が「疑っている」のですから、半端じゃない疑い方です(笑)。そんな「山羊の目」と遭遇して、いやいや嘘じゃないから!と心の中で思わず言い訳してる「万愚節」の滑稽。

万愚節光線銃が火を噴けば　ポメロ親父

漫画、ゲーム、映画、いろんな場面が想定できるんだけど、一読オモチャの「光線銃」を思いました。TVのナントカ戦隊を模したようなので、派手な色のランプが点いたり唸ったりするヤツです。

未来の世界では「光線銃」が「火」を噴いて地球を守るらしいが、その空想自体が、戦というものは終わることがないという万愚の証ではないのか。そんな皮肉な思いの混じる一句かもしれません。

カテーテルのしづかに沈む万愚節　毬

「カテーテル」とは【体腔または器官の内容液を排出するために用いる管】であると辞典には解説してありますが、様々な用途に合わせて様々な形のものがあるそうです。

中七の「しづかに沈む」という措辞から想像した「カテーテル」は、【血管内に造影剤や薬剤を注入する目的で用いる】タイプのもの。「カテーテル」の先端のちょっと曲がったさまを生々しく思い出したのは、数ヶ月前に私がそれを経験したせいでしょうか。

自分の身体にこんなモノが「沈む」という事実の不思議と不可解。その気分に「万愚節」を感じ取っての取り合わせでありましょうか。

「万愚節は我が誕生日です(^^)」という毬さん、おめでとう〜♪

万愚節そんな町などありません　理酔

方向音痴なのか、ワタクシ地図を片手にしょっちゅう立ち往生します。そんなホテルはないよ、その町は駅の反対側です、と言われることは数知れず。掲出句もそんな場面に違いないと軽く読んでいたのですが、実は怖ろしい寓意を含んだ句であることにハタと気づきました。

確かに今朝、自分はその「町」にある自分の家を出たのに、その「町」が無い…。夜の闇に忽然と「町」が消えたというホラーサスペンス…と、ここまで考え、更に愕然となりました。

あの三月十一日、私たち日本人は皆この光景を目の当たりにしたではありませんか。季語「万愚節」が内包する残酷が、「そんな町などありません」という絶望の呻きを絞り出す苦い後味の一句。

万愚節長い長い夢を見た　なかさん

先ほどの理酔くんの句のように、震災の光景を重ねて読むこともできるのですが、むしろそのような限定を外した方が、掲出句の奥行きは広がるのではないかと考えます。

ここまで人生を歩んできて、自分は今までなんと「長い長い夢」を見続けてきたのかと愕然とすること、あるのではないでしょうか。なんでこんな簡単なことに気づかなかったんだろう、なぜこんな身近にあるシアワセが見えなかったんだろう、なぜあんなにも人を憎んでしまったんだろう。様々な「長い長い夢」から覚めた時、私たちは初めて他愛なくも明るい「万愚節」を心から楽しむことができるのではないかと思います。

第9回　2013年3月21日週の兼題

芹（せり）

天

揃えては白き芹の根水へ打つ　のり茶づけ

「芹」とつぶやくだけで、あの独特の香気、田の畦や湿地、水辺にわさわさと緑を溢れさせる光景がたちどころに浮かんできますが、この句に描かれている「白き芹の根」もまた大きな特徴の一つです。「根白草」とも呼ばれるこの長い根が実は一番美味しいんだよ、と教えてくれた北国の友人の言葉を思い出します。

引き抜いた「芹」には泥がついています。その泥をせせらぎの水で洗っているだけの光景ですが、「揃えては〜水へ打つ」という描写の臨場感にハッとします。競り合うように繁茂する「芹」を、抜いては揃える行為が繰り返されていることを表現する「揃えては」という措辞の巧さ。さらに「水へ打つ」の「へ」という助詞は、水に向かってという方向を示しますので、この助詞一つで勢いが生まれます。仮に「水に打つ」としてみれば、その勢いの違いは一目瞭然。さりげなくもこまやかな描写の工夫が行き届いた作品です。

地

芹ぱつと放ちみちのく生まれかな　舞

「芹ぱつと放ち」が水に放ったのか、鍋に入れたのか。「生まれかな」は「芹」のことか、放った人のことか。そこを敢えて明確にしない点が一長一短ではありますが、「ぱつと放ち」から「みちのく生まれかな」の調べが生き生きと美しい一句。「みちのく」の響きに「芹」の香りが広がっていくかのような心地がいたします。

同時投句「芹の香を放つ味噌汁筑波山」は、「味噌汁」なんだから「葱」でもいいじゃないかという意見もでてくるとは思いますが、それだとベタ。「芹の香」は「筑波山」という地名に新鮮な響きを与えると感じるのですが、いかがでしょうか。

芹濡るる石鎚の神宿る水　てんきゅう

こちらは「石鎚」という地名を入れての一句。石鎚山は四国の真ん中にある山で、近畿以西の西日本最高峰です。古くから山岳信仰の山とされ、腰に法螺貝を下げた修験者に出会うこともある山です。

上五「芹濡るる」は連体形。最後の「水」にかかっていくと判断すればよいでしょう。「芹濡るる(水とは)石鎚の神(が)宿る水(であるよ)」と読ませて頂きました。「神宿る水」に育まれた美しい水が育てる、野生の「芹」。その香気を一際鮮やかに感じさせるのが「石鎚」という地名の響きでありましょう。

芹の瀬にすすげば鍬のしろがねに　ふづき

「芹の水」ではなく「芹の瀬」という表現に、ささやかな水の勢いを感じます。「鍬」を洗っているのは田のそばの用水路か、小川か。「鍬のしろがねに」が、「芹」の繁る色合いの対比としてきれいですね。「鍬」を洗い終われば、夕餉の足しにちょいと「芹」を摘んで帰る、そんな夕暮れであります。

芹洗ふ先へ先へと空のあを　みなと

「堰の付近に芹が生えるのですが、その堰で簡単に洗って持ち帰ります」と語るみなとさん。その堰の水に「空のあを」が映っているのですね。「芹洗ふ」という動作を提示したあとの「先へ先へ」という視線の誘導が巧みな一句。「芹」を洗う水のゆらぎに「空のあを」も揺らぎます。

雨や雨や喉まで水に浸かる芹　初蒸気

春出水でしょうか、菜種梅雨の続く光景でしょうか。「雨や雨や」という嘆きの詠嘆が、そんな季語を想起させます。中七「喉まで水に浸かる」で自分自身の「喉」に水が迫っているのかと思いきや、それが「芹」だと分かる最後の一字。己が「芹」になったかのような体感を、強引に感知させるのがこの句の企み。それにまんまとハマって楽しむのが読者の特権というヤツです。

この風はヒマラヤ生まれ芹育つ　神楽坂リンダ

「芹」は三春の季語ですが、早春の「風」を感じないではいられない一句。上五「この風」という表現で、読者を「この風」の中に立たせ、「ヒマラヤ」という地名の遥かな気分を味わわせ、さらに足元の湿地に育つ「芹」の鮮やかな緑へと視線を誘う構成、よく考えられています。下五「育つ」の措辞も生命感に溢れた動詞です。

同時投句「特別な日ではなけれど芹を摘む」もささやかな実感。

芹を摘む吾は太陽の子と思う　ぽたん

「芹」の緑を「摘む」ときの心楽しさを「吾は太陽の子と思う」と言い放つ、なんと大らかな賛歌でありましょうか。私は、子どもの頃、蓬を摘みサンキライの葉を採るために、祖母さんと一緒によく山に行きましたが、その時の感覚がまさにこれでした！

「背中に太陽を受けて芹を摘んでいると、この世にいるのは一人きりのような静けさで、幸福感がありました。子供の頃の懐かしい記憶です」と語るぽたんさんの思いが、そのまま凝縮された一句です。

都会の灯限りなく続き芹などは　金銀パール

「芹」を探して河岸を歩いてはみるものの、「都会の灯」は「限りなく」続くばかり。そんな光景を思い浮かべましたが、望郷などという穏やかな言葉は、この句に馴染みません。都会に暮らす大半が地方の人間であるという事実を思えば、一句の根底には救いがたい淋しさが沈殿していることに気づきます。切れのない型が、その虚無感と呼応します。

七草に先ず芹のあり青き空　輝女

「芹」という兼題に挑むために「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ、春の七草」を口ずさんだ人も多かったでしょう。この系統の発想からは、この一句を「地」に推しました。

「七草に先ず芹のあり」という言い切りの潔さに加え、下五「青き空」を配することで「芹」の光景を映像化しようと意図したのが、この句の手柄。春の七草の最初に出てくる「芹」の清々しさが「青き空」に呼応します。

芹ららら歌いたくなるまな板よ　ミル

「芹」というと七草粥を思う人もたくさんいました。この発想のラインでは、この句を推したいなあ！「芹ららら」の楽しい調べが、そのまま「歌いたくなる」という措辞に乗っかり、さらに「まな板」の音へと転化していく。「まな板よ」という詠嘆も楽しい一句。「まな板」で刻まれていく「芹」の青さも想像されます。

第10回　2013年3月28日週の兼題

頬白（ほおじろ）

天

頬白の来て大楠へご注進　すな恵

「頬白」の特徴といえば、「一筆啓上つかまつり候」「源平つつじ白つつじ」と聞き做される鳴き声。歌舞伎役者の隈取りのような黒い過眼線と白い頬。四名鳥の一つに数えられているほどの囀りの美しさ。こんなふうに数え上げていくと、「大楠へご注進」という後半の擬人化が、ますます可愛く思えてきませんか。

イッピツケイジョウとやってきた「頬白」が梢にとまります。「大楠」はまるでお殿様みたいに聳えています。何を「ご注進」してるの？という発想、助詞「へ」の効果、時代がかった「ご注進」という言葉の俳味が、一句の愉快な仕掛け。「大楠」のそこここでさらに賑やかな「ご注進」が始まりそうな心楽しい作品です。

地

頬白へあづけるけさの青き空　神楽坂リンダ

「頬白へあづける」という措辞は、梢に止まっている「頬白」を見上げる視線。背後に広がる「青い空」を「頬白」に預け、わたくしはここで「頬白」が存分に鳴くのを聴いていたい、という思いなのでしょう。

「頬白の囀りは最高ですね。写真が撮れたらなおのこと嬉しいです」と語る神楽坂リンダさんは、バーダー俳人。先だっての『第2回瀬戸内・松山写真俳句コンテスト』自由句部門の最優秀賞をとったのは素敵なツグミの写真でした。

頬白の縄張りことに空が澄む　まとむ

どうもこの辺は「頬白の縄張り」らしいよと耳を澄ませ、一体どの梢で鳴いているのかと、声の方向を探ります。「頬白の縄張り」だと分かると、尚更「空」が澄んでいるように感じられる、という句意に詩的実感を受け止めます。澄んだ「空」は、「頬白」の声を遥かまで響かせているのでしょう。

「うちの近所で一番よく鳴いている鳥だと思われます。姿はよう見ませんが、鳴き声は頬白でまちがいないです。囀りを聞くたび日土に嫁に来て良かったぁと思います」と語るまとむさんは蜜柑農家。八幡浜市日土は、愛媛県の蜜柑産地の一つです。

頬白やざらざらしたる空睨む　もね

こちらは、しっかりと姿を見つけての一句。背後の「ざらざらしたる空」は黄砂でしょうか。「ざらざら」に呼応するように置かれているのが動詞「睨む」。黒い隈取りのある目で「頬白」は、何を思って「空」を睨んでいるのでありましょうか。

「バードウォッチングを初めて二年、双眼鏡を買って半年。鳥の名前をすぐに忘れますが、頬白はわかりました」と語るもねさんもバーダー俳人でしたか。鳥の名前が分かるようになると、吟行がまたまた楽しくなりますよね～♪

頬白と頬白の間にいるらしい　カリメロ

勿論「鶯と鶯の間にいるらしい」でも句として成立するのですが、「頬白」の鳴き声が「一筆啓上つかまつり候」と聞き做されていることを思うと、二羽の鳴き交わすさまに俳諧味が生まれます。作者と一緒にこの場に立って「頬白」の声を楽しんでいるかのような俳句的空間移動。それを味わわせてくれたのが、一見説明的にも思える「～の間にいるらしい」という措辞の力か、と思います。

頬白は梢引越しは終了　めろ

「頬白は梢」で切れると読みました。「頬白」自身の「引越し」という読みも否定はできないのですが、新しい土地にきて、新しい部屋のガラス窓から見える「頬白」だと読んだほうが、季語が生きてくるのではないかと思います。「引越しは終了」の安堵感に「頬白」の鳴き声は付かず離れずの明るさ。明日からは毎日、一筆啓上と鳴く小さな鳥と朝の挨拶を交わす生活が始まります。

「頬白の囀りが一番好きです。一番目はセグロセキレイ。う～ん庶民的。雀はすっかり少なくなりましたが、その代りといえばなんですが、わが村では頬白とカワラヒワとムクドリが増えています。全くたくましい奴らです」と語るめろさんは、鳥の言葉が分かる人らしいです（笑）。

同時投句も愉快なめろさんです。「頬白やときに大雑把な御空」

削岩機を鳴らせ頬白よ唄え　根子屋

「削岩機」が鳴り続けているのに「頬白」が囀り続けている、こんな場面に出くわすと、俳人の心は躍ります。「解体現場の騒音に負けまいと鳴く頬白に遭遇。二つの異質な音がぶつかり合い、春という一つの曲を奏でているように聴こえました。想像だけで作句するなら、季語は雲雀が似合いそうですが」と語る根子屋さんですが、いえいえ、この句には季語の現場に立った実感がパッキングされています。「鳴らせ～唄え」という命令形の強さが二つの異質な音の出会いを強調。「頬白」の小さな体、裂けそうなほどに開いた口、高らかな声が、意外性を保証します。

頬白の無職の人の家に来る　小木さん

「つげ義春さんの漫画『無能の人』のシーンにあるホオジロ。4月1日から無職になったぼくんちへ来て欲しいなあ」と語る小木さん。「頬白」がイッピツケイジョウといいながら「無職の人の家」を尋ねてくるという思いに惹かれます。「無職」という言葉が持つ不安、苛立たしさ、淋しさのイメージを、「頬白」の声は明るく慰め、明日からは何でもやりたいことができる日々が始まるのですよ、と囀っているようにも思えてきました。

頬白と共の朝餉や神の邦　藻川亭河童

「神の邦」とはどんな場所でしょう。神がそこにいるかのような美しい場所でしょうか。南の楽園のような島でもいいし、山に囲まれた神殿古墳を思ってもいいでしょう。「頬白」は囀りが美しいことから四名鳥の二つに数えられているそうですが、「頬白」も人も同じ生かされる者として、美しい祈りを捧げてから、静かな「朝餉」が始まるのです。

花時計頬白の尾の見え隠れ　はまゆう

「頬白」と名がついているわけですから、その貌の特徴で季語の必然性を主張するというのはすぐに思いつく一手。が、その逆の迫り方もあるぞという一句です。

ほら、今「花時計」の12時の黄色のパンジーのとこに見えるのが「頬白の尾」だよ！なんて言われても、ええー？だよね（笑）。でも、それを教えてくれた人は「頬白」がそこに潜り込む前からずっとその動きを見ていて、あ！あそこに！って嬉しくなったんだと思います。誰かに教えたくなった小さな瞬間を、切りとった一句。あ、ほんとだ、頬が白い！なんて一緒に喜ぶ姿まで心楽しく想像しました。

頬白の三度バウンドして花へ　ミル

下五に「花」とあるのでどうしても桜を想像してしまい、桜を想像すると「頬白」ではなくメジロが集まってくる様子が思い出されるのですが、小さな鳥が「三度バウンドして花へ」という動きの描写の鮮度に感嘆します。小さな体とバネのような花の枝。なんとも鮮やかな一瞬です。

第11回　2013年4月4日週の兼題

種蒔（たねまき）

天

種蒔に始まる水の季節かな　酔う太

「種選」や「種浸し」も「種蒔」に先立って行われる作業ですが、昨今はそれら全てを農協にまかせ、田植機用の苗を購入するのが一般的農家の現状のようです。が、「種蒔」という季語本来の姿を思う時、「種蒔」から「水の季節」が始まるという一句の措辞は、瑞々しい実感に充ちています。

「種蒔」と並行して、「田打」をし「田掻」をし「畦塗」をし田に水を入れる準備をする。その後に、日本中の水田という水田に水が満たされる「水の季節」が訪れます。「種蒔」という季語を起点とする「水の季節かな」の詠嘆が日本の水田の光景を静かに広げていく、この豊かさな一句のなんと美しい余韻でありましょうか。

地

種蒔を終えて淡路島を捨てた　吾平

「種蒔を終えて」という措辞にある「やるだけのことはやって」的ニュアンスがどうにもこうにもフィクションっぽいんだけど、こんな発想の句が出てくると思ってなかったので、思わずニヤリ！

「淡路島」という地名が妙にリアルなのは、人生下根性サクセスストーリーの舞台として、イメージしやすいからなんだろうか。この一句からドラマの脚本が一本書けそうだよ（笑）。

逞しき足斎田の種を蒔く　水

「斎田（さいでん）」とは【神に供える米を栽培する田】のこと。このような田を持つ神社は日本各地にありますが、有名なのはやはり伊勢神宮でしょう。「斎田」の一語から広がる光景は、「逞しき足」の持ち主が着ているであろう白装束や、周りをとりまく人々のさまも想像させます。

「今日迄、本当に句が出来なくてアズっていた処に、日本風土記の番組でたまたま伊勢神宮の籾蒔き、田植を見ました。渡りに船の感でした。」という水さんです。

日の出づる国に宮さま種蒔けり　ふづき

「宮さま」を親王の意にとれば、「日の出づる国の宮さま＝日本の国の天皇陛下」の「種蒔」の儀式をニュース映像で見ての一句かもしれませんね。

勿論、宮中での田にまつわる儀式は、田植え、稲刈りと続くわけですから、「種蒔」以外の作業でも良いではないかと言われればその通りなのですが、「日の出づる国」という言葉に対して、ここから始まる「種蒔」のイメージは、悪くない取り合わせだといえましょう。

種蒔きて指の間に残る種　めろ

今の「種蒔」は機械なり器具なりを使ってのものですから、このような「種蒔」の実感は、絶滅寸前の体験というべきでしょうか。「花種蒔く」等とは全く違う実感を伴っているのが「指の間に残る」という措辞。種籾を掴み、まんべんなく苗床に蒔いていく作業だからこその感触です。

手元の歳時記に「指先を流るる如し種を蒔く／野村泊月」という句が載っていますが、めろさんの一句はこのような作業の後の、ささやかな実体験。「手を洗うと1、2粒洗面器の底にひらひら沈みました」も貴重な季語体験だなあ。

同時投句「種蒔や実の半分の田に沈む」

食べたくなるような土に種を蒔く　猫ふぐ

この実感にも共感！初めて苗代の土を見た時、こんなきれいな土があって、こんなきれいに均すことができるんだと感心しました。あの時の「土」を「食べたくなるような土」と表現するなんて思いもつきませんでしたが、こう言われてみると、言い得て妙。「土」への思いが、そのまま「種」への思いに繋がります。

同時投句「種蒔やどこぞえん嫁おらんかの」

土食いし軍手を脱いで種を蒔く　理酔

土を整え、土を均す作業を終えると、「軍手」の指には土がもったりとこびりつきます。「土食いし軍手」のままでは「種を蒔く」作業もままならず。次の作業に移るための「軍手を脱いで」という動作です。この句もまた、実体験あっての一句といえましょう。

同時投句「種蒔きや戦に喰われ右腕無し」

旅鳥の脚はももいろ種を蒔く　神楽坂リンダ

「旅鳥」とは【渡りの途中、春・秋に定期的に姿を見せる鳥。日本ではシギ・チドリ類に多い】と辞書には解説してあります。しばし日本に姿を見せ、生きるために啄み、そして次の渡りの地へ向かう「旅鳥」。中七「脚はももいろ」がなんとも可憐にして、健気。次にここに現れる頃は、黄金色の実りの秋でありますね。

歩留りてふ薄情も混ぜ種を蒔く　一生のふさく

「歩留まり」というのは、どのくらい発芽するかというパーセンテージでしょう。人間は簡単に「歩留まり」なんていうけど、命あるものに対してなんと「薄情」な言葉ではないかと。

そんな「薄情」を混ぜ込んで「種を蒔く」のだよ、という作者の認識が、まさに「種蒔」という季語の本意の一部ではないかと教えてくれた一句でありました。

種蒔け蒔けたとえ戦となるときも　**めいおう星**

「種蒔け蒔け」の呼びかけは、「戦」に対する諦めではなく憤りだと読みました。静かにして強靭な意志をもった一句だと。戦の愚かさを私たちは知っているから、「たとえ戦となるときも」私たちは銃を持って立ち上がるのではなく、国の未来を守るための「種蒔」を考える賢い国民でいようよ、と。

以下、めいおう星さんのメッセージにも共感します。

「戦争を知らない子供たちの世代だから、戦争を体験する代わりのマグニチュード9の自然災害だと思ってた。兵士は銃を抱いたまま寝ろ、ただし弾はこめるな、なんて、ここのところの隣国の擬似戦闘体制には正直うんざり。他国に比べて日本の軍備のレベルは?なんて、一家庭の食卓の話題もややきな臭くなりつつも、断じて平和俳句を詠もう!!／めいおう星」

第12回　2013年4月11日週の兼題

蚕（かいこ）

天

なほ首を振る蚕の見ゆる繭の中　**ポメロ親父**

「蚕」の音読みは「さん」ですが、訓読みの「かひこ」は「飼ひ蚕（こ）」の意。広辞苑には「蚕飼い」という言葉も載っていますから、この句の「こ」という読みは許容してよいかと考えます。

存分に桑を食べ尽くした「蚕」がゆらゆらと首を振り始めると、それは繭ごもりの合図。身を落ち着けるに相応しい場所を探しつつ、「首」を振り続ける姿は、何かを乞う仕草にも似ています。少しずつ糸を吐きながらできてゆく、まだ薄い「繭の中」で「なほ」も首を振り続ける「蚕」の姿に、作者の目は引きつけられます。内側に「蚕」の眠りを抱えたまま、やがて湯で煮られる宿命にある「繭」の純白は、あたかも小さな祈りのようにも見えてきます。

同時投句も「蚕」を知っている人ならではの活写。「割り箸でつまんで蚕十貫ふ」「最後の糞して熟蚕の透きとほる」

地

しゃばしゃばと蚕の奥目しばたける　**めろ**

「墨を落としたような蚕の目は、いつ見ても不思議な文様でした。梅干を舐めたあとのような目でした」と語るめろさんは、実際に「蚕」を飼っていた時代を体験しています。「しゃばしゃば」は「蚕」という面妖な生き物をありありと再現するオノマトペ。「奥目しばたける」というささやかな動作の描写にも驚かされました。

一連の投句も現場証明のある作品ばかり。やはり体験に勝るものはないと、痛感させられた作品群です。

階段を下りる蚕の夜の匂い
電球を回し蚕の冷たさよ
捨蚕まだ足ひきずりて這い回る

「住居の二階でお蚕さんを飼っていました。40年も前の事です。人間が寝る頃になるとお蚕さんの独特の匂いが二階からしてきました。不快とまではいかなくても、眠りを妨げる匂いでした。お蚕さんのひんやりした肌触りは、田舎の養蚕室の暗さとセットです。桑を食べる時の音は、じいちゃんとばあちゃんの顔とセットです。病気でどす黒くなった蚕は、病気をうつしたらいけないので容赦なく捨てました。床に敷いた薦半紙は蚕の命を吸って少し光っていました。／めろ」

踏めば死ぬのに何故笑う蚕　**理酔**

「蚕」だけではなく、おおよそ虫というものの表情を見て取ることは至難の業であろうと思いますが、それをやってしまうのが俳人という生き物の異能かもしれません。見下ろす視線で呟かれる「何故笑う蚕」という言葉は、「蚕」に届くというよりは作者の胸の中で反芻されていくに違いありません。「踏めば死ぬのに」と上げた足を、はたして作者は踏み下ろすのでしょうか。

同時投句も妖しい発想に惹かれます。「星雲の波動や繭と成る蚕」「あんたが蚕だなんてアタシはつまんなくてしょうがない」

今生は蚕の生をまつたうす　**神楽坂リンダ**

輪廻転生から発想する句はいくらでもありますので、多少の類想感は否めませんが、「蚕」という生き物の悲哀を思う時、「まつたうす」という呟きに深い諦念を覚えます。美しい繭を吐き、生きながら煮られるという「今生」の後には、どんな来世があるのか。「今生」を全うするために「蚕」は黙々と桑を食べ続けます。

同時投句「板の間の黒く光りぬ蚕は眠る」

廃屋の蚕室に掛かる寒暖計　**旭山桜**

「廃屋」と成り果てた「蚕室」に残っている「寒暖計」に目をとめたことで、その場の今と昔が印象深く思い描かれます。勿論、この句に「蚕」は実在しておりませんので、その点を問題視する読者もいるに違いありませんが、「寒暖計」という物を起点として、生きた「蚕」がいた時代にワープ。そこに「蚕」の姿を見いだせれば、鑑賞は可能だろうと考えます。「蚕室」は「さんしつ」と読むべきなので（「こしつ」と読むのは強引すぎるかと）、中七の字余りが惜しまれます。

「昔は温度が急に下がる時などには、蚕室に炭火火鉢を入れて保温をしたものです。／旭山桜」

皇后のお蚕として太りゆく　**奈津**

「蚕」から皇后様を連想した句は他にもありましたが、季語としての「蚕」が一番生々しく表現できている一句かと思います。「皇后のお蚕」と呼ばれることで、他の蚕とは違う「蚕」となっているかのような叙述。「太りゆく」の複合動詞も描写として的確です。

「養蚕は皇后様の昔からの公務だそうです。小石丸という希少な種類の蚕だそうです。／奈津」

織姫をまつる祠や蚕飼村　**根子屋**

「蚕」を育てる村では、絹糸を取り、絹物を織るという作業もなされていたに違いありません。「織姫」を祀っているのは昔から村人たちに大事に守られていた「祠」。中七「〜や」の詠嘆の切れの後に、「蚕飼村」の光景が広がります。今は「蚕」を飼う人もいなくなった村の静かな「祠」です。

荒荒とざわめく蚕匂ひけり　**蓼蟲**

「蚕」が桑を食べるさまを「ざわめく」という動詞で表現する句にはお目にかかったことがありますが、「荒荒とざわめく」の後に出現する「蚕匂ひけり」という嗅覚への変化球が見事です。独特の腥い匂いが、ぐっと印象づけられる下五「けり」の詠嘆も利いています。

山一つ食べ尽くすなり百貫蚕　**七草**

「百貫蚕」とは、大量に養蚕をすること。全盛期には年間の収繭量が1トン近くなる「百貫蚕」の農家もあったそうな。「山一つ食べ尽くすなり」という断定の後に出現する「百貫蚕」の一語が、読み手の腹にどっしりと響く一句。「山一つ」「百貫」の数詞が、自然に共存している点も巧いですね。

第13回　2013年4月18日週の兼題

鯉幟（こいのぼり）

天

田に浮かぶわが家鯉幟の躍る　**初蒸気**

「田」に水を張る頃、稲作の国日本は一挙に湖の国になります。一夜明けると「わが家」が水上に浮かんでいるかのような光景にハッとするのが、毎年この時期の小さな感動。私の暮らす松山市も、少し郊外に出ればこんな光景が広がります。

この句の「わが家」は、郊外に建てたマイホームでしょうか。その「わが家」に、今年生まれたのは待望の長男。喜

びの「鯉幟」は、今朝も五月の風にはためいています。「鯉幟」の尾が風にくねる度に、田水に映る「鯉幟」の尾も光り、映り込んだ五月の青空も光ります。愛すべき「わが家」と愛すべき家族の象徴の如き「鯉幟」は、この季節のど真ん中で、ゆうゆうと躍っているのです。

地

風といふ好敵手居て鯉幟　舞

「鯉幟」から「風」を連想する句はたくさんありますが、「風といふ好敵手」という表現が楽しい一句。「好敵手」を得てこそ、「鯉幟」は生き生きと風に躍るのだという発想が、この季語の本意を捉えています。

同時投句「甲斐駒の峰の眩しき鯉幟」「鯉幟絡まり合うて白き嶺々」

五合目で風捕まへる鯉幟　亜桜みかり

「五合目」というと富士山登頂みたいですが、一句全体を読み通してみれば、「鯉幟」があげられていく竿の「五合目」だということが分かります。風を受け始める時点が「五合目」の辺りだという観察に、俳人ならではの視点があります。

離陸機にあらく波立つ鯉のぼり　登美子

五月の空港に立てられた「鯉のぼり」でしょうか。あるいは、空港近くの家のそれかもしれませんね。いきなり「鯉のぼり」が荒く波立ち始めた様子に、あら?と振り返れば、「離陸機」が起こした風であったかと気づきます。こんな季語の現場もあるに違いないと納得した一句です。

目も口も巨きが佳かる鯉幟　こま

どんな「鯉幟」が佳いのか?と問われれば、たしかに「目も口も巨きが佳かる」と答えるしかないだろうな、という大いなる実感。よくよく考えてみれば、「鯉幟」というもののデザインは、大胆にして見事な日本の芸術であります。

折りたたみ目玉ばかりや鯉のぼり　美杉純

季節を終えた「鯉のぼり」か、雨が降りそうになって仕舞った「鯉のぼり」か。いずれにしろ、折りたたんでみると「目玉」だけになったよという発見をそのまま表現。さらなる推敲の余地もあるかとは思いますが、この視点が季語の新しい表情を提示してくれています。

赤ん坊の座る鯉幟の尾つぽ　酔う太

これも畳んでいるか、取り込んだばかりの「鯉幟」でしょう。「赤ん坊」が座っているのは、ちょうど「鯉幟の尾つぽ」のところ。その光景の可笑しさをそのまま活写しました。

空を泳いでいる「鯉幟の尾つぽ」に「赤ん坊」が座っているという読みも否定はできませんが、それによってこの句が豊かになるか?というと、少々疑問。「鯉幟」という布の「尾つぽ」の部分にちょこんと座っている「赤ん坊」を思うほうが、季語が息づくに違いありません。

創業の門扉百年こひのぼり　野風

「創業」して「百年」という店の「門扉」に掲げられた「こひのぼり」は、悠々と泳いでいます。どんな店なのかなあと色々想像したのですが、作者野風さんのコメントを読んで、おおーまさに!と納得しました。「某銀行本店の屋上には、この季節に毎年、鯉幟が泳いでいます。」

入り婿に百年ぶりの鯉幟　根子屋

同じ「百年」という言葉が詠み込まれている一句ですが、「百年」の意味合いは微妙に違います。男子誕生の悲願を背負っての「入り婿」。家系図を辿れば「百年ぶり」の男子誕生。女系三世代?の旧家の屋根に躍る「鯉幟」です。

炭鉱の地に一旒の鯉幟　るびい

「組長、おはようございます。生まれ育った長崎にも独身最後の2年を過ごした福岡にもそしてここ北海道にも、かつて炭鉱で栄えた町があります。〝かつて〟感をうまく表現できませんでした…」とのコメントを添えてくれた作者るびいさん。いやいや、その感じはちゃんと表現できていますよ。

「かつて栄えていた町」というイメージは「炭鉱」という言葉そのものがもっていますし、そのイメージを踏まえた上で展開していく「一旒（いちりゅう）の鯉幟」という措辞も、「あれだけ栄えていた町なのに今となってはたった一本しか…」というニュアンスを表現し得ています。「鯉幟」の元気さ、明るさとの対比が、その気持ちを際立てます。

朝まで呑んで鯉幟掲げ寝る　理酔

田舎の大きな「鯉幟」を高い高い竿に掲げるのは大仕事。我が家の「鯉幟」を毎朝掲げるのは、家長としての重要な任務。ついつい深酒をした夜は、今から寝てしまうと「鯉幟」を揚げそびれてしまう。ならば、もう一踏ん張りして「朝まで呑んで鯉幟揚げ」てから、心置きなく寝よう!という心根は、エライ!と誉められるべきか、そこまで呑むな!と呆れられるべきか（笑）。が、それもこれも親心であり、「鯉幟」にまつわる小さな真実の一句だと、笑わせて頂きました。

第14回　2013年4月25日週の兼題

筍飯（たけのこめし）

天

安達太良へ筍飯を握りけり　竹春

「安達太良」という地名のなんと悠々たる響きでしょう。「あだぁたぁらぁ」のア音が大空へ広がるかのような韻律であることは確かですが、大らかな句の姿を支えているのは、実は上五の助詞「へ」の効果ではないか、ということにはたと思い至りました。

「安達太良へ」の「へ」は方向を示す助詞です。山へ向かって? 山へ行く? 一体、どういう意味の「へ」かと思いきや、後半「筍飯を握りけり」とくる展開に虚を衝かれます。心地良い驚きです。

山開きの日の握り飯か、はたまた初物への感謝を捧げる握り飯か。「へ」という助詞は、さまざまな方向に読み手の思いを広げます。筍を育ててくれる山は、毎日拝む美しい故郷の山。下五「握りけり」の詠嘆もまた、いかにも美味そうな「筍飯」の実感です。

地

青丹よし筍飯や奈良に姉　めろ

「青丹よし」は「奈良」にかかる枕詞です。辞書には【奈良坂で顔料の青土を産したところから】と解説してあります。

本来ならば「青丹よし奈良の都は咲く花の〜」という具合に繋がるのですが、「青丹よし」と「奈良」の間に季語「筍飯」を強引に挟んだのは、作者のユーモアというべきか。「青丹よし」なる「奈良」には、「姉」が一人いて、毎年奈良の筍を送ってくれる、と読ませていただきました。相変わらず愉快な発想のめろさんです。

伽羅蕗と筍飯と憂国と　てんきゅう

「伽羅蕗」も季語ですから確信犯的季重なりの一句。…とはいえ、「伽羅蕗と筍飯と」と畳みかける夏の食べ物一種は、いかにも美味そうな取り合わせです。味濃くほろ苦い「伽羅蕗」と薄味の「筍飯」が並列で提示され、美味そうだなあ!と思ったとたんに出現する下五「憂国と」という変化球。日本の国ならではの味を喜ぶワタクシだからこそ、この国の未来を憂いているのだよ、という一句を口ずさめば、「伽羅蕗」はますますぴりっと辛く、「筍飯」はしみじみと美味なのでありましょう。

筍飯旅の初日の男酒　蓼蟲

「男酒」については、作者からの解説が付されていました。

「男酒は、硬水を使ったやや酸の強い辛口の酒のこと。代表は灘の男酒。これに

対して伏見の女酒がある。軟水でじっくり時間をかけて醸した比較的酸の少ない甘口で、その優しい味わいから女酒と称される。」

一人旅の「初日」でしょうか。勿論季語が「筍飯」でなくても成立する句ではありますが、「旅」「初日」「男酒」という言葉の向こうに、この地の「筍飯」を楽しみにここを訪れたに違いない、という実感が滲んできます。仮に下五を「女酒」にすると、上五の食べ物は明らかに違ってくる?と思いませんか。そこが、この句の眼目というヤツでしょう。

筍飯のおかわり山村留学生　松本だりあ

「筍飯の／おかわり／山村留学生」と読むべきでしょうから、7・4・10の字余りになりますが、この句にはこの句なりの軽やかなリズムがあります。

四月に転入してきた「山村留学生」が初めて自分で掘った筍でしょうか。寮の食堂には「おかわり！」の声が響いているのでしょう。

人の灯のここが末なり筍飯　すな恵

やっとたどり着いた民宿の「筍飯」を想像しました。山の奥の奥にぽつんとある「人の灯」を思わせるのが、下五「筍飯」という季語の力。「山奥の」なんて場所を説明しなくても、こんなふうに表現すれば光景はしっかりと伝わるのだなあと感心します。「ここが末なり」という断定の利かせ方も巧いですね。

同時投句「筍飯炊けてお山にひとつ星」「始発に喰ふ筍飯のおお握り」

山誉めて筍飯を食はさるる　ハラミータ

「山誉めて」とは、その人の所有地である山を誉めたというのではなく、その人の住む郷土の山を誉めたと解したほうが気持ちいいですよね。この山の筍、今シーズンでね、これが美味いんだよ、ちょうど今炊けたとこだから、食べていきなさいよ～なんて会話が、一句の向こうに聞こえてきます。

同時投句「筍飯山を買ふとか買はぬとか」

不法投棄の山かたついた筍飯　初蒸気

「不法投棄の／山かたついた／筍飯」と読みますから、7・7・6のリズム。「上五を字余りにして中七下五でリズムを取り戻す（下五の季語「筍飯」が6音なのは許容するとして）」という定石を意識しての破調です。

「不法投棄の山」の問題が「かたついた」というのですから、それは自分に関わる「山」であり、美味しい「筍」が採れる山であるに違いありません。やれやれと安堵の、今年の「筍飯」です。

同時投句「組合の差し入れに出る筍飯」

防災無線筍飯かっ込む　理酔

「筍飯」が6音の季語なので、上五下五に置いてもしっくりこない。ならば、思い切って破調でやってみようか、と意欲的にチャレンジした人もいたはず。この一句にもその意図が感じられます。「防災無線／筍飯／かっ込む」ですから、7・6・4となり、全部を合わせると17音になるという手法がニクイですね。

「防災無線」を聞きつつ慌てて「筍飯」をかっ込んでいるのは、誰でしょう。地域の消防団のおっちゃんでしょうか。町役場の防災課のオニイサンでしょうか。この町の正義の味方たちは、ポパイのホウレンソウのように、「筍飯」が力になるのかもなあ！

同時投句「寮生の筍飯を二升炊く」

筍飯仕掛けて納屋で一仕事　舞

「筍飯」を「仕掛け」た後で、「納屋」に戻り、もう「一仕事」片付けようとしているこの人物の様子や、この家の造りまでもが、ありありと想像できます。竈のある暗い厨を想像しましたが、勿論電気釜で炊いてもよいわけで（笑）、ご飯が炊きあがるまでのささやかな時間を惜しんで働く心根が、「筍飯」という季語の気分に似合います。

竹とんぼ削り筍飯の湯気　四万十太郎

「筍」を採りにいったついでに切ってきた「竹」でしょうか。孫を喜ばせたくて、削っている「竹とんぼ」でしょうか。爺ちゃんの「竹とんぼ」が完成する頃には、婆ちゃんの「筍飯」も炊きあがるに違いありません。後半「筍飯の湯気」という措辞が、光景を生き生きと立ち上がらせます。

ごん狐筍飯をねだりけり　ときめき人

「ごん狐」がでてくるとは思いませんでしたが、友だちが欲しかったゴンですから、人間が食べている「筍飯」もきっと食べたがったに違いありません。「筍飯をねだりけり」という措辞が、ある日のゴンを想像させます。あったはずのない場面を生き生きと思い起こさせてくれるのが、この一句の詩的力なのだと思います。

第15回　2013年5月2日週の兼題

夏蜜柑（なつみかん）

天

子規の熱静かに冷ませ夏蜜柑　たかこ

日々の病床にて食べた物を克明に記録した「子規」ですが、そのリストに「夏蜜柑」があったか否かは不勉強にして知りません。が、こんな一句に出会うと、その病床に明るい黄を発する故郷の「夏蜜柑」があったに違いないという確信めいた気持ちが生まれます。

「熱」に魘され、血を吐き、膿を出す凄まじい闘病生活の中、子規の大きな喜びは食べる事でした。菓子パンを幾つも食べ、鰹の刺身に舌鼓を打ち、白いご飯を噛む。今日一日を生き抜いた証を、子規は食べた物を記すという行為で確認していたのかもしれません。

「子規の熱静かに冷ませ」という祈りの言葉と「夏蜜柑」の酸っぱさが哀しい癒やしとして広がる、深い味わいの一句です。

地

夏蜜柑隅へ広報課へ来客　紗蘭

「夏蜜柑隅へ」で句切れがあり、「広報課へ来客」と畳みかける構造。小さな町の小さな役場の小さな「広報課」を思いました。町の特産品である「夏蜜柑」は窓口に来たお客さんがくれたものかもしれませんね。

ちょっと休憩～なんて言いながら皆で「夏蜜柑」を剥き始めると、急な「来客」。あらあら、これは失礼しましたと、「夏蜜柑」は一時「隅へ」追いやられるという、小さな場面がありありと見えてくる一句です。

夏蜜柑手持ち無沙汰に読む広報　舞

こちらは我が家のリビングでしょうか、守衛室とか宿直室のような職場かもしれませんね。「手持ち無沙汰」なものだから、町の「広報」でも読むか、なんてパラパラめくっているのでしょう。

読み終わってそこに置いた「広報」ですが、まさか「夏蜜柑」を剥いた皮を包んで捨てるんじゃないでしょうね（笑）。そんな事後を勝手に想像して可笑しくなった一句でもあります。

腹の子のよく蹴る午後よ夏蜜柑　奈津

「夏蜜柑」＝酸っぱい＝つわり、という具合に連想を働かせた人もいましたし、鈴木しづ子の「夏みかん酢っぱしいまさら純潔など」という一句を思い出した人も多かった今週の兼題「夏蜜柑」。

これもそんな連想からの一句だと思いますが、「腹の子のよく蹴る午後よ」という措辞、元気があっていいですね。「夏蜜柑」が本来内包している明るさが「腹の子」「よく蹴る」「午後」という言葉と響き合って、ストレートに気持ちの良い句でした。

泣くたびにわらはれる嬰夏みかん　緑の手

同じような発想から「嬰」がでてきたのかもしれませんが、「泣くたびにわらはれる嬰」という場面がなんとも愉快！ 泣いたといって笑い、笑ったといって笑われる。それがまさに「嬰」の可愛さであります。取り囲む大人たちの

笑顔が一句にぎっしりと詰まっていて、読めば読むほど心が楽しくなります。

夏蜜柑割つて連続ドラマかな
神楽坂リンダ

似た場面を詠んだ句は沢山あったのですが、叙述によどみがなく無理がなく、こういうところがベテランの味ですね。「夏蜜柑割つて」で手元のアップの映像、「連続ドラマかな」でテレビ画面へと映っていく、この俳句的カメラワークが手慣れているわけです。「連続ドラマ」を見終わる頃には、大きな「夏蜜柑」も食べ尽くされているのでしょう。

同時投句「胎児はや女児とわかりぬ夏蜜柑」「銀座には銀座のかほの夏蜜柑」

サガン伏せ夏柑をむく自主休講
ふづき

「サガン」と「夏柑」が意外にマッチするのだなあという新鮮な取り合わせ。さらに「自主休講」と畳みかけることで、「サガン」を伏せ「夏柑」を剥いている人物の状況を語るテクニックが巧いですね。やや情報過多かと危惧する内容ですが、作品として成立させるバランス感覚がすぐれた作家なのでしょう。

ある夏の女子大生は、作者自身なのかもしれませんし、読者の中にいる誰かかもしれません。

同時投句「夏柑の五個め乗り放題切符」

夏蜜柑ゴッホの黄いろありったけ
はまゆう

「夏蜜柑」が黄色であることは誰でも知っている事実ですが、黄色にもいろいろな黄色があるよという発想から生まれた一句です。「夏蜜柑」の黄色は「ゴッホの黄いろ」であるという断定が、詩的真実として読み手の心に投げこまれます。

さらに、下五「ありったけ」は「夏蜜柑」一個のエネルギーと読むこともできれば、山すべてが「夏蜜柑」色に染まっていると読むことも可能。その読みの幅も「夏蜜柑」らしい作品です。

爆弾になり損なった夏蜜柑
ひで

この断定も面白いなあ！「夏蜜柑を季語として考えるときに、どうしても檸檬と比べてしまいます。檸檬といえば梶井基次郎が爆弾に見立てたことで有名ですが、夏蜜柑はそういう見方をされません。そこに屈託のない夏蜜柑らしさがあるのではと思いました。／ひで」と語る作者。ワタシも全く同じ読みをしました。そういう意味では、作者が表現したかった内容と一句の叙述が正確に合致した作品だと誉めることもできます。

「夏蜜柑」を物に喩える発想はいくらでもありますが、「○○になり損なった」という逆サイドから攻めていくやり方もあるんだよね。「爆弾になり損なった」という措辞が、「夏蜜柑」の瑞々しい野性味を引き立てます。

父母はときどき他人夏蜜柑
ローストビーフ

こんな句を見せられると、世の中の「父母」は心の奥で、ほんの少しギョッとします。そんなことないわと言い繕う「父母」もいるでしょうし、当たり前じゃないかと開き直る「父母」もいるはずですが、「ときどき」ってとこに不器用な愛情も読み取れます。そこが「夏蜜柑」のごつごつした感触に似合うのだろうなと共感する次第です。

かと言うて伐られもせずに夏蜜柑
一生のふさく

これまたいかにも「夏蜜柑」だなあと爆笑しました。

塀を越えて隣の「夏蜜柑」が鬱蒼と垂れ下がってきてますとか、あまりにも木が大きくなって持て余してますとか、そんな話も時折聞きますが、そんなこんなの「夏蜜柑」にまつわるエピソードを、この一句が全部代弁しちゃった感があって、愉快でした。きっとこの「夏蜜柑」は、このままずーっと「伐られもせずに」作者と共に年月を重ねていくのでしょうね（笑）。

第16回　2013年5月9日週の兼題

蜘蛛（くも）

天

戦意無きこと告げ蜘蛛を追い立てる
鞠月

「蜘蛛は殺してはいけない」と教えられ、理由は分からないままその言葉を守ってきた人も多いのではないでしょうか。「蜘蛛」はおっかないけど、殺してはいけないのなら、「蜘蛛」の方でサッサと逃げてくれることを願うわけですが、向こうさんもなかなか素直に逃げてくれない。そんな場面を活写した一句です。

逃げる気配を見せず毅然たる「戦意」を感じさせるこの「蜘蛛」は、手足の長くて大きなアシダカグモでしょうか。こちらには「戦意」が無いことを告げようにも言葉は通じず、その困惑の気持ちが「追い立てる」という動作に読み取れます。「蜘蛛」が「戦意」を納め退却し始めた瞬間の安堵が一句の余白に滲むのも味わい。

「蜘蛛」とのみ語っているにもかかわらず、クモの種類まで想像できる句を、今週の「天」にしたいと網を張っていたのですが、この句がそのど真ん中に引っかかってきた次第です。

地

カンダタの忌らし大蜘蛛動かざる
ハラミータ

「蜘蛛＝カンダタ」という類想類句から大きく抜け出したのが、ハラミータさんのこの一句。

目の前の「大蜘蛛」が動かないのは…そうか今日は「カンダタの忌」に違いないよ、とは見事な着想です。「カンダタ」を悼むのか哀れむのか、「大蜘蛛」の暗い目の中に、堕ちていく「カンダタ」の姿が映り込んでいるかのような錯覚にも囚われました。

同時投句も鮮やかな実感。「蜘蛛潰すには青の濃き畳かな」

蜘蛛の死に触れた塵紙のしわくちゃ
紗蘭

「蜘蛛」の死体ではなく、「蜘蛛の死」に「触れた」という表現に詩が発生します。「触れた」という一語は、「蜘蛛の死」を体験したという意味かと思えば、「塵紙のしわくちゃ」とくるから、「塵紙」は実際に死体に触れているわけで、このあたりの叙述が実に巧い。「しわくちゃ」の一語に、作者自身の動揺も読み取れます。

「今日、蜘蛛の句を考えていた時にふと床を見ると、緑のカーペットに茶色い塊が落ちてあったので何かなと思ってみて見ると、人差し指くらいの長さのある蜘蛛が死んでました（汗）しかも知らないうちに殺してしまっていたようで、かなり気持ちの悪い格好で死んでました。ティッシュはのせたものの、つかんで包むのが怖かったです。追悼句というには多すぎるほどたくさん詠ませてもらいました」と語る紗蘭ちゃんは、オーストラリアに留学中の中学生です。

蜘蛛の囲の真中にゐるをまだ知らず
こま

一瞬、どういう意味だろう？と考え込んだのですが、二つの解釈が思い浮かびました。

一つは、「蜘蛛の囲」にかかった蝶や虫が何事が起こったのか事態がつかめないまま、「蜘蛛の囲の真中」にいるという場面。もう一つは、蜘蛛の活動が旺盛な時期、玄関口も勝手口もどこもかしこも「蜘蛛の囲」が張り巡らされている状況を「蜘蛛の囲の真中にゐる」と感じ取ったのではないか、という解釈です。

後半の「まだ知らず」を嵐の前の静けさのように読めば前者、今朝も「蜘蛛の囲」を払わないと外に出られないこと気づいているかしら？という可笑しみだと読めば後者、ということになります。

作者のコメントを確認してみると、こんな感じでした（笑）。「不毛にも毎日門の前に巣をかける蜘蛛がいて、毎朝母に破られています。家族が2、3日ひきこもっていたら、家全体が蜘蛛の巣に包まれたりするのだろうか…。こわいけど、雨上がりはきらきらきれいかも。／こま」

蜘蛛の囲にかかりてしばし考える
たかし

こちらは明らかに「蜘蛛の囲」にかかっ

てしまった獲物だよな！と思ったんだけど、ひょっとすると顔面に「蜘蛛の囲」をキャッチしてしまった人間の表情かもしれないなあ～（笑）。「蜘蛛の囲」にかかった獲物ならば「しばし考える」は死が迫った悲壮な時間、顔にかった人間ならばおマヌケな表情。どちらもそれなりの味わい。

木と紙と硝子戸のいえ蜘蛛走る
神楽坂リンダ

「木と紙と硝子戸のいえ」という措辞は、木造の古い家。特に「硝子戸」はサッシ戸ではなく、昔ながらの木製のものを思わせます。

「木と紙と硝子戸のいえ」には、父母から殺してはいけないと言われ続けてきた「蜘蛛」も共に住んでいるのです。「走る」という動詞が、静まりかえった家に響く「蜘蛛走る」かそけき音をリアルに伝えます。

同時投句の描く「音」も読者の耳にしっかり伝わる音です。「音たてて蜘蛛のおりたつ畳くり」

蜘蛛と蜘蛛すれ違いたる収蔵庫
理酔

なんの「収蔵庫」かは分かりませんが、その暗がりの中で「蜘蛛と蜘蛛」がすれ違ったという事実だけを述べた一句。二匹の「蜘蛛」の静かな瞬間がパッキングされています。無表情な「蜘蛛と蜘蛛」の遭遇を見つめる作者もまた、無表情にそこに居るに違い有りません。

同時投句「下がり来る蜘蛛の唄聞く夜明けかな」

蜘蛛の巣をサイドミラーに連れ帰る
あねご

吟行に行った帰りでしょうか、農作業を終えての帰宅かもしれませんね。「サイドミラー」に「蜘蛛の巣」がくっついているのを発見した時、一般人ならばサッサと払ってしまうでしょうが、俳人はしばし繁々と観察し、一句をしたためます。「連れ帰る」という複合動詞に俳人的愛情が感じ取られ、共感した一句です。

影持たぬ蜘蛛影として生きるかな
ハムテル

「蜘蛛」の「影」は、蜘蛛の体の下に潜んでいます。当たり前の事実をこのように提示するだけで詩が発生するのも俳句の特性です。「影として生きるかな」という詠嘆に、嫌われる「蜘蛛」たちの哀れも読み取れます。

さらに深読みして、そんな「蜘蛛」の姿に作者自身の人生なり感慨なりが投影されている、と鑑賞する人もいるかもしれません。

同時投句「蜘蛛の囲を払ひて空を広げたり」

蜘蛛糸を吐く冷温停止の闇
樫の木

「蜘蛛糸を吐く」は当たり前の措辞ですが、後半の措辞で、読者は一気に原発事故の現場にワープさせられます。「冷温停止の闇」の中で密やかに生きる「蜘蛛」たち。「糸を吐く」息づかいがしゅーしゅーと感知されるかのような「闇」であります。

「冷温停止」等という一種の専門用語が一般人に記憶される状況自体が有事に違い有りませんが、そのような言葉を取り込み、詩として成立させる力技に感嘆します。「福島原発事故から2年2ヶ月経ちました。原子炉の状態は詳しく報道されないのですが、大変困難な作業であることは間違いありません。作業の方々に感謝の念は堪えません。」と語る樫の木さんです。

同時投句「古書店に蜘蛛の巣ギリシャ悲劇集」

蜘蛛の囲をよけ上段の古書を選る
ふづき

古書店でしょうか、古い図書館でしょうか、自宅の書斎かもしれませんね。「蜘蛛の囲をよけ」から「上段の古書を選る」という動作を映像として的確に描いているのが、動詞の選択の巧さ。句の余白から、「古書」についた埃を払っている様子も想像できます。

同時投句「始末書のぺらぺら蜘蛛を踏んづける」「百合飾る写真へ蜘蛛の子の降りる」

蜘蛛の囲の窓やダンサー募集中
もね

都会の風俗街ではなく、鄙びた温泉町の裏通りを思い浮かべたのは、「蜘蛛の囲の窓や」という前半の措辞の力でしょうか。「ダンサー募集中」の張り紙もすでに古びて変色しているのでしょう。廃れたストリップ劇場を想像したものですから、そこから勝手に『夢千代日記』の世界にまでワープし、脳内ドラマを味わわせてもらった一句でした。

同時投句「殺め損ねた夜の蜘蛛に遇う朝」

大きな蜘蛛の囲に虫投げてやる遊び
ポメロ親父

あ、やったことあるな！小さい虫を捕まえて、「蜘蛛の囲」の真ん中あたりに投げると、それまでじっとしていた「蜘蛛」がおもむろに動き出し、獲物にじわじわ近づいていくのです。下五「遊び」が、映画『禁じられた遊び』に描かれた残酷と重なります。

同時投句「振り払へば落ちて水面を歩む蜘蛛」

載せてやつた穢き蝶に怖じる蜘蛛
初蒸気

同じことやってる人が、ここにもいました。これと同じ光景を私も見たことがあります。

せっかく獲物を「載せてやった」のに、逆に怖じ気づいて尻込みしていく「蜘蛛」。この場面を詩として成立させているのが「穢き蝶」という措辞でしょう。「穢き蝶」は死んだ蝶だと解釈しました。載せてやった獲物に近づかないのは、「蜘蛛」が死の穢れを感じ取っているからかもしれない…と思う作者の感情が、この詩語を見つけ出したのでしょう。

同時投句「蜘蛛の声夜の女王のアリアかな」「京劇のにやにや唄ふ女郎蜘蛛」

下宿屋の蜘蛛に太郎と名を付けて
一心堂

狭くて汚くて古い「下宿屋」で暮らす我が身にとっての友といえば、この部屋に住み着いている「蜘蛛」だけかもしれない…というため息。「太郎と名を付けて」みたものの、餌をやるでもなく、触れあうでもなく、ただただ淡々と暮らす「太郎」と作者であります。

ヤクルトの器に入れて蜘蛛逃がす
ほうじ茶

恐くてたまらない「蜘蛛」だけど、どうやって追っ払えばいいのか分からない。まさか、「ヤクルトの器」の細い口をかぶせて捕まえたのかな？うっかり「ヤクルトの器」に入っちゃった「蜘蛛」を閉じ込め、これ幸いと外に逃がしてやったのかな？一家のドタバタ騒ぎも見えるようで、愉快。「ヤクルト」と「蜘蛛」の取り合わせの意外性も楽しめました。

蜘蛛踏んだ靴で難波を食べ歩き
登美子

この「靴」が、今朝出がけに玄関先の「蜘蛛」踏み潰した靴であることを知っているのは作者のみ。なのにどうも験が悪いというか、気になるというか…。食い倒れの大阪「難波」で「食べ歩き」を楽しむ一日なのに、「蜘蛛踏んだ靴」を履いているという小さな事実が、どうにも心に引っかかってしょうがない一日なのです。

第17回　2013年5月16日週の兼題

鵜飼（うかい）

天

篝火のじき唸りだす鵜飼かな
登美子

「篝火」「鵜飼」とくれば、よくある素材だと通り過ぎてしまいがちですが、この作品から学ぶべきは一句を構築するカメラワークの巧さ。たった17音で光景をありありと描くには、読み手の脳内にどんな映像がどう再生されていくかを考える必要があります。

まず「篝火」のアップから始まる上五。その火が次第に強くなっていくさまを活写する中七「じき唸りだす」が、この句の眼目です。「鵜飼」の舟が速力を加えて漁場を目指す風の勢い、いよいよ鵜を放つ現場の昂ぶりが、さりげなくも見事に映像化された中七。「じき」の一語が示唆する時間の経過もまた、「鵜

飼」そのものが時間の感覚を含む季語であるから成立する絶妙なバランス。「唸る」という動詞が確かな選択であることは言わずもがなの一句です。

地

小屋の鵜の調子見極め鵜を選ぶ　ポメロ親父

鵜匠さんたちは「鵜」の体調に心を遣います。一羽一羽の「調子」を「見極め」ることも大事な仕事なのだとおっしゃいます。「鵜飼」という言葉は使われていませんが、明らかに「鵜飼」という季語の一場面であることが分かる。そこも作者の工夫の一つです。

記紀の火を川面に散らし鵜飼舟　すな恵

「記紀の火」とは何でしょう。『古事記』『日本書紀』の時代から使われてきた「火」と読むのが妥当かと思います。「鵜飼舟」の舳先に吊した魚を寄せるための篝火を見つめていると、「記紀」の時代の「火」もこんな色をしていたに違いないという思いが、作者の心を過ぎったのでしょう。「川面に散らし」という映像に、遙かな思いが重なってくる一句です。

同時投句「骨肉のごとくに鵜綱軋みけり」

今宵五隻連れて鵜舟の下りけり　八十八

「五隻」とは「鵜舟」を見物するための屋形船でしょう。鵜匠と鵜籠を乗せた「鵜舟」一隻が、見物の「五隻」を連れて、川を下っていくよ、という場面です。

「今宵五隻」ですから、お客さんの多い日でしょうね。川を下りながら、それぞれの屋形船に近づいていっては鵜飼を見せる。船頭さんと鵜匠さんの阿吽の呼吸が「今宵」を楽しませてくれるのです。

だんだんに追いついてくる鵜飼舟　笑松

弁当や酒を積み込んだ屋形船は先に出発し、まだ暮れかねる川面をゆっくりと下り始めます。川岸の景色を楽しみながら一献を重ねているうちに、舳先に篝火を焚いた「鵜飼舟」が「だんだんに追いついてくる」というわけです。微醺をおびた客たちの、おお、来た来た！と喜ぶ声も聞こえてきそうな一句です。

鵜篝の火の粉へ火の粉総がらみ　みちる

「総がらみ」という言葉を初めて知ったのですが、六隻の鵜船が並んで漁をするものなのだそうです。言葉の意味が分かれば、この句の迫力が一気に膨れあがります。

観光の鵜飼ではなく、漁のために行われていた「総がらみ」という漁法。一隻の鵜舟の光景しか見たことがないのですが、あれが六隻集まっての漁となれば、その「鵜篝の火の粉」の量がいかばかりか！と想像するだけで、堪能させてもらえた一句でした。

鵜飼火や顔のやうなる岩ひとつ　海音

「鵜飼火」に照らされる川岸の「岩」がふと目に入ると、それが「顔」に見えてしかたがない。鵜飼のパフォーマンスに賑わう屋形船の中で、こんなものが気になって仕方ない人がいる、ということに可笑しみがあります。ゆらゆら揺れる「鵜飼火」が「岩」の表情を生々しく見せます。「鵜飼」という季語の世界の中で、こんな発想もあったか！と拍手。

性悪の一羽紛れる鵜の篝　初蒸気

どう考えても、あの「一羽」だけが他の「鵜」とは違った動きをしていることに気づく作者。アイツは「性悪」に違いないと思い始めると、その「鵜」の動きばかりを目が追ってしまいます。

「紛れる」でその他の鵜の姿を描き、「鵜の篝」で零れ散る火の粉のシルエットとして「鵜」の姿を描く。言葉の選択の巧さが、この作家の確かな実力です。

橋くぐり闇から闇へ鵜飼の灯　松本だりあ

鵜舟に乗って感じる「闇」の迫り来る感覚なのか、遠景としての俯瞰する「鵜飼の灯」であるのか、読みを少々迷いました。上五が「橋くぐり」から始まりますので、自分が橋をくぐっているかのような感覚をまず受け止めますから、前者の読みで良いのかなと判断。「橋」の下をくぐる時の「闇」の匂いを追体験した一句です。

鵜飼する今夜は川の死ぬ気配　とぼん

不思議な感覚だなあ。一読何を思いだしたかというと…鵜飼舟が轟々と篝火を焚きながら近寄ってくると、それまで漆黒だった川が色を変える瞬間です。見ようによっては美しく、見ようによっては妖しいあの深緑色は「川の死ぬ気配」かもしれない…と思い当たり、ハッとしました。

「鵜飼」に対する抗議めいた気持ちを「今夜は川の死ぬ気配」と表現したのかもしれませんが、そのような読みはこの句の魅力を殺ぎます。理屈ではなく、詩として読みたい作品です。

篝火を消して鵜舟の岸に着く　木よし

客を降ろすために船着き場へと下っていく屋形船と別れた「鵜舟」は、別の岸へと戻っていきます。鵜と鵜匠と船頭さんと、それぞれの労働を労いながら、「鵜篝」の火もおとすのでしょう。

完全に「消して」から「着く」のか？という現実的な疑問を持ちはしましたが、鵜飼が終わった後の静けさと一気に押し寄せてくる闇の濃さを追体験させてもらった一句でした。

第18回　2013年5月23日週の兼題

冷し瓜（ひやうり）

天

城の井の四十メートル瓜冷やす　輝女

「城の井」の深さが「四十メートル」あるという事実に驚きますが、よくよく考えると松山城の山頂広場にある井戸がまさにそうです。テレビ番組の取材で、お正月の若水を汲む様子を拝見したことがあるのですが、その深さたるや相当なものです。「城の井」は、いざ籠城ともなれば死活を握る大切な井戸。そんな存在であった井戸も、今は、立入禁止の柵が張り巡らされています。

かつてそこに暮らした人々は、この井戸で「瓜」を冷やしていたに違いないという発想に納得。季語「冷し瓜」が「城」という場所における平和な日常の証となっている事実にもハッとします。冷えた瓜のほのかな甘さも、生きて暮らす嬉しさであるなと、しみじみ。

地

瓜冷す水飲む馬の鼻っ先　奈津

「冷し瓜」は基本的には、マクワウリの類と考えるべきだと多くの歳時記には解説してあります。マクワウリらしさを出したいと考えると、たしかにこんな場面も浮かんできます。

「瓜」を冷やしているのは湧き水でしょうか、川でしょうか。水を飲んでいる「馬の鼻っ先」にぷかぷかと浮かんでいるさまが、いかにもユーモラス。ほのぼのとした水墨戯画のような味わいです。

河童来たらし瀬に冷し瓜また回る　ふづき

日本昔話のような世界を描くことで、マクワウリらしさを表現しようという工夫。「河童」という架空の生き物が来てた証拠じゃないかしら、瀬に浮かんでいる「冷し瓜」が誰も触ってないのに「また回る」のは…という発想がいい！キュウリが好物の河童は、マクワウリも嫌いなはずないよねと納得させられます（笑）。

復員を待てる厨よ冷し瓜　すな恵

時代を描くことで、マクワウリっぽさを表現することもできますね。終戦から一年経ってもまだ戻って来ない息子がいるのでしょう。やっと「復員」の知らせが届いたこの夏、好物の「瓜」を冷やして待つ母の思いと読んでもいいですし、まだ届かぬ「復員」の知らせを待ちつつ、「冷し瓜」が好物である息子を思う母と

読んでもいいでしょう。

同時投句は、この作家らしい瑞々しさ。「水清く日輪清く冷し瓜」

原爆の死没者名簿瓜冷す　てんきゅう

「原爆の死没者名簿」を風通しする慰霊行事があると聞きます。その光景をニュース映像で見ながら、傍らの金盥には「瓜」が冷やされている、という場面を思いました。水を求めて亡くなっていった人たちを思う気持ちと、喉に冷たい「瓜」のほの甘さが、静かな追悼の思いへと昇華されていく一句です。

同時投句それぞれ発想が豊か。「冷し瓜雲ちぎりにして掬う」「子のことはスルリとかわし冷し瓜」

よく熟れてゐる真桑瓜よく冷やす　ポメロ親父

マクワウリらしさを出したいのならば、率直にこう詠めばいいんじゃないか?というコロンブスの卵のような一句(笑)。「熟れて〜瓜」のウ音の響き、「よく」のリフレインが、一句に愉しいリズムを作り出します。

同時投句も飄々として。「試合終はる頃には瓜も冷えておろ」「お天気が良くて瓜でも冷やさうか」

瓜を冷やせ埃及より友来る　くろやぎ

「埃及」は「エジプト」の漢字表記です。埃が及ぶと書く字面のイメージが面白いですね。

さあ「瓜を冷やせ」、なんと「埃及」から「友」がやってくるよ!という一句もまた、マクワウリの類を思わせます。六六四のリズムが、会話のような電報文のような独特の表情を醸し出しています。

同時投句も固有名詞が利いています。「ポンポン山に雲湧くを待て冷し瓜」

砂漠行くキャラバンを待つ冷し瓜　はまゆう

エジプトがあれば、「砂漠行くキャラバン」という発想もあっていい!

これが仮に「砂漠来る」だとしたら、作者は「冷し瓜」の側にいて、やってくる「キャラバン」を共に待っているというニュアンスになりますが、「砂漠行く」となると微妙に違ってきます。

作者自身は、「砂漠行くキャラバン」を俯瞰していて、さらにキャラバンが目指す町のオアシスの水で冷やされた「瓜」へと俯瞰の視点が移っていく、という具合ですね。どちらが正しいという問題ではなく、作者がどちらを表現したいかによって、選び取られるべき「行く」と「来る」の選択です。

冷し瓜浮かぬひとつが恐ろしい　初蒸気

ははは! なんで、一個だけ沈んだまま なんだ?という作者の訝しげな表情が見えてくる一句。「浮かぬひとつ」は中身が腐っているのか、はたまた河童の卵だったりして(笑)。あ、一句できたぞ!

「河童の卵みたいな瓜を冷やしけり／夏井いつき」

あめんぼの前足掛けて冷し瓜　とんぼ

「あめんぼ」と「冷し瓜」季重なりの句なのですが、全く気になりません。というよりは、よく写生したなあと感心したほどです。

「あめんぼの前足」というクローズアップの画面は、その「前足」が何かに掛かっていることを映し、さらにそれが水面からわずかに浮き出ている「瓜」であることを映し出す、このカメラワークが見事。静かな水のさまも感じ取れます。

冷し瓜三個浮かびて誰もゐず　じろ

井戸端の金盥じゃないかなあ。「冷し瓜」を「三個」浮かべているのに、どんなに声をかけても誰も出てこない。ちょいとご近所まで用足しに行っただけなのかもしれないなあと、「冷し瓜」を眺めながら、帰りを待つ…しかありませんね(笑)。

ばあちゃんの垂れるおっぱい冷し瓜　森田欣也

「ばあちゃんの垂れるおっぱい」の萎び具合と、冷たい水に浮く「瓜」の瑞々しさの対比が笑える一句!

「垂れるおっぱい」丸見えで、「冷し瓜」を出してきてくれる「ばあちゃん」の笑顔も見えてくるようです。昔は、「瓜」みたいに凛々たる「おっぱい」をもった婆ちゃんかもしれないなあ(笑)。

冷やし瓜信じられるは夫と吾　登美子

オレオレ詐欺だか、お母さん助けて詐欺だか知らないが、昨今の社会情勢が生み出す人間不信ってやつにうんざりしているのかもしれません。「信じられるは夫と吾」と言い放ち、二人で食べるのは我が畑でとれた瓜でしょうか。余所の野菜も瓜も農薬だらけですものと、二人で耕し二人で食べる「冷し瓜」の味は、いかがでありましょうや。

同時投句は不思議な感触が魅力。「とりけもの聲をとほくに冷やし瓜」

ふるさとの主峰の真下冷し瓜　金子加行

読んだ瞬間、四国のど真ん中に聳える石鎚山を思いました。「ふるさとの主峰」は豊かな伏流水をもたらす山。その「真下」には美しい水の湧く町があるのです。「ふるさと」「主峰」「真下」と絞り込み、最後に「冷し瓜」に焦点をあてたことで、冷たい湧き水の中に浮く瓜の姿がありありと見えてきます。

第19回　2013年5月30日週の兼題

鯵（あじ）

天

夕鯵や子どものことや銭のこと　やにほ

他の魚に置き換えられない「鯵」ならではの一句となると、これがなかなか難しい…のですが、いかにも「鯵」らしい庶民性に満ちた一句を見つけ、ほっなるほどと合点いたしました。

夕暮れの波止場では、いつもの顔ぶれが各々の場所に陣取って鯵釣りを始めます。語るともない会話の中で交わされるのは「子どものことや銭のこと」であるよと読むこともできますし、ポツンと浮かぶ浮子を眺めつつ、一人ぽつねんと「子どものことや銭のこと」を考えているよ、と読んでもいいですね。

「子ども」「銭」によって象徴される小市民的人生二天懸案への共感。「夕」の二字のさりげない映像喚起力の効果。取り合わせのバランスが、季語「鯵」をしみじみ感じさせてくれる作品でした。

地

鯵割くや米酢の瓶のうすあかり　神楽坂リンダ

「鯵」の南蛮漬けを作ろうとしているのでしょうか。「割く」という動詞によって、小さな小さな鯵であることが分かります。「鯵割く」という行為が繰り返される傍らに「米酢の瓶」が置いてある光景など珍しくもなんともないのですが、その瓶に映えるかすかな光を「うすあかり」と表現できるのが作者の実力。薄暗い厨に差すかすかな光のなんと美しいことでしょう。つんと鼻をつく「米酢」の匂いが、一句の隠し味として機能しています。

同時投句は少し大きめの鯵かな〜「実直を武器とし鯵を掻捌く」

酢に鯵をひたしてラジオ講座かな　ふづき

「酢に鯵をひたして」ですから、小さな鯵を丁寧に下ごしらえして、揚げて、酢にひたして、南蛮漬けの準備はバッチリ整ったところでしょう。家族が戻ってくるまでの時間を使って、「ラジオ講座」を聞こうというのが、なんてったって天晴れな向学心主婦です!

海薫る鯵の醤油を弾く夜　一心堂

新鮮な魚は「醤油を弾く」ようにぷるぷるしてますが、釣り立ての「鯵」を捌いて〜となると、まさにこのような活きの良さ!「弾く」という動詞の選択がいいですね。さらに上五「海薫る」が、豊かな「夜」を演出して「鯵」の美味さを引き立てます。

長靴がトロ箱の鯵蹴り渡す　理酔

市場の競りでしょうか。溢れんばかりの「鯵」を入れた「トロ箱」を買い手に向かって「蹴り渡す」、この複合動詞が巧いなあ！その動作から、この場の荒っぽい賑わいも一気に立ち上がってきます。魚臭い水に濡れた「長靴」の先までもが、生々しく想像された一句です。

魚熊に呼び止められて鯵を買う　らっこマミー

「魚熊」という強面な名と「鯵」の庶民性の取り合わせが愉快！魚屋さんの名前だとすると「～熊」ってのが妙に可笑しいし、行商のオジサンだとするとその風貌が想像できるし～（笑）。中七下五「呼び止められて鯵を買う」という動作の流れが、ちゃんと映像を見せてくれてる点も誉めたいところです。

鯵フライ六十点の妻めざす　逸子

共感するなあ！高級魚ぢゃない…「六十点」ラインのイメージをこう提示されると、ナルホド！と納得します。

「鯵」食べたいけど、刺身にするのも南蛮漬けにするのもめんどくさいし、お総菜コーナーの「鯵フライ」買って、自分が揚げたような顔して食卓にのっける～。いいのよ、いいのよ、わたし「六十点の妻」でいいんだから～なんていう、この明るい開き直りが好き！

同時投句を読むと、六十点妻もけなげに料理してるなあ～とまたまた共感。「空赤し小鯵骨まで揚がるころ」

売れ残る鯵は馴染みの猫に放る　しんじゅ

リヤカー引く行商のオバチャンを思いました。今日の行商コースとしては、最後のお得意さんちの顔見知りの猫ちゃん。「売れ残る鯵」のちっちゃいヤツは、ほら、お前にやるよと、いつものように「放る」のです。ミャオと寄ってくる「猫」も心得たもので、玄関先にオバチャンの声が聞こえると、のっそりとやってくるのでありましょう。

壇蜜の朝餉も鯵の開きかな　森田欣也

「壇蜜」とは今話題のタレント。最近、彼女の名前を詠み込んだ句に出会ったものですから、どういう方かちゃんとネットで調べました。彼女の持つ庶民性というのでしょうか、昭和の匂いというのでしょうか、それが「朝餉」の「鯵の開き」に象徴される一句。彼女の私生活を紹介するテレビか雑誌を見てヒネったのかもな～（笑）。上五「壇蜜」という固有名詞の響きと「鯵」という季語のイメージの落差が一句の味わいです。

鯵たたくずっと頭痛のズッキーニ　カリメロ

中七下五がいいな！新鮮な「鯵」を叩きつつ、傍らには「ズッキーニ」が置かれている状況なんだろうけど、そんな意味云々を考えるのではなく、リズムを楽しむタイプの句だよね。ひょっとすると上五がさらに進化する（つまり、季語が動く？笑～）可能性も残ってはいるけど、「ずっと頭痛のズッキーニ」は癖になりそうなほど楽しいフレーズです！

フンボルトペンギンまで空飛ぶ鯵　てんきゅう

こんな発想もあったか～と楽しくなったのですが、実はもう一句「ペンギンの口をめがけて鯵が飛ぶ／中谷麗夢」を「人」に頂いております。全く同じ場面ですが、「フンボルトペンギン」という固有名詞の効果、さらに空飛ぶジュウタンならぬ「空飛ぶ鯵」という詩語の楽しさが、「地」とのささやかな違いであったかな、と考える次第です。

飛べない鳥「ペンギン」と飛ぶ気はなく飛ばされている「鯵」を対比しつつ、動物園の餌やり光景がちゃんと描けているのがいいなと思う一句でした。

第20回　2013年6月6日週の兼題

夏木立（なつこだち）

天

学校は城址夏木立迫る　じろ

「学校は城址（しろあと）」に建っているというのですから、古い歴史のある学校、かつては藩校だったのかもしれませんね。小高い丘に聳える山城も、平地に築かれる平城も、城とは町の真ん中にその偉容を誇るものですから、この学校も町の真ん中なんだけれど、堀之内の緑に囲まれた静かな環境にあるのでしょう。

前半の措辞だけでこれだけの内容を伝え得る言葉の経済効率も見事ですが、後半の「迫る」という動詞の選択が巧いですね。樹齢を重ねた木々、校舎にかぶさらんばかりに広がる木陰、教室に吹き込む涼やかな風、それらを一気に感じさせるのがこの動詞の効果。百年前も今も変わらない「夏木立」の風が読み手の心に届きます。

同時投句「開発の済んで十年夏木立」

地

調教の馬の昂り夏木立　そうめい

何に怯えたのか、緊張したか、「調教」している「馬」の「昂り」がおさまりません。とにかく落ち着かせようと、なだめつつ「夏木立」のもとに馬を誘ってきたのでしょう。

「調教」の一語で想像される馬場、「馬の昂り」という小さな事件、それらの光景を「夏木立」という季語が受け止める語順も巧い一句です。

幻聴の嘶き楠の夏木立　登美子

「嘶き」とあるので同じく馬を想像しましたが、「幻聴」ですから生きた馬がそこにいるわけではありません。

私が想像したのは、神社にある馬の銅像、あるいは馬を描いた大きな奉納絵馬。「嘶き」が聞こえるかのような迫力のある馬だったのでしょう。

なぜ神社を想像したのだろうと考えてみると、後半の措辞の効果ですね。漠然とした「夏木立」ではなく「楠の夏木立」と樹木を特定してあるため、楠のご神木がある神社の光景へと誘導されたのだと分析します。作者の意図がそこにあっての選択ならば、実に見事なテクニックです。

夏木立風の手綱はよくしなふ　すな恵

「手綱」という言葉も馬を連想させますが、この句ではあくまでもイメージが主体となります。馬の手綱ではなく「風の手綱」ですから、「夏木立」を抜けて吹きわたってくる「風」を、馬上で感じる風に見立てていると読んでもいいでしょう。

「風の手綱はよくしなふ」という詩語が、「夏木立」を感覚的に表現。この季語の成分には、風の感触も多く含まれているのだなあと改めて実感させてくれた作品です。

同時投句「海賊になりたい少女夏木立」

夏木立熊よけの鈴腰に鳴る　松本だりあ

「熊よけの鈴」という中七から様々な場所や場面が思い浮かびます。北海道あたりを旅して土産物屋で買った鈴、山国のキャンプ場で「最近クマがでるので」と渡された鈴、日常的に山に入る暮らしをしている人の鈴、山を越えて通学する小学生たちの鈴等など。

下五「腰に」と描写したことで、読者もまた自分の「腰に鳴る」鈴を体感しやすくなり、それによって「夏木立」という季語の鮮度があがってきます。良い循環を獲得している一句です。

同時投句「ライオンのモニュメント吼ゆ夏木立」

棄て城の堀の底より夏木立　初蒸気

「夏木立」を描く場合、作者の立ち位置は、夏木立の中にいるか、夏木立へ近づいていこうとしているか……だろうと思っていたのですが、この句の視点は特異です。

「棄て城の堀」に水は全くなく、「夏木立」が伸び放題に延びているという光景ですから、作者は深い「堀の底」を見下ろす位置に立っているわけです。助詞「より」を使って、堀の深さをさり

げなく描くあたり、実に巧いなあと感心します。少なくともこんな視点で「夏木立」を描いた句にお目に掛かったのは初めてです。

ただ、このような視点で描かれた場合、「夏木立」という季語に内包される「緑陰」「夏風」等の季語の感知は薄らいでくるわけで……、独特の視点を面白く思いつつも、そのあたりがちと気になって「天」に推せませんでした。むずかしいね、俳句って（笑）。

同時投句の比喩にも驚かされました。

「虎伏せる如く夏木立の廃車」

地下にある水の王国夏木立　　**たかこ**

視点という意味では、この句にも驚きました。「夏木立」から「水」という言葉を連想し、地中を流れる伏流水を思うことは可能ですが、「地下にある水の王国」という表現には、なかなかたどり着けません。特に「王国」の一語が、この発想を詩へと昇華させました。「地下にある水の王国」が「夏木立」の生命を輝かせているのだという句意そのものが、美しい詩です。

我が子にはみどりと付けむ夏木立　　**ぱむだ**

「夏木立」の美しい頃に生まれた「我が子」でしょうか。いつか「我が子」を授かることがあれば、と読むこともできますね。

「夏木立」の鮮やか、みどりの風、心地良いひかり。この季節の美しさを「みどり」という名に託したいという思いが、ストレートに読者の胸に響きます。

御神体遷御す夏木立を抜けて　　**ふづき**

出雲大社でしょうか、伊勢神宮でしょうか。遷宮の場面を思い浮かべました。「御神体遷御す」という重々しい表現から一転、「夏木立を抜けて」と描写するカメラワークが鮮やか。

「を」を外して「夏木立抜けて」とすれば17音になるのですが、そのリズムでは軽くなりすぎると判断して、字余りのリズムを選ばれたのだろうと推測します。その判断や佳し。

夏木立獰猛に夜交信す　　**こま**

こんな発想もあるのかと驚きました。何が何と「交信」しているのかと考えてみると、こんな感じでしょうか。

①夏木立同士が交信している。
②夏木立と夜が交信している。
③夏木立が何ものかと交信している。

これらの読みを特定しがたいのが、「夜交信す」という措辞の曖昧さ。「獰猛に夜を交信す」とすると、その曖昧さがやや引き締まりますが、作者の意図にそぐっているのかどうかは不明です。

わたくしは不幸なこども夏木立　　**大五郎**

さて、この句はどう読めばいいのか。

「わたくしは不幸なこども」を文字通りに読めば、天童荒太著『永遠の仔』の世界へと入っていきそうです。が、子ども自身がささいなこと（叱られたとか、買って貰えないとか）でこんな台詞を吐いた可笑しさだと受け取ることもでき、あれこれ読みを迷ってしまいました。

が、この句の味わいは、その読みの迷いにあるのかもしれないと、思い直しました。「夏木立」という季語は、さまざまな読みを受け止めつつ、薫る風と木陰を広げています。

第21回　2013年6月13日週の兼題

夏の空（なつのそら）

天

デコトラに七つのミラー夏の空　　**ハラミータ**

「デコトラ」とは『デコレーショントラック』。車体にさまざまな装飾を施してるトラックです。一時期流行してたのか、こんなトラックによく出会いましたよね。

一句に描かれているトラックは、電飾ギラギラ、装飾過多、音楽大音量垂れ流し的なものではなく、ちゃんと日々の仕事に使われているトラックなんだと思います。トラックを愛するトラック野郎の心意気がちらりと見える渋系「デコトラ」だね、きっと。

丁寧に磨き上げられた車体、角度と大きさに持ち主のこだわりが見える「七つのミラー」。ミラーを一つずつ磨き上げるたびに「夏の空」はますます広がり、トラック野郎の心も晴れ晴れと躍ります。

誇らしげに光る「七つのミラー」の角度を再度確認し、いよいよ「デコトラ」は走り出します。車体全体が夏の太陽を弾き「七つのミラー」一つ一つに「夏の空」が映り込みます。ヴォン！と鳴らしたクラクションが、真っ青な「夏の空」へ響きわたります。

地

ペンギンを返す段取り夏の空　　**吾平**

動物園がお見合いのために借りていた「ペンギン」でしょうか、イベント会場に借りだしていた「ペンギン」かもしれませんね。返す日が近づいて、そろそろその「段取り」を確認しなくてはということなのでしょう。ほんのつかの間の付き合いだったけれど、ささやかな愛着が生まれている「ペンギン」との別れ。「段取り」という言葉の向こうに、小さな名残惜しさも感じ取れます。

「夏の空」の青さと明るさ、「ペンギン」の黒と白が、くっきりとした印象を形作る一句です。

腹の子のしゃっくりかしら夏の空　　**逸子**

何か小さくピクリと動いたのに驚き、あら？とお腹を押さえる若いお母さん。一体いまは何かしら？ いつもの胎動とはちょっと違う？……ひょっとして「しゃっくり」でもしたのかしら。微笑ましい気持ちで見上げれば、そこには真っ青な「夏の空」が広がります。「腹の子」がその目でこの青空を見る日も近づいています。

夏空や三試合目の水を撒く　　**めろ**

一読、甲子園球場での高校野球を思い浮かべました。「三試合目」というと午後の一番暑い時間帯でしょうか。午前の熱戦で荒れたグラウンドを整備し、丁寧に水を撒いていく作業が続けられています。

「三試合目」という言葉だけで、ここまでの光景を読み手に伝える言葉の経済効率がお見事。「土と芝生のムンムンは水を撒いたら一層凄みを増します／めろ」というコメントそのままの光景がムンムン立ち上がってきます。背後の夏空は、その青をさらに強くしていきます。

父さんがいつもせんたく夏の空　　**難波小2年　渡部愛梨**

いいなあ！ なんだか嬉しそうに堂々と洗濯物を干してるこの「父さん」、いいなあ！「夏の空」っていう季語のやる気満々の明るさが、この「父さん」に似合ってるな。「いつもせんたく」してくれて家事もバリバリ片付ける「父さん」カッコイイ！って、愛梨ちゃんも思ってるんだろうな。娘にこんな句作ってもらえる「父さん」も、サイコーの気分だろうな～♪

難波小俳句キッズ隊からもう一句。

「学校はべんきょうばっか夏の空／難波小3年松浦木乃香」たしかにおっしゃる通り（笑）。教室の窓から見える「夏の空」は、さあ、外に出て遊ぼうぜ！と誘ってるみたいに青いもんね～♪

夏の空氷原（スウォン）の豆腐瑞みずし　　**笑酔**

地名はその土地の特徴を表しますから、「氷原」も美しい水にめぐまれた土地ではないかと推測します。そこで作られる「豆腐」を思えば、「瑞みずし」という措辞にも納得がいきます。

抜けるように青い韓国の「夏の空」、隣国の「豆腐」の独特の白さ。何もかもが新鮮に見える旅の途上のスケッチです。

「韓国の南漢山城の中の村の手作り豆腐「オポクソンドゥプ」は瑞みずしい白い色の豆腐でした。／笑酔」

夏の空山羊を届けに二里歩く　　**公毅**

「山羊」を届けに「歩く」という行為、「二里」という距離が懐かしい時代の手触り。ペットとして楽しむものではなく、実用として飼おうとする山羊のように思えますから、お乳のでる立派なオトナの「山羊」を引っ張って歩いているので

しょう。ひょっとすると母乳のでないお母さんの代わりに、しばし借り受けられる「山羊」なのかもしれません。「夏の空」を見る度にその小さな思い出が蘇ってくる一句なのでしょう。

未帰還機マダ帰投セズ夏ノ空　根子屋

一読、百田尚樹著『永遠の0』を思いました。

防空壕に逃げた実体験を語って下さった方もいましたが、「夏の空」という季語が戦争の記憶を呼び戻すということ、今回改めて強く受け止めました。

季語「夏の空」に、元気で明るくてエネルギッシュな印象とは別な横顔が生まれたのは、あの終戦の日からでしょうか。暦の上で8月15日は初秋にあたりますが、人々の脳裏には暑い「夏の空」として深く刻まれているのでしょう。

戦争を知っている人たちが次第に少なくなっていくと、季語「夏の空」が抱えている暗い記憶もまた風化していき、溌剌たる広さと明るさをもった季語という認識に再び収斂していくに違い有りません。つくづく季語というものは、時代の記憶と共に生きていく言葉なのですね。

「未帰還機」は「帰投」してないからその名で呼ばれるわけですが、永遠に帰投しない未帰還機の存在を誰かが記憶しておくためにも、こんな句が詠まれていくべきかと思う次第です。

夏空や昼から酔うて寡婦の身は　神楽坂リンダ

この句も「夏空」が内包する影の記憶から生まれた一句かと受け止めます。「寡婦」となった理由を戦争と決めつける必要はありませんが、「昼から酔うて寡婦の身は」と嘆じる口調には、どこか投げやりな哀しみが漂います。あっかけらかんと明るい「夏空」が、「寡婦の身」の酔いを深めるのでありましょうか。

夏の空まみれの鳥が目の高さ　佐藤文香

己の眼球に映った印象を即座に「夏の空まみれの鳥」と感じ取り、言葉として表出できるのが見事。「夏の空」は「鳥」に対して背景でありながら、「鳥」を容れることで「夏の空」という器と成り得ており、それらの感知が「夏の空まみれの鳥」という詩語に結球しています。

また、下五「目の高さ」という措辞によって、読み手は自分たちの立っている場所の高さを即座に体感できる、この手法もまた巧みです。

飛行機雲右が私の夏の空　のんの

「お姉ちゃんと吟行中に、飛行機雲が空を半分こ。夏の空、右は私、左はお姉ちゃんで分けました。／のんの」

小学生のコメントに、さらりと「吟行中に」なんて言葉が出てくるのも嬉しかったのですが、「飛行機雲」の「右」を「私の夏の空」とする発想の可愛さに惚れました。お姉ちゃんと分けたというのんのちゃんですが、思春期の淡い恋の句のようでもあり、はたまた何かと決別する小さな意志のようでもあり。さまざまに読める点もこの句の豊かさです。

そのお姉ちゃんの一句がこちら。夏空を吸うという発想もまた、ビックリ可愛い～♪「ストローさし夏の空から充電中／だいあ@澄んだ青い空は、エネルギーが満タンな気がします！ 2年生の時に東京に転校したゆうなちゃんに会いに行きたいな。」

夏空をいざ蹴り上げん詠み上げん　紗蘭

「俳句甲子園の会場で応援はできないけれど、私の俳句で応援します！／紗蘭」

オーストラリアに留学中の中学生俳人紗蘭ちゃんは、小学生の頃、俳句甲子園のボランティアスタッフ（試合のタイムキーパー）を務め、その体験を夏休みの自由研究としてまとめたことがあります。

そんな俳句甲子園への思いを「いざ蹴り上げん詠み上げん」と表現。畳みかける勢いを、「夏空」の青さ、広さが受け止めます。いつかオーストラリアから俳句甲子園に参戦してくれる日が来るかも！

第22回　2013年6月20日週の兼題

合歓の花（ねむ はな）

天

合歓咲くや皇后様にある愁眉　てんきゅう

「合歓咲くや」という詠嘆の後に「皇后様」とくれば、昭和生まれの人間ならば誰でも美智子皇后陛下作詞「ねむの木の子守歌」を思い浮かべます。昭和世代にとっては忘れがたい一曲であります。その証拠に、「合歓の花」と「皇后様」を取り合わせた句、沢山たくさん寄せられました。

そんな状況の中で、敢えてこの句を「天」に推そうと決めたのは、後半の措辞の持つ奥行きです。「合歓咲くや」という上五に対して「皇后様」とくれば、誰もがあの曲を思い浮かべるはずだから、敢えてそこには触れず、長い年月の中で「皇后様」の眉間に刻まれた憂いを「愁眉」と表現。作者のこの判断が実に見事です。

皇室という特殊な世界に飛び込んだ民間人初の皇太子妃として過ごした年月、二人の息子に妃を迎え、一人の娘を民間へと送り出した母としての年月。皇后として歩み出された様々な憂いの年月。その感慨すべてを「皇后様にある愁眉」と表現した一句の思いに、深く心を打たれます。

上五の季語「合歓咲くや」は、癒やしの子守歌として「皇后様」ご自身を慰め、その桃色の花の濃淡は美しい感情の襞となって読者の心を捉えます。やがて「皇后様」の「愁眉」を開く日が訪れることを願う国民の一人として、心に刻みたい一句です。

地

みずうみはかっぱのうたげ合歓の花　竹春

実に不思議な感触の一句です。咲き始めた「合歓の花」を見ると、「みづうみでかっぱたちがうたげを始める頃になったのお」と、村の長がつぶやく……そんな妄想をいだきました。

「合歓の花は、静かで優しくアンニュイなイメージ」と語る竹春さん。「合歓の花」があのような形状であのような色に咲くのは、何か特別な理由があるに違いないと、ワタクシも思います。「みずうみはかっぱのうたげ」という平仮名表記が、まるで美しい呪文のように思えてきた一句でありました。

三日月の遠心力や合歓の花　めいおう星

「三日月」に対して「遠心力」という言葉を想起できたことに、ささやかな驚きを持ちます。一句に添えられていた「拮抗する重力と遠心力。そのほとりに咲く合歓の花」という作者の言葉が、まさにこの句が詩たり得ている理由を語っています。「拮抗する重力と遠心力」のかすかな波動が、「合歓の花」のあの蘂をかすかにかすかに揺らせているのでしょう。

猫の髭動かぬ合歓の花の夕　もね

「猫の髭動かぬ」の読みは二通りに分かれます。一つは、風が動かない夕暮れに「猫の髭」もぴくりとも動かないよ、という読み。もう一つは、「猫」は死んでしまったという読み。

「髭」のような細いものと、羽毛のような「合歓の花」の形状を取り合わせる句はいくらでもありましたが、一句が示唆する二つの読みを静かに受け止める「合歓の花の夕」という後半の措辞の巧さを誉めたい一句。

ねむの花妻は東の空より来　みちる

この句には、三通りの読みを思いました。まずは「妻は東の空より来」の文字通り、自分の住む町よりも東の方向から（例えば、松山に住む人間からすれば、東京の方向から）やってくるよ、という意味。

二つ目は、僕の未だ見ぬ「妻」はきっと「東の空」からやってくるに違いないという読み。この場合、「東」は太陽の昇る、つまり新しい明日の来るイメージですね。

三つ目は、すでに亡くなっている「妻」を恋うているという読み。西方浄土ではない方向としての「東」という意味。

季語「ねむの花」が内包するさまざまなイメージが、一句を豊かに彩っているといえるでしょう。

同時投句は、妻との素敵な夜の一場面でしょうか。「仏蘭西の甘めのソース合歓の花」

合歓の花一錠分の夜が明ける　十六夜

「合歓の花」から「眠る」という言葉を発想する句は、当然のことながら沢山届きました。それらの類想類句から一歩抜けたのは、「一錠分の夜」という詩的単位の設定です。

あおあおとした未明の空を眺めつつ「一錠分の夜」が明けたなあと見渡せば、そこに未だ色を失したままの「合歓の花」がある。やがて太陽が昇り、「合歓の花」に合歓の花の色がもどってくるまでを、作者と共に過ごしたかのような気持ちにさせられました。

眠れない夜を過ごし、誘眠剤のお世話になったことのある人だから書ける言葉なのかもしれません（あくまでも推測ですが）。

花合歓や生きるも死ぬもハルシオン　はまゆう

さらに切実な一句。「ハルシオン」とは、ギリシャ神話の女神の名であり、睡眠導入剤の名前でもあります。「生きる」ために眠ろうとする「ハルシオン」もあれば、「死ぬ」ためにこれを大量に飲もうとする人もいると、その矛盾をなげく作者。「花合歓」は生きとし生ける人々のための、眠りと癒やしの象徴として詠み込まれております。

全く関係の無い余談ですが、ワタクシも年齢のせいか、最近夜中過ぎに目が覚めてしまうことが間々あります。最初は困惑もし、眠らなくては！と頑なに思うこともあったのですが、「ま、一晩二晩寝ないでも人間死なないし、本でも読むか！」と考えるようになったら、すっかり良い感じになりました（笑）。本は読めるは、年齢相応の睡眠は取れてるは、エエことだらけやん、五十代後半～♪と思ってます（笑）。

致死量のマシマロぶつけ合歓の花　カリメロ

同じく「死」の一字がありますが、こちらはぐっと趣きが変わります。

「致死量」という不穏な言葉が「マシマロ」と合体した詩語。この逆転の発想を可愛いと受け止めるか、その可愛さの奥にあるブラックユーモアを主体としてあくまでも読みを広げるか。「合歓の花」という季語は、二つの読みのあいだに、ゆらゆらと咲き増えていきます。

メリーさんのひつじの色の合歓の花　吾平

「合歓の花」→眠り→ひつじを数える、という発想から生まれた一句でしょうか。いくら数えても眠れない「ひつじ」の色は白でなく「合歓の花」の色だよという発想の、可愛い意外性。「合歓の花」の句として、こういう楽しさもあっていい！

ご本人の弁によると「メリーさんのひつじ」はウクレレの入門曲なんだそうです。ウクレレ俳人吾平くん、なるほどそこから掴み取った発想でありましたか（笑）。

同時投句「子の顔は太陽の塔合歓の花」に対して「そんな顔で生まれて来ました」というコメント。申し訳ないが、笑ってしまったよ。

わたくしは美眠家である合歓の花　花屋

「美眠家」は作者の造語でしょうか。美しい眠りをもっている人という意味でしょうか。

「合歓の花」自身の台詞として上五中七が呟かれていると読んでもいいのですが、ワタクシは作者自身の言葉として読みました。そう読むことで、「わたくしは美眠家である」という堂々たる主張から「合歓の花」の映像への展開がより鮮やかになり、「美眠家」という得体の知れない自信がより強く印象づけられるのではないかと考えます。「合歓の花」という季語がもっている妖しさと「美眠家」という造語との出会いに、詩としての時空が広がっていきます。

第23回　2013年6月27日週の兼題

夏野（なつの）

天

予後の眼に夏野の匂ひ飽くるまで　妙

「予後」とは、病気治癒後の経過を意味する言葉。この二語で作者の置かれた状況を語り、「眼に」で眼病を患っていたに違いないと推測させる、このあたりのテクニック巧いですね。

とはいえ、上五にこのような情報量をさりげなく入れることは、俳句を少し勉強すれば出来なくはない技術。一句の真の魅力は、「予後の眼」でもって「夏野の匂ひ」を感知する肉体的感受性の豊かさにあります。

作者の「眼」に飛び込んできたのは、爆発的な「夏野」。その緑は「予後の眼」を満たし、その草いきれは圧倒的な勢いで「予後の眼」に押し寄せます。嗅覚で感じ取るべき「匂ひ」を、眼球で感じ取る感受は、眼病の術後という状況におけるリアリティとして、読み手の心に鮮やかに飛び込み、下五「飽くるまで」という余韻が、「夏野の匂い」にいつまでも浸っていたい作者の思いを優しくやわらかく受け止めます。

地

オホーツクの夏野に叫ぶことも旅　美杉純

「旅」とは何か、と定義するところにも詩が生まれます。「夏野に叫ぶこと」は日常から脱してこその行為。広大な「夏野」に向かって大声で叫んだ体験が「旅」という行為を象徴します。

「～ことも」の「も」は油断すると散文的になりがちな要注意の助詞ですが、この句の場合は、「他にも色々あるけれども夏野に叫ぶこともまた…」と語ることで、旅のさまざまなシーンを想像させる効果があります。

「オホーツク」が連想させる雄大さも一句の要。固有名詞の効果がしっかりと生きている作品です。

なだらかな夏野に牛を撒いてある　ポメロ親父

全く同じ光景を詠んだ句は沢山ありました。が、この句の後半「撒いてある」という表現がオリジナルな工夫。誰かが意図して撒いたかのような映像のありようが、くっきりと想像されます。「なだらかな」というさりげない描写も、この「夏野」の地形を映像化して見せてくれる重要な要素でした。

同時投句「夏野豊かに毒草も肥えてゐる」

犀のごと眠る夏野の火砕岩　樫の木

「犀」から始まるので、一瞬動物のサイそのものを思い浮かべるのですが、「犀のごと眠る」と比喩へ展開。最後にそれが「夏野」に点在する「火砕岩」だと分かる、この語順が巧みです。

読者の脳内では「犀→眠る→夏野→火砕岩」各々の言葉が詩的火花を飛ばしつつ、一句の映像を形作っていきます。似たような光景を描いた句は沢山ありましたが、表現の工夫がオリジナルな一句として結球しました。

埋め戻す遺跡夏野へ眠れ眠れ　不知火

「遺跡」の発掘では、調査が終わると再び「埋め戻す」という作業が行われます。

時代を超えて生きた人々の生活を語る「遺跡」は、埋め戻されるという行為によってもとの「夏野」に戻っていきますが、「眠れ眠れ」という作者の思いは、「夏野」を覆う癒やしの呪文のように広がっていきます。「夏野」の下にあるものへ思いを馳せることもまた、発想の工夫であります。

犬の死を覆いつくして夏野なり　逸子

「夏野」に埋められた生き物の死体を思った句も幾つかありましたが、この句を「地」に推す理由は二つあります。一つは「犬」ではなく「犬の死」と述べた点。二つめは「夏野なり」と断定した点です。

「犬の死体」といえば物体ですが、「犬の死」となると象徴性を持つ言葉として機能し始めます。「犬の死」というものを覆いつくしているのが「夏野」であるよ、という断定に詩が生まれ、断定されることによって「夏野」は季語としてのエネルギーをより強烈に発することになります。

ロケットの焦げる匂ひの夏野かな　みちる

「夏野」にこんな「匂ひ」を感知する人もいるのだなあと思いましたが、現実的に「夏野」の向こうにロケット発射場がある場所もあるでしょうから、イメージとして映像として、どちらの読みも可能ですね。「夏野」に溢れるさまざまな匂いを「ロケットの焦げる匂ひ」と比喩したのか、「夏野」の向こうで今発射された「ロケット」の「焦げる匂ひ」を感知したのか、さてどちらでしょう。

人に鳩尾太陽に夏野　めいおう星

こういう取り合わせの感覚は、この作家の独壇場かもしれません。「人」には「鳩尾」という部位があるという前半の措辞に対して、「太陽」には「夏野」があるという後半の措辞。この対句にどんな詩を読み解いていくか、読者に挑戦してくるような句です。

「鳩尾」は殴られると息が止まるような強い衝撃を受ける部位。人体の急所の一つです。「鳩尾」は「人」の部位ですが、「夏野」と「太陽」は一体ではありませんから、単純な対句とは読み難い一句。ここは「太陽」にとって「夏野」は急所である、と読み解いてみましょうか。

太陽が発するエネルギーを悉く吸い尽くすかのような「夏野」。熱と光を核とする「夏野」の緑は、ひょっとすると太陽の急所と成り得るほどの爆発力を持っているのかもしれません。「生きるもの、産み出すもの、発するもの」に衝撃を与える詩語として「鳩尾」があり、「死するもの、衰えるもの、吸い尽くすもの」を暗示する詩語として「夏野」があるのかもしれません。太陽の位置から見た「夏野」はブラックホールのように深い口を開け、暗い「鳩尾」のように息づいているのかもしれません。

鍵盤を強打し現れる夏野　笑松

「鍵盤を強打し」から、強い曲想のピアノ協奏曲を連想しました。強い日差し、ざわめく夏風、強い草いきれ、虫の羽音、夏蝶の乱舞、一楽章ごとに、作者の脳裏には「夏野」の光景がありありと立ち上がってきます。

「鍵盤を強打し」という音のイメージだけを提示し、「現れる」と予告し、季語「夏野」を表現したこの手法が、いかにも「夏野」らしい力強さを表現しました。どんな曲をイメージして作った作品なのか、作者に聞いてみたくもなった一句です。

空き缶一つあれば夏野に暮るるまで　四万十太郎

昭和のよき時代を思わせる一句。子どもたちの遊びは「空き缶一つ」、棒きれ一本あれば事足りた時代。「あれば」は仮定条件の意味ではなく（あったとすれば」ではなく、確定条件「あったので」、偶然条件「たまたまあると」、恒常条件「あるといつも」といったニュアンスを表現しています。

皆さんは、どのニュアンスでこの句を鑑賞したいですか？

第24回　2013年7月4日週の兼題

日々草（にちにちそう）

天

日日草点字タイプのベルちさし　てん点

1行32マスの「点字タイプ」には「後6字打てますよ、と知らせるベルが付いている」のだそうです。作者は日々「点字」に接している方なのでしょう。行の最後を知らせる「ベル」が小さく鳴ると、次の行に移るための操作をし、新しい行に移ると、再び点字を打つ速度をあげてゆく。一連の操作のアクセントのように「点字タイプのベル」は小さな音をつないでいきます。

「日々草」は、初夏から晩秋まで次々に花をつけるということでこの名がありますが、「点字」を打っていく作業も一つ一つ積み重ねてゆく行為。「点字」に打ち直されていく言葉は、「日々草」の一花一花のようにさまざまな色合いで紡がれていくのでしょう。

地

日々草千秋楽に五分の星　四万十太郎

毎日星取りを重ねていく相撲の現場と、日々花を咲き継いでいく「日々草」を取り合わせたところに、工夫があります。直接「相撲」というと秋の季語になってしまいますが、「千秋楽」の一語で季重なりを回避。しかも、今場所最後の一番という状況もきちんと伝わりますね。

「千秋楽に五分の星」ですから、七勝七敗の五分。この一番に勝ち越しがかかります。「日々草」の凡なるよろしさを思えば、前頭何枚目までコツコツ努力を重ねてきた力士かもしれませんね。

日々草星のひしゃくで蒔きました　猫ふぐ

「星のひしゃくで蒔きました」というフレーズに対して取り合わせが成立しそうな花は他にも沢山ありそうです。例えば、よく星に喩えられる「犬ふぐり」の青い花。正直、そちらでもいいじゃないかと思ったのですが、よくよく考えてみると、光年という時間の中にある「星のひしゃく」で蒔かれた「日々草」だから、こんなに長い間、花を咲きつないでいくのかも、と思い直しました。「星のひしゃく」という詩語が、アニメーション映像のように「日々草」の咲いていく様子を想像させます。口語の語りもまた一句の味わいです。

スナックの昼あく扉日日草　すな恵

一読、松山市道後の宝厳寺へ上っていく坂道の両側にあった「スナック」（めっちゃ具体的にいうと「バー姉妹」という店）が浮かんできて、店先のプランターに「日々草」植えてそう！と、めちゃくちゃ納得！（笑）。この坂道を上り詰めた宝厳寺の門前には、昔遊郭もあり、子規は漱石と一緒にこの界隈を歩いています。

勿論、この句の鑑賞としては全国津々浦々の「スナック」を思い浮かべてもらえばいいわけで、開いた「扉」の奥にはかったるい真昼の倦怠が澱み、店の暗がりには人の気配もあるのでしょう。そんな店先の「日々草」はここに生きる人たちの営みを暗示します。

同時投句「母さんの旧姓ふしぎ日々草」

日々草女ばかりの喫煙所　天宮風牙

煙草一本吸うのに、わざわざ建物の外に出なくてはいけない時世。「喫煙所」で出会う人たちには、仲間意識というほどではない連帯感も生まれてくるに違いありません。

足元のプランターには「日々草」が花を咲かせ、昼休みの「喫煙所」に偶々集っているのは「女ばかり」。だからといって、親しげに語るわけでもなく、各々が一本分の紫煙を味わいつつ、各々の思いにふけり、それが終わればそそくさと自分の部署に戻っていくのでありましょう。

校章の日々草は輝きぬ　おはぎ

「校章」に花をアレンジする学校はあるかと思います。桜ならば旧制中学、百合や鈴蘭は女学校のイメージかな。「日々草」を「校章」にしている学校があるとすれば、〇〇家政学院って感じかな（笑）。決して派手ではなく、長い日々を咲き継ぐ姿は、良妻賢母を育てるための学校、ってイメージ。いやいや、これはワタクシの勝手な想像ですが（笑）。

「校章の～輝きぬ」という叙述はいかにもベタでつまらないのですが、真ん中に「日々草は」が入るだけで、俄然想像がかき立てられる、そこがこの一句の興味深いメカニズムでありました。

日々草父は研究所の所長　ひで

なんかいいなこの「父」この「研究所」。何を研究してる所かは分からないけど、

玄関あたりの花壇だかプランターだかには「日々草」が植えられ、日々花を咲かせているのでしょう。

当然ながら、草花の世話をしているのは「父」であり「所長」であるこの人物。草花を愛でることと、自分の研究以外にはとんと役に立たないって感じがするのは、これまたワタシの勝手な思い込みだけど、何よりもいいのは「父は研究所の所長」という措辞。作者の愛情がささやかに感じ取れて、そこが日々を咲き継ぐ「日々草」の気分にぴったりなのでしょう。

くたびれて酒飯女日々草　理酔

こちらはドスンと腸に伝わってくるような一句。男臭くて汗臭くて、そんな世界にも「日々草」はやはり日々の花を咲かせているんだよなあ。

あまりにもストレートな上五に続く「酒飯女」という三つの単語。たったこれだけの叙述で、句中の人物を生々しく浮かび上がらせる手法は、やはり巧いというしかありません。

「日々草」は日々を咲き継ぐ花ですから、こんな日常もまた現実。決して、明るいだけの花ではないことも、この季語の持つ奥行きというべきでしょう。

同時投句「下手くそが研ぐ肥後守日々草」

阿部定の声なき笑ひ日日草　吾平

阿部定事件を描いた映画『愛のコリーダ』（大島渚監督）を観たのは、大学生三年の夏だったか？ 映画好きの友人に連れて行かれ、どんな映画なのかも知らずに見始めたから、いきなりの場面に目玉ぶっ飛び！ 見終わった時、もうぐったりだったけど、友人は「いつきちゃん、せっかくだからもう一回観る？」なんていうんで、二度吃驚。彼女は、結局映画の仕事をするようになり、今になってみればナルホドねえと納得する次第なのですが（苦笑）。

後にも先にも一度っきりしか観てない映画ですが、あまりに強烈で、小さな場面が脳の襞にこびりついているのを、今回この句に出会って再認識しました。実話をもとにした映画だそうですが、実話というのが実は最も怖いのかもしれません。定役をした女優さんはどなただったか？ たしかに「声なき笑ひ」を静かに浮かべておられました。凄惨な事件を起こした「阿部定」という女性の日常にも、「日々草」は小さな花を咲かせていたのでしょうね。

改めて、「日々草」はほのぼのと明るいだけの花ではなく、日常の向こうに口を開けている影の存在も知っている花であるよと、生々しく思い知らせてくれた一句です。

転職の行くに任せよ日々草　醉風

「転職」という言葉、離職という言葉が当たり前のように聞こえてくる昨今。時代の様相に溜息ばかりでてきます。「行くに任せよ」は、諦めのようにも聞こえますが、明るい開き直りのようでもあり。そんな私たちの足元で、「日々草」は今日一日のことだけを考えて、今日の花を咲かせます。

「会社都合により月末で離職」男48才、本来の自分はどこにあるのか」とつぶやく醉風さん。そんな日々や思いを俳句に書きとめていくこともまた、俳人人生の酔狂というヤツかもしれませんなあ。しみじみ。

第25回　2013年7月11日週の兼題

金魚（きんぎょ）

天

金魚水葬手折りて流す野の花も　めいおう星

生きて泳ぐ金魚をありありと描いた一句を選ぶつもりだったのですが、この句の美しさについふらりと籠絡されてしまいました。死んだ「金魚」を描いた句はたくさんありましたが、お墓を作る、土に埋める、そんな埋葬の光景とは全く違う「水葬」という言葉に意表を衝かれます。

かつて水中をたゆたうように泳いでいた「金魚」は今、ただの美しい色として水面に浮かんでいます。「水葬」の二語は、その冷たい体を手のひらに載せ、そっと水に放すまでのささやかな時間を読者に追体験させます。泳がなくなった「金魚」がゆっくりと流れにのっていく瞬間、水に煽られる鱗、美しく濡れた鱗、見開かれたままの目。そんな小さな映像の断片が、浮かんでは消えていきます。

「手折りて流す野の花」に表現される弔意は、「も」という助詞によって、「野の花」自身が生贄として捧げられたかのような印象を獲得し、オフィーリアの物語めく「水葬」という言葉の魅力は、「金魚」という美しい生き物に永遠のゆらめきを与えます。死んで尚美しい生き物として「金魚」を描くという発想、さすがの一句でありました。

地

金魚とは言えぬ大きさかもしれぬ　不知火

「金魚」がどこまで大きくなれるのかは分かりませんが、こんな飄々とした作品も愉快。勿論、上五に他の魚を入れても成立はしますが、夜店ですくってきた「金魚」が思いがけず長生きしているに違いないことが容易に想像でき、「金魚とは言えぬ大きさ」もある程度推測できるところにリアリティがあります

この貌はたぶん眠ってゐる金魚　神楽坂リンダ

魚たちは、たしか瞼が無いから、目を開けて寝るんでしたよね？ 金魚鉢の中の「金魚」の表情から、「この貌はたぶん眠ってゐる」と大まじめに観察している作者自身が愉快。金魚鉢越しに、大きく歪んだ「金魚」の「貌」が見えてくる一句。

金魚の入つた盥流れてきて耀場　ポメロ親父

吟行で「金魚」の品評会を見に行ったことがあります。まさにこのような光景で、白い琺瑯のボールの中に一尾ずつ入れられた「金魚」が次々に品定めされていきます。

掲出句は「耀場」ですから、ここで値段がつき、出荷されていく現場。最後に出てくる「耀場」の一語によって、飛び交う耀の声も聞こえてきます。上五の「金魚」から「盥」「耀場」と次第に光景が広がっていく、この語順が巧いですね。

同時投句の「白き琺瑯洗面器に蘭鋳」「袋に酸素満たし獅子頭の出荷」も、同じ現場の句でありましょう。

蘭鋳の自慢しあつてゐるはずが　亜桜みかり

「金魚」の傍題「蘭鋳」。丹精込めて育てた「蘭鋳」の「自慢しあつてゐるはずが」とだけ言って、後を想像させる手法が俳諧味を醸し出します。何かの言葉尻で気まずくなったのか、派手な喧嘩になったのか、その後を想像するのも読み手の楽しみです。

生ぬるき腹持つ金魚放ちけり　じろ

「腹」にも特徴があるのが「金魚」という生き物。それを「生ぬるき腹」と表現したのが、作者の感性。必要以上に膨らんでいるかのように見える腹が、生ぬるく立ち上がってくる感触。下五「放ちけり」によって、「生ぬるき腹」を揺らしながらゆっくりと泳ぎ出す様子もありありと見えてきます。

病んだ腹白く膿ませてゐる金魚　カリメロ

どう見ても健康ではない「金魚」の「腹」は、尚更不気味です。体の色や鰭が美しいからこそ、「病んだ腹」が際立つのかもしれません。その「腹」を「白く膿ませてゐる」と表現したところに、作者の率直な観察眼が見て取れます。

降格の辞令金魚は藻にひそみ　ふづき

「降格の辞令」という非情。その日の「金魚」が「藻」に潜んだまま動こうともしていないのは、不穏な空気を感じ取っているからなのでしょうか。「降格」「ひそみ」とマイナスイメージの言葉をバランスよく配している点に工夫があります。

いはくあるヤマトホテルの金魚たち　松本だりあ

「ヤマトホテル」とは、日本が満州に進出していた時代、大連や奉天にあっ

た有名なホテルの名前です。そんな固有名詞に対して取り合わせられた季語「金魚」が、日本人としてのある時代への感慨を表わします。上五「いはくある」のもったいぶった表現、下五を安易に「〜かな」などの詠嘆にもっていかず、「金魚たち」という映像の表現にした点も評価したいところです。

出目金の向き変はるとき夕暮るる　舞

実にさりげない一句ですが、「出目金」のシルエットと色合いが印象的。ゆっくりと「向き」を変えていく動きが、「夕暮るる」という時間の光景を、読者の脳裏にありありと再現します。こんな地味な句の味わいも捨てがたいものです。

翻る金魚の尾びれこそ淫乱　理酔

目の前にある光景は、さきほどの句とあまり変わらないのですが、この作者は「翻る金魚の尾びれ」のピラピラした感じを「淫乱」だと断定します。すると読者の脳は、その断定に触発され、自身がイメージする「淫乱」な形や色を想像し始めます。この句はそんなメカニズムでもって、読者の心を侵食していく作品なのです。

長生きの月夜の金魚だからあげる　緑風佳

これはよくよく読むと怖い句です。「長生き」の「金魚だからあげる」と言われても、長生きだからこそ明日死ぬかもしれないわけで、それを善意で押しつけられているかのような不条理感。ニッと笑って「金魚」を手渡されているような不気味さもあります。

「月」は秋の代表的な季語ですが、この句においては「月夜の金魚」という詩語として機能しており、その詩語がさらに静かな怖ろしさを演出しています。

どうせ死ぬきつと死ぬ妻似の金魚　小木さん

こんな句に出会うと困惑します。作者は「妻似の金魚」を大切に思っているのか、憎んでいるのか、両極端な解釈が存在する句だからです。

こんな金魚なんて「どうせ死ぬきつと死ぬ」に決まってるよ、「妻似の金魚」なんて死んでくれたら清々するよ、と毒づく憎悪。一人が淋しくて「金魚」を飼ってみたけれど、「妻」の顔に似てるじゃないか……妻が死んだように、この金魚も「どうせ死ぬきつと死ぬ」という怯えと慟哭。皆さんはどちらの解釈をとりますか。

第26回　2013年7月18日週の兼題

朝凪（あさなぎ）

天

朝凪や鳴門は旅の途上なる　蓼蟲

「朝凪」とは、風の動きがとまる気象現象。陸地の気温が高い昼間は、海から陸に向かって海風が吹きますが、陸地の気温が低くなる夜は、逆に陸から海へ陸風が吹きます。海風と陸風が入れ替わる朝夕は、陸と海の気温が釣り合うために風が吹かない状態となり、これを「朝凪」「夕凪」と呼ぶわけです。

「凪」＝海の印象があるので、一見、地理のジャンルの季語のように思いがちですが、実は天文の季語。風の種類というか、風の有る無しを述べる季語だと考えればいいようです。

さて、この一句、「朝凪や」の詠嘆の後に出てくる「鳴門」という地名が効果的ですね。「朝凪」は瀬戸内海の風物詩ともいえる気象現象。「鳴門」は四国徳島の玄関ともいうべき場所。季語と地名の相性は抜群です。

さらに続く「鳴門は旅の途上なる」という措辞がまた佳いですね。旅の途上、休憩で立ち寄った「鳴門」の海。折しも「朝凪」の時間帯の瀬戸内海は、平らかな美しさ。この「旅」が商用であるのか観光であるのかは想像するしかありませんが、一句のゆったりとした声調を思えば、旅を楽しむ心がほのぼのと伝わってきます。

ただ、「朝凪」という季語は、風の動かない蒸し暑さという情報も有しているわけで、冷房の利いた車内で見るだけの「朝凪」はその美しい面だけを感受しているともいえます。今日も暑い一日になるぞ！という実感を有しつつ、作者の眼前には「朝凪」の「鳴門」の海が静かに広がっており、その暑さの予感もまた「旅の途上」の実感でありましょう。

地

朝凪や海は沖から目を覚ます　雪花

「朝凪」の終わりは、海から吹き始める風によってもたらされます。「朝凪」は眼前の海をベッタリと眠らせているかのようだけれど、「海は沖から目を覚ます」のだよ、もうすぐ海風が吹き始めるよ、という作者の呼びかけが聞こえてくる一句です。

市場はや無人となりぬ朝の凪　小市

「市場」への水揚げは夜明けに行われたのでしょう。すっかり夜が明けきる頃には、すでに競りも終わっています。「市場はや」という実感が「無人」となった市場のがらんとした光景を際立て、魚の臭いの混じるむっとする暑さが、「朝の凪」の市場を覆い尽くそうとしています。

朝凪やもと漁師らの集う店　のり茶づけ

どこの魚市場にも、こんな「店」があるに違い有りません。安くて美味い「店」には、何十年もここで営業している婆ちゃんがいて、「もと漁師ら」は閑にまかせて、この店に入り浸っているのでしょう。「朝凪」の海を背景に、「店」の佇まいまでもが想像できる一句です。

朝凪や漁協の影の四辺形　マーペー

空気の動かない「朝凪」の蒸し暑さ。朝とはいえ、すでに熱を持ち始めている太陽は、容赦なく地面の影を濃くしていきます。「漁協の影」とは漁業協同組合の建物の影でしょうね。「漁協」の二字から魚臭さも伝わり、「影の四辺形」でくっきりとした影の明暗が見えてきます。「四辺形」と具体的に描写したことで、一句に強いリアリティーが生まれました。

朝凪や島にひとつの藻塩小屋　ひろ志

「朝凪」の「島」にあるたった一つの「藻塩小屋」では、すでに作業が始まっているのでしょうか。それとも、これから始まる作業を前に静かな佇まいを見せているのでしょうか。

塩を作る作業は、干して焼いて煮詰めて、という熱との闘い。「朝凪」のねっとりとした空気は、今日一日の暑さを象徴するかのように「藻塩小屋」の辺りに充満しています。

朝凪や厳かに飯炊く煙　猫ふぐ

「朝凪」と「飯炊く煙」だけだとつまらないのですが、「厳かに」の二語が入るだけで、「飯炊く煙」は普遍的な意味を持ち始めます。人が生きるために炊く「飯」、そこからのぼる「煙」は、今朝も生きて目覚めている証拠の煙です。「朝凪」の無風は、まっすぐに立ち上る「煙」の映像をありありと伝え、「厳か」という言葉のイメージをより際立てます。

朝凪や剣ひたぶるに海光へ　たま

空気の動かない「朝凪」の中での朝稽古でしょうか。「剣ひたぶるに」という措辞から「海光へ」という叙述の流れが巧いですね。風のない海へ、風を呼ぶかのように何度も何度も打ち下ろされる「剣」。その無心な動作と、動かない「朝凪」の海の光景が、印象深い一句となりました。

朝凪に漁網干畳干す浜辺　稲穂

繕うために広げているのでしょうか、「干畳」という数の迫力がいいですね。勿論、「干」という数詞は、実際に「干畳」あるとかないとかではなく、多いという意味の美称だと思って下さい。べったりと凪いだ「朝凪」の海、こってりと重い空気、潮臭い「漁網」。こんな「浜辺」の光景を確かに見たことがあるなと思

わせてくれるのが、一句の力です。

朝凪や寡婦の朝餉にありついて　蘭丸

これはまた、ドラマの一場面のような一句ですなあ……。「寡婦」つまり未亡人の家の「朝餉」を食べているという状況そのものが意味深ですが、さらに下五「ありついて」が曲者ですね。

身に纏わり付くような「朝凪」の中、「寡婦」をたらし込んでの「朝餉」に違いないと、勝手に脳味噌がストーリーを作り上げてしまいます。「ありついて」という措辞からすれば、独り身の弱みにつけ込むような男に決まってますよ、これ！

読み手をそんな想像の世界に踏み迷わせることそのものが、この句の持つ魅力なのでありましょう。

朝凪や洗へる貌の夜の部分　牛後

最初、この中七下五に対しては、「朝凪」と同じようなどんより暑い朝のイメージを持つ「朝曇」でもよいのではないか、と懐疑的な思いを持ちました。が、何度も読んでいるうちに、「朝曇」だとただ朝起きて洗面台で顔を洗ってる光景に終わるな、ということにハタと気づきました。

上五を「朝凪や」とすることで、海の光景、動かない風の表情などが浮かび、その後で「洗へる貌の夜の部分」と畳みかけられると、「夜の部分」という措辞が比喩的象徴としてより強く映し出されてきます。

朝になると朝の顔を保持する自分だけれども、今朝の「貌」には「夜の部分」が色濃く残っている困惑。「朝凪」のねっとりした暑さのせいか、なかなか洗い落とせない己の「夜の部分」を、じっと凝視する作者がいます。

安酒のまだ抜けずして朝凪ぎぬ　奈津

嗚呼、読んだとたんに、己の二日酔いの記憶が怖ろしいほどありありと蘇ってきて、思わずオエーッ！となりました。ただの酒ではなく「安酒」が、ねっとりと暑い「朝凪」の季感に似合います。「安酒のまだ抜けずして」という措辞から、ゆっくりと凪いだ海を見渡すような「朝凪ぎぬ」という押さえに工夫があります。

第27回　2013年7月25日週の兼題

オクラ

天

ここからがオクラの尻尾けなげなり　神楽坂リンダ

「オクラ」を切っていくと、可愛い星形の断面が幾つも幾つも現れます。次第に細くなる莢の先端に向かって切り続けていくと、星形も次第に小さく小さくなっていきます。星形の断面がついになくなるところを、作者は「ここからがオクラの尻尾」と決めたのでしょう。まな板にある極小の星の形を眺め、なんと「けなげ」であることかと感嘆する作者のまなざしの、なんと優しいことでしょう。

一読した時は、「オクラの尻尾」を「けなげなり」と言ってるのだと受け止めたのですが、よくよく読んでみると「ここからがオクラの尻尾」だと断定するきっかけとなった「オクラ」の星形の様子こそを「けなげなり」と詠嘆していることに気づきました。そのとたん、別の野菜に置き換わるのではないかという季語への疑念は一気に晴れ、この「けなげ」はまさに「オクラ」の特性であるよと納得させられた次第です。「健気」の意味も、小さなオクラ、どんどん大きくなるオクラ、健康に良いオクラと意味も広がります。

「オクラ=星」の連想、星という言葉を入れた類想の句は多々ありましたが、「星」の二語を使わずして無数の星形の断面を見せてくれるという高度な技に、脱帽した一句であります。

地

七日後は食らうオクラの花愛でる　不知火

一日花の「オクラの花」はあっという間に咲いて、あっという間に落ちて、あっという間に莢を太らせます。豌豆のように花は春で、莢は夏という具合に季節を違えず、莢と花とが同じ時期であるというのは「オクラ」の特色の一つ。それをそのまま一句に成したのは、小さな工夫ですね。「オクラの花」を愛でている句でありながら、「七日後のオクラ」もありありと想像させてくれる、技あり！の作品です。

こんなに大きくとんがるつもりぢゃなかったオクラ　亜桜みかり

まさに大きくなりすぎた「オクラ」そのものような確信犯的字余り。やってくれるぢゃないの！と、愉快が爆発しました。大きくとんがってしまった「オクラ」が身を縮めて謝っているような味わいもまた楽しい一句。

オクラいっせいや不在の家ばかり　たま

一日のうちにぐんぐん大きくなる「オクラ」の特性を表現した「オクラいっせいや」という措辞が巧いですね。後半の「不在の家ばかり」で、各家を回る営業マンや宅配の兄ちゃんを想像しました。どこもかしこも留守ばかりだよという愚痴が、辺りの畑に育つ「オクラ」の旺盛な伸びようと対比された、面白い味わいの作品です。

オクラ果てしなく実る逆縁の家　たかこ

「オクラ」の恐るべき成長ぶりを描いている点は、先ほどの句と全く同じなのですが、最後の「逆縁の家」という措辞にハッとさせられます。親よりも子が先に亡くなってしまった「家」は、「オクラ」を収穫する気力も労働力もなく、深閑とした悲しみに包まれています。「オクラ」の生命力が痛々しく際立つ一句です。

アフリカにオクラと人類の起源　樫の木

今回「オクラ」について調べてみて、「オクラ」が外来語であったことに驚きました！　しかも原産地が「アフリカ」だとは思いもしませんでした。「人類の起源」が「アフリカ」にあるという知識と、「オクラ」は「アフリカ」原産であるという事実。それを語っただけの一句ですが、季語「オクラ」への率直な興味がふつふつと伝わります。

さて諸君オクラを科学してみよう　理酔

これもいいなあ！「オクラ」の五角形の断面、星型の美しさが「科学」という言葉に似合います。「さて諸君」という詠いだし、「オクラを科学してみよう」という呼びかけが、読み手の好奇心をくすぐります。NHKの楽しい科学番組が始まるみたいな味わいの一句～♪

星の尾を掴まえるようオクラ取る　マーペー

「オクラ=星」という類想の句は沢山ありましたが、この句は、切り口が星の形だとは言わず、「オクラ」の形そのものを「星の尾」だと比喩したことでオリジナリティを掴みました。「星の尾を掴まえるよう」に「オクラ取る」時の産毛の感触も、伝わってきました。

粘り強き星のオクラよ誕生日　ミル

「粘り強き星のオクラ」は、まさに「オクラ」の切り口の星型を言ってるわけですが、「粘り強き星のオクラよ」の詠嘆のあとに「誕生日」の二語が取り合わされることによって、一句は確固たるオリジナリティを手に入れます。「誕生日」を単純に祝っているのではなく、「粘り強い」何かの志を持って迎えた「誕生日」。一人の食卓にあるのは「オクラ」。残暑に耐えて、新しい年齢の明日に立ち向かうオトナの「誕生日」ですね。

オクラが好きだったんですか現場主任　青菊

妙にリアルな台詞の如き一句（笑）。ふと「現場主任」の弁当箱を覗き込んだのか、飲み屋に行く度に「オクラ」を注文する「現場主任」なのか、はたまた「オクラ」を最後まで皿に残してるので嫌いなのかと思ってたら好物は最後に食べる主義の「現場主任」だったのか（笑）。

好き嫌いがはっきり二分される「オク

ラ」という野菜だからこその味わいですし、ネバネバと糸を引きながら「オクラ」を食べる「現場主任」が見えてくるようで、大いに笑った一句でありました。

第28回　2013年8月1日週の兼題

桐一葉（きりひとは）

天

桐一葉すと身を起こす夜の猫　理酔

上五「桐一葉」で、大きな葉が初秋の光を浴びながらゆっくり落ちていくさまを連想させ、中七「すと身を起こす」とは何が身を起こすのか？とささやかな疑問のさざ波を起こし、そのまま下五「夜の猫」と畳みかけます。昼間の光景だと思っていたのが、一気に「夜」の光景となり、「すと身を起こ」したのが「猫」だったと分かる、この展開が巧いですね。

静けさに包まれている真夜中、寝そべっていた「猫」が急に「すと身を起こ」します。耳をぴんと立て気配を伺っています。何に驚いたのだろうと、耳をそばだててみると、かすかな音。ああ、あれは庭の「桐」が落ち葉する音だよ、と気づくわけです。

「桐一葉」は夜の真っ暗な静寂の中にあって、その姿は見えません。が、落ちる音でその存在はありありと感知されます。落ちた葉の上に次の葉が落ちる時、「桐」の落葉は思わぬ音を立てます。

身を起こしていた「猫」を宥めると、句中の世界には再び夜の静けさが戻ります。そして、深い夜の中へ落ちていく「桐一葉」の音だけが、いつまでもいつまでも響いていくのです。

地

ゴッホならばこう描きしか桐一葉　大塚めろ

虚子が「桐一葉日当たりながら落ちにけり」と描くのであれば、「ゴッホ」ならばどう描いただろう？という発想が、いかにもこの作家らしい個性です。

「ゴッホならばどう描きしか」だと思いを述べただけに終わりますが、「ゴッホならばこう描きしか」としたことで、自分自身が「桐一葉」を描いている、あるいはゴッホのような筆致で「桐一葉」を描いた絵を眺めている、という状況が見えてきます。「どう」と「こう」のたった一音の違いながら、このあたりの選択がベテランの巧さでありますなあ。

桐一葉くらいで何度でも故郷　ミル

この句にも心惹かれました。「桐一葉」が落ちるのを見ると「故郷」が懐かしくなって「何度でも」帰りたくなるなんて、そんな甘っちょろいことよく言うよッ！と吐き捨てているのでしょうか。自分への自嘲か、他人への罵りか、破調で畳みかける調べが内容に適っています。

勿論、他の落葉でもいいのではないかという吟味は必要ですが、「桐一葉」の存在感あってこそ「くらいで」「何度でも」という措辞が生きてくると判断しました。

桐一葉にはとり首を傾げをる　もね

どんな落葉を見ても「にはとり」は「首」を傾げるかもしれないのですが、この句も「桐一葉」の大きさや独特の落ち方が、「にはとり首を傾げをる」という光景を際立てます。いや、むしろ、「にはとり首を傾げをる」という鶏のよくやる仕草に、意味を感じ取らせるのが「桐一葉」の存在だと言うべきかもしれません。この句も「天」の句と同様に「桐一葉日当たりながら落ちにけり」を大いなる借景と踏まえての作品だと考えられますね。

一葉落つちいさきものの墓の上　逸子

「ちいさきもの」とは小鳥でしょうか、金魚でしょうか。大きな桐の「一葉」は、ほんの一枚で「ちいさきものの墓」を隠してしまいそうです。小さな悲しみの癒えない心に、「一葉落つ」音は悲しみのさざ波となって響いているのかもしれません。

桐一葉大仏坐像のやや猫背　めいおう星

寺の境内にある大きな「桐」でしょうか。「大仏坐像」が「やや猫背」であることに気づく作者は、大仏殿の中にいて、境内の「桐一葉」を眺めていると考えればいいでしょう。

大きな「桐一葉」がゆっくりと落ちていくさまと「大仏坐像」の取り合わせが、悠々たる一句となりました。

鉄柵は空へやじるし桐一葉　初蒸気

「鉄柵」の先の尖っている部分を「やじるし」と見て取れば、こんな一句も生まれます。張り巡らした「鉄柵」は「空へ」向かう無数の「やじるし」であり、その空からは大いなる「桐一葉」が落ちてくる、という光景。「鉄柵」に当たる「桐一葉」の枯れた音も聞こえてくるような一句です。

われのみの会議室より桐一葉　海音

この手の句は、どんな落葉でもどんな季語の光景でも取り合わせることが可能なのですが、作者が「桐一葉」を下五に据えた意味を解読しようと試みるのが、読み手の正しい姿勢です。

「われのみの会議室」とは、さっきまで熱心な会議が繰り広げられていた「会議室」に「われ」一人が残っているというのでしょう。季語「桐一葉」は窓の外の光景でもあり、そこに佇む人物の心理描写でもあると読めます。

私は、一代で会社を築き上げた社長が後進に道を譲る決心を固めた場面を想像しました。季語「桐一葉」は堂々たる成果の果ての、一抹の淋しさを思わせます。皆さんは、どんな「会議」を想像し、どんな人物を思いましたか？

桐一葉資源回収車の上へ　みちる

「桐一葉」が格調高く、象徴性に富んだ季語だから、その逆手をとってみれば!?との発想もあっていいわけです。大虚子の詠んだあの「桐」の大きな葉が、「資源回収車」の上に落ちてくるという俳味は十二分に楽しめます。可笑しみもまた、一つの詩情ですね。

桐一葉ひとり茅ヶ崎タンタン麺　ちびつぶぶどう

兼題「桐一葉」でここまでやるか！と爆笑の一句。大虚子の「桐一葉」に対抗する手立てとして、確かにナンセンスもあり！です。

「桐一葉」に「ひとり」を重ねる情趣は想定内だし、「茅ヶ崎」というサザンオールスターズが匂う地名を取り合わせてくるのも許容できるけど、下五でいきなり「タンタン麺」に飛ぶ？ってのは、凄すぎる（爆笑）。わたしゃ、とてもじゃないけどこんな句は作れない、いや作らないけど（笑）、ここまで言い放てるのも一種の才能だな、ははは！

第29回　2013年8月8日週の兼題

鯊釣（はぜつり）

天

鯊釣をチリの女に習いけり　蘭丸

誰にでも釣れるのが「鯊釣」ですから、父に習う、兄に習う等の発想の句は山のように届きました。が、まさか「チリの女」が登場するとは思いもしませんでしたよ。日本各地の埠頭辺りを歩けば「鯊釣」の人なんて幾らでもいるだろうに、なぜ「チリの女」？と思った段階で、読者はすでに一句の世界に引きずり込まれているのでしょうね（笑）。

「チリの女」は顔見知りでしょうか、なんでこんなとこで外国人の女が釣りしてんだ？と気になり声をかけただけかもしれませんね。句中の人物は、別に「鯊釣」をしたかったわけではないのでしょう。彼女にささやかな興味を抱いて話しかけてみると、片言の日本語はしゃべれるし、器用に釣ってるし、そのうち「アンタもやる？」なんて竿を持たされたのではないでしょうか。

地球の反対側から出稼ぎにやってきて、友だちもおらず……目の前の埠頭で「鯊釣」をする人たちを見て、そういえば小さい時に親に教えてもらって釣りしたなあ～なんて懐かしくなって……

そんな経緯でこの「チリの女」は「鯊釣」を楽しむようになったのかしら……と、想像は次第に膨らんでいきます。

釣り上げる「鯊」のユーモラスなようでいて、そこはかとない悲哀もある貌が、「チリの女」の人生の陰影をうかがわせます。

地

四男まで順に並べて鯊釣らす　初蒸気

休日のお父さん、「四男」を引き連れての「鯊釣」、賑やかでしょうねえ～（笑）。おっとりとした長男、負けず嫌いの次男、マイペースの三男、まだ小さすぎて、兄ちゃんたちの真似をしたいだけの四男。それぞれの性格が見えてくるような釣り方をしてるんだろうなあと、微笑ましく想像した一句です。

鯊釣の棒竿貸して並ばせる　陽鳥

これも、いかにも「鯊釣」らしいお手軽さです。鯊ならば誰にでも釣れるからと、「棒竿」を何本か余計に用意しているのでしょうね。興味半分に声をかけてきた人に「竿ありますよ、やってみます？」と勧めるのでしょうな。「貸して並ばせる」という描写にさりげない臨場感があります。

鯊釣のバケツ係を卒業す　すな恵

先ほどの「四男まで」の句の四男坊は、まさにこんな感じじゃないかな～♪いくらカンタンな「鯊釣」とはいえ、まだまだ無理だな……なんて去年までは言われてたけど、今年は兄ちゃんたちに混じって、初めて竿を持たせてもらえます。「卒業す」の一語が微笑ましい一句です。

東京湾てふ金盥鯊を釣る　ハラミータ

俺にとっちゃあ、「東京湾」なんてのは「金盥」みたいなもんよ！なんでこんなによく釣れるのかだって？「金盥」の中に活かしてあるんだもん、釣れるのは当然だよ！なんて軽口をたたきながら「鯊」釣ってんでしょうねえ（笑）。「東京湾」という固有名詞が、江戸っ子らしい啖呵をも想像させて、愉快です。

鯊釣の河口聳ゆるラブホテル　もね

「鯊釣」は子どもの頃からこの「河口」だったのでしょうね。見慣れた光景が年々少しずつ姿を変えてきた昨今。なんと今年は、聳えるかのように賑々しい「ラブホテル」まで建っているよ、という溜息。「聳ゆる」の動詞が「ラブホテル」の描写でありつつ、作者の心情の表現にもなっているのだと読ませて頂きました。

歩いて行ける海がある鯊を釣る　ポメロ親父

「なぜ、山に登るのか？そこに山があるからだ」と語った登山家もいましたが、「なぜ、毎日鯊釣を釣るのかだって？そりゃ、目の前に歩いていける海があるからだよ」と、鯊釣り名人は語るのでしょうね（笑）。

「～ある～ある」と畳みかける口調が、何か重要な真理を語ってでもいるようで、ほのかな可笑しみの一句です。

満ち潮のぬるき水飲む鯊を釣る　ふーみん

釣り上げた「鯊」を針から外す時に、「鯊」の口からこぼれた水を「満ち潮のぬるき水」と表現した感覚がいいなあ！次々に釣り上がる「鯊」は、どれもその腹に「満ち潮のぬるき水」を呑み込んでいるに違いない、という把握に強いリアリティが生まれます。

鯊釣や女房任せの理髪店　天宮風牙

「髪結いの亭主」なんて言葉がありますが、「理髪店」の亭主も店は「女房」に任せて、気ままに「鯊釣」してんでしょうね。客が混んできて忙しくなったら、常連の誰かが「おーい！」なんて知らせに来てくれるような「理髪店」（笑）。その辺でちょいと気楽にやれる「鯊釣」ならではの味わいです。

喪の明けて外は鯊釣日和かな　大塚めろ

「喪の明けて」からの語りが地味に巧い一句。中七「外は」と視線を切り替えて「鯊釣日和かな」と詠嘆したとたんに、周囲の光景がひかりと色彩をもって立ち上がってきます。

「鯊釣日和」という言葉は、故人の思い出につながる「鯊釣」かもしれませんし、生き残った自分の心を切り替えるきっかけとなり得る「鯊釣」なのかもしれません。「かな」の詠嘆が、ほろほろと心に響きます。

第30回　2013年8月15日週の兼題

飛蝗（ばった）

天

飛蝗ばたばたバター色の夕陽　樫の木

今週の兼題のように、ややもすれば他の虫にも置き換えられる季語というのは、なかなかやっかいであります。例えば、「飛蝗（ばった）」を「蝗（いなご）」に変えても成立するか？を一句一句吟味していくと、なかなかキビシイものがあります。

そんな苦悩の中で、「バッタ」という音を活かした句にしてみよう！というのも一つのアイデアでありましたね。作者樫の木さんも意識されたようですが、一句一読、谷川俊太郎著『ことばあそびうた』を思いました。言葉が本来もっているリズムを楽しむことは、韻文である詩の大いなる特質でもあります。

上五「飛蝗ばたばた」というオノマトペから、風を揺するように飛ぶトノサマバッタの羽音を想像しました。上五の音をそのまま活かし「飛蝗ばたばたバター色」と意外な言葉が出現する中七の楽しい驚き。さらに「バター色」が「夕陽」の形容だと分かった瞬間に広がるまぶしい黄金色の光景。このあたりのイメージの重ね方が、言葉遊びを詩へと変換させるコツでありましょう。秋の夕焼け空に向かって「ばたばた」と飛ぶ「飛蝗」の小さなシルエットが、懐かしい光景のように広がっていきます。

地

ばったばったくさのたましいだいてとぶ　こま

ひと言に「飛蝗」と言っても、殿様バッタと精霊バッタとでは印象がずいぶん違います。単に「ばった」と言いつつ、その種類が分かるような作り方をして欲しいなと思っていたところ、こんな句を発見しました。

上五で「ばったばった」と呼びかけた後の、「くさのたましい」という言葉そのものが詩ですね。私は、さみどりの精霊バッタを思いました。全て平仮名の表記は、強く抱けば壊れそうな「くさのたましい」のイメージを優しくやわらかに表現しています。

タクシーの二台待つ駅飛蝗群　初蒸気

「タクシーの二台待つ駅」ですから、田舎町の駅なのでしょうね。その二台が出てしまうと、後はそれが引き返してくるまで「タクシー」は利用できない、そんな小さな駅。上五中七の措写によって、誰もがほとんど同じ光景を共有できる点が一句の強みです。

「駅」の周りには、たくさんの「飛蝗」が群れとなってひそんでいて、誰かが近づくといきなり飛びはじめる。そんな光景もありありと見えてくる作品でした。

飛蝗来るレントゲン車のドアのそば　瀬戸薫

「レントゲン車」の前で順番を待っているところでしょうか。手持ち無沙汰に眺めていると「飛蝗」が、いきなりハタハタと飛んできて「レントゲン車のドアのそば」に着地した、という小さな事件。

「来る」という動詞が効果的。作者の視線も作者の状況（レントゲン車との関わり）も見えてくる点に工夫があります。

外野手の少ない出番飛蝗跳ぶ　不知火

草野球の「外野手」ですね。外野までボールが飛んでくることは稀で、だからといって九人いないと野球にならないしってとこですね（笑）。暇な「外野手」の周りは「飛蝗」の天国。飛び回る「飛

蝗」を眺めつつ、バッターボックスの状況を気にもしてるのだけど、一向にボールが飛んでくる気配はありません。

頭から飛蝗まるかじりに子猿
ポメロ親父

こちらはまたスゴイ一句！こういうのは、想像ではできないな！「飛蝗」を遊び相手にしていた「子猿」が、ついに「飛蝗」を捕まえ、それをガリガリ囓ってしまったところを目撃しての一句でしょう。「子猿」の大きさと「飛蝗」の大きさを考え、「頭から～まるかじり」の措辞から想像すると、これは絶対に厳様バッタだと思います～（笑）。ちょっと噛み応えがあるというか、そんな「子猿」の表情も見えて、驚きつつ笑えた一句でした。

きちきちや津波の跡の高さまで
るびい

朝日新聞社刊『鳥獣虫魚歳時記』には、「精霊ばった（きちきちばった　きちきち）」と記されています。私は、これまで漠然と「飛蝗」の傍題として「きちきち」という呼び名があると思い込んでいたのですが、「精霊ばった」を指す、との認識を新たにした次第です。

「きちきちや」の詠嘆ののちに出現する「津波の跡の高さまで」の措辞にドキッとします。あの大津波はここまで押し寄せたのだよ、というその「跡」とは、草木のなぎ倒された崖面にくっきりと残っているのでしょう。「きちきち」が秋のひかりを刻むように飛ぶ時、生き残った命の一つとして作者もともに空を見上げているのでしょう。

はたはたははぐれるために身を飛ばす
大塚めろ

「はたはた」という呼び名は、【飛ぶときの羽音に由来するともいわれる】と、朝日新聞社刊『鳥獣虫魚歳時記』には記してあります。

「はたはた」「はぐれる」とつながっていくメロディーに寂寥感があり、「はぐれるために身を飛ばす」という内容に似合っていますね。「はたはた」に託す思いは作者自身の心情に重なり、「はたはた」の飛んだ先の秋野の光景は、印象的な残像として読者の心に刻まれます。

はたはた跳ぶ覚めて忘れる夢くらい
ミル

こちらの「はたはた」は心象的な映像。先ほどの大塚めろさんの句は「飛ばす」という動詞を使っていましたが、こちらは「跳ぶ」ですね。「覚めて忘れる夢くらい」に跳んだというのですから、小さなバッタが、ひそりと空気をゆすったような跳び方だったのでしょう。「覚めて忘れる夢」くらいに「跳ぶ」という比喩の力によって、「はたはた」という季語の音が美しく感受される一句であります。

壁にバッタ張り付いて憂歌団な午後
冬井いつき

「憂歌団」が何者か知らない人にとって、さてこの句はどうだろう？という気持ちもありはしますが、このバンド独特の曲想を思う時、「壁」に張り付いたままの「バッタ」は、「憂歌団な午後」という強引な比喩の中で、跳ばない「バッタ」としての存在を発揮し始めます。

一句全体のメロディーも、五七五を拒む自由律。この選択もまた、いかにも「憂歌団な」韻律であります。

フロントガラスのバッタ時速65キロで飛んだ
猫ふぐ

これぞ「バッタ」でなくともいいでしょ!?と言われりゃ、そうなんですが、「バッタ」という生き物がバタバタと風に吹かれながら、風圧に抵抗しながら、「フロントガラス」にへばりついてる様は妙にリアルです。「時速65キロで飛んだ」という観察記録のような表現が飄々たる味わい。その「飛んだ」瞬間を、作者とともに、あッ！と体験したかのような気持ちにさせられた一句でした。

第31回　2013年8月22日週の兼題

椎茸（しいたけ）

天

椎茸をしづかにあぶつてゐる門出
稲穂

「門出」を祝って饗するものとして「椎茸」はずいぶん地味な食材だなあと思ったのが、第一印象でした。が、読んでいくうちに「門出」という言葉がこの句にとって非常に重要な要素であることに気づき、次第に惹かれていきました。

辞書的な意味を押さえておくと、「門出」とは【旅や出陣などのため自分の家を出発すること】であり、比喩的に【新しい生活や仕事を始めること】も意味します。

「椎茸をしづかにあぶつてゐる」のは自分自身でしょうか、あるいは誰かの「門出」を祝って炙っているのでしょうか。私は後者の読みを取りました。父が子の、学問の師が弟子の、長年の好敵手の…さまざまな「門出」が思い浮かびますが、いずれも決して派手な「門出」ではなく、苦難の道、茨の道を選び取った「門出」でありましょう。そんな想像を読み手に伝えているのが、「しづかに」という形容動詞であり、「鰯」でも「秋刀魚」でも「餅」でもない…「椎茸」を炙るという行為。「椎茸」を炙り、一献を傾けることを餞として祝う「門出」は、まさに大人の決意を尊重し、声なき声援を送る座でありましょう。

地味な食物ではあるけれど、滋味に富んだ「椎茸」ならではの味わいが凝縮された、心に滲みる「門出」の一句でありました。

地

あんなに立派な椎茸干している
猫ふぐ

通り過がりに、ちょいと目にした光景なのでしょう。「あんな立派な椎茸」なんだから、網で焼いてちょいと塩つけて食べるとか、柚子をたらして醤油で一杯やるとか、真っ当な食べ方ってもんがあるだろうに！と勝手に憤っているわけです（笑）。

「椎茸」干してる側からすれば大きなお世話ですが、思わず作者に共感してしまうところが季語「椎茸」ならではの可笑しみです。

椎茸干すや火曜は村に医者の来る
ふづき

「椎茸干すや」を上五で字余りに読んで、「火曜は村に医者の来る」で七五の声調を取り戻します。

一週間に一度「火曜日」にだけ、村の診療所にお医者さんが来てくれます。朝の野良仕事を済ませて、村のお年寄りたちは診療所に集うのでしょう。今日は火曜日ぞ、ああ、この「椎茸」干してから行くワイ、なんてやり取りもあるのかもしれません。

勿論、上五は「鰯干す」「柿干す」でもいいのですが、高齢者ばかりの村の僅かな現金収入の道としての「椎茸干す」が、佳い味をだしています。

雨音が肥し椎茸太りゆく
鞠月

「椎茸」の榾を並べた山は、今日一日雨に包まれています。「椎茸」を育てるためには、湿りも大事な栄養。朝から続くこの「雨音」が「肥し」なんだよ、という措辞は、「椎茸」を育てる人間にとって率直な呟きでありましょう。「椎茸太りゆく」に静かな喜びがひたひたと滲む一句であります。

椎茸に金剛力の夕日かな
甘えび

まずは辞書的意味を押さえましょう。【金剛力】とは【金剛力士のような大力。強勇な力】を意味します。

この「椎茸」は台所に置かれた一個ではなく、榾木に生えている「椎茸」であり、やがては太陽に干される椎茸でもある、と読みました。「椎茸」を育てる榾木が並ぶ暗い山影に、遠い空の「夕日」が差し及んでくる時間。見上げれば、遙かな「夕日」は「金剛力」のごとく真っ赤な力を放っています。やがて収穫され、干される「椎茸」は、「金剛力」の太陽を吸収して滋味を凝縮します。「椎茸」「金剛力」「夕日」という言葉のバランスが、一句に詩を産み出しました。

椎茸焼く月色のバターたつぷりに
初蒸気

無条件に美味しそうだったので、ついつい「地」に推してしまいました（笑）。

バターの表現として「月色」というのも美しいですね。こんな一句を読むと、今夜はワインだな♪なんて思ってしまうのが、酒飲みの勝手な喜び。「たっぷりに」という措辞に「椎茸」と「バター」の香りが広がる一句です。

七輪の椎茸じゆわりじゆわり泣く
めいおう星

こっちは和風ですな。「七輪」に炭を熾して、大きな「椎茸」を並べて待てば、「椎茸」から汁が滲んできます。その感触たるや、まさに「じゆわりじゆわり」というオノマトペそのまま。「泣く」という擬人化の是非については意見が分かれるところでしょうが、ストレートな俳諧味だと受け止めました。こちらは、日本酒で一杯♪というところですかな。

さう悩むなよしひたけが生えちまふ
とおと

「悩む」という行為は椎茸滑に「しひたけ」が生えてくる様子に似ているという比喩に、ワタクシの脳は否応なく反応します。ジメジメと湿った感じも、果てしなく生えてくる感じも、まさに「悩む」そのもの。「さう悩むな」という問いかけ、「生えちまふ」という口調もまた、句中の人物二人をありありと想像させてくれる仕掛けとなっています。

山賊のやうに椎茸むしりけり
神戸鳥取

初めて「椎茸」狩吟行に行った時のことを思い出しました。取りたいだけとっていいよと言われて、なんか興奮してしまって（笑）、ムシムシむしり取りました。あの時の手の感触や、次の椎茸次の椎茸へ目が動いていく感じが「山賊のやうに」という比喩に合致！前半の比喩に対して、「けり」という詠嘆のバランスもとれています。

椎茸を恋の奴隷のように食う
ゆきる

こっちの比喩にはさらに笑いました。たかが「椎茸」食べてるだけなのに、「恋の奴隷のように食う」という熱情に爆笑！単なる「椎茸」好きと読んでもいいし、誰かに対する恋情を持て余し、うぉぉおお！と叫んで「椎茸」食ってる男の図を想像すると痛ましくも可愛いです（笑）。

少なくとも椎茸よりは干されてる
のひろ

ははは！マジ爆笑しました！「少なくとも」という冷静な分析がこの笑いの肝でしょうね。「椎茸よりは」という比較もまた淡々たる皮肉。人生において「干されてる」と感知した時には、この句を呟いて乗り越えよう…という気持ちになりました。愛と勇気を与えてくれる「椎茸」だね～（笑）。

第32回　2013年8月29日週の兼題

秋の雷（あきらい）

天

秋の雷いざや男児を産みに行かん
小野更紗

「秋の雷」から始まるこの一句、「いざや男児を産みに行かん」という迫力ある措辞に圧倒されつつも、この心意気に快哉を叫びたくなります。イマドキのことですから、性別はすでに分かっているのでしょうね。ワタクシの腹の中にいる「男児」を、「秋の雷」の力を借りて、立派に産んでみせましょう！と高らかに叫ぶ一句のなんと力強い母性！

過剰な読みかもしれませんが、季語「秋の雷」の向こうに「稲妻」という季語が二重写しにみえて、「稲は雷光とつるんで実を孕む」という伝承が、「いざや男児を産みに行かん」という措辞にさらなる力を吹き込んでいるかのようです。ならば季語を「稲妻や」にすればいいか？というと、そうではありません。劇的すぎて鼻についてしまいます。季語とのこの絶妙なバランス感覚が、一句の肝といってよいでしょう。

実は、もう一つの読みも頭の中を巡っております。それは、一昔前の家族制度の価値観。「男児」を産むことを強要する声なき声。腹の中の子が男だか女だか分からないが「いざや男児を産みに行かん」と叫び、祈るしかなかった時代。そんな物語も二重写しに浮かんできます。

季語「秋の雷」を「轟きも凄く、匂いも強い。夏の雷みたいにからっとしていない」と捉えると、まさに「産み」の現場の生臭さ。「産む」という戦いに挑む覚悟に「秋の雷」が轟きます。

地

龍を産む空の苦しみ秋の雷
たかこ

同じ「産む」句ですが、こちらは比喩。「秋の雷」の激しい轟き、鋭い匂いと生臭い感触を内包しているかのような雷光は、「空」が「龍」を産もうとする「苦しみ」そのものなのだよ、という発想に惹かれます。雷光の目に見える形状を「龍」に喩える句はあるだろうと思いますが、「龍を産む空の苦しみ」という虚の比喩から「秋の雷」の出現への語りがなめらか。語順の巧さを誉めたい一句です。

秋の雷なめとこ山に生まれるよ
天宮風牙

「なめとこ山の熊」でしょうか。物語の登場人物・熊撃ちの小十郎と熊たちとの心の交信を思う時、「秋の雷なめとこ山に生まれるよ」は、登場する母子熊の会話のようでもあり、ホロリと泣かせます。物語を下敷きとして構築した一句に、作者のセンスもうかがえます。

千枚の棚田震えよ秋の雷
カリメロ

こういう光景を描いた句もあるだろうと思いますが、「千枚の棚田震えよ」という命令形が詩語として息づきます。「千枚の棚田」を渡り行くように轟く「秋の雷」。その雷鳴の激しさに「震えよ」といい、この雷光の美しさに「震えよ」と語る作者の詩性。美しい一句だと思います。

赤松の脂吹く匂ひ秋の雷
ポメロ親父

「秋の雷」のクセの強さを思えば「赤松の脂吹く匂ひ」との取り合わせにも惹かれます。「赤松の脂」と色合いを提示するだけでは物足りませんが、「脂吹く匂ひ」と嗅覚を描写することで、「秋の雷」が読者の五感に飛び込んでくるような効果が生まれます。渋い素材ですが、ベテランの味が光る一句です。

秋の雷ストレッチャーの輪の歪む
緑の手

映画のワンシーンのような映像ですね。「ストレッチャー」に乗っているのは、自分なのか他人なのか。その境目が茫漠たる記憶の中で混乱しているのではないか…と思わせるのが「歪む」という一語の効果でしょうか。「秋の雷」の激しさが、「ストレッチャーの輪」の鈍い光となって強く印象付けられます。

秋の雷ながしガーゼに胸の傷
すな恵

こちらは激しい「秋の雷」がやがて去っていくまでのささやかな時間を描きました。「秋の雷ながし」が聴覚をイメージさせる表現であるのに対し、後半「ガーゼに胸の傷」は痛々しい肉体感覚を引き出します。「秋の雷」の振動が「ガーゼ」に伝わり、さらに「傷」口に及んでいくかのような生臭い痛みを感じさせます。

秋の雷水に交じらぬ強き酒
可不可

「秋の雷」そのものを何かに喩えるとすれば、「水に交じらぬ強き酒」かもしれないなあと、感覚的に納得させられた一句。濃いウヰスキーを連想したのは「秋の雷」という季語が内包している、かすかな色彩感覚なのかもしれません。喉を焼く「強き酒」の香りもまた「秋の雷」に似合います。

秋の雷ミック・ジャガーに皺深し
くろやぎ

下五「皺深し」まさに「ミック・ジャガー」だよな、という説得力。調べてみると、御年70歳になられるようですが、この「皺」は年齢的というよりは、彼の顔つきの特徴と読むほうが妥当か、と。このように取り合わせられると、「秋の雷」という季語は彼の生きざまや音楽性を言い当てているのかも、と納得させ

られた次第です。

秋の雷自動ピアノの止まざるよ　あい

「自動ピアノ」というのは不思議なシロモノだと見入ってしまうのですが、なぜ見入ってしまうのかと自問自答してみると、ピアノが勝手に動き続けるという理不尽のせいかもしれない…と。呪いの靴を履いたばっかりに踊り続けねばならなくなった女の子の物語みたいな感覚…といえばよいか。止まることを許されない「自動ピアノ」の音に重なる「秋の雷」は、哀しみの曲のように轟きます。

秋雷やまんぼうの湧く北の海　魚水

実際こういうことがあるのかどうか全く知らないのですが、光景を想像した時の迫力に気圧されてしまいました。虚の光景としても凄いが、実の光景としてあるのならばさらに鳥肌ものか…と。「まんぼう」という不思議なカタチをした生き物を昂ぶらせるように轟く「秋の雷」の迫力。「北の海」の秋はここから一気に進んでいきます。

第33回　2013年9月5日週の兼題

秋分（しゅうぶん）

天

秋分や夜へ祈りを捧げる木　根子屋

「秋分」は時候の季語で、「秋分の日」は人事。「秋分」は二十四節気で、「秋分の日」は国民の休日ですから、こう区別する判断には納得するんだけど、さてこれを俳句で表現するとなると、こりゃ難物だなあと思わず唸ってしまいました。さらに、同じ時候の季語「春分」との違いとして、「夜」が長くなっていくという特徴をどう表現するか、ここも大きなポイントになってきますね。そんな高いハードルを見事に越えた句として注目したのが、この一句です。

「秋分や」と詠嘆した切れの後に、「夜へ祈りを捧げる～」とくれば誰かが寝る前の祈りを捧げているのだなと一瞬思うのですが、下五最後の一字「木」によって、一句の世界は一本の美しい「木」の映像へと変容します。

ここで、注意深く読みたいのは「夜へ」の「～へ」という助詞です。「夜に」だと単に時間を述べただけになりますが、「へ」は方向を示す助詞ですから「夜」の方向へむかって、あるいは「夜」そのものへ祈りを捧げる、という意味になります。

「秋分」という季節の折り目を知っている「木」は、世界をゆっくりと支配していく夜へ「祈りを捧げ」ます。「夜」という名の神に向かって、世界が夜という時間に塗りつぶされてしまわないように、ささやかな太陽の恵みを約束してもらえるように、敬虔な祈りを捧げ始める、それが「秋分」という時候なのだと一句は物語っているのです。「秋分」という季語に対するこの詩的把握のなんと美しいことでしょう。

「植物は夜の長さを計って季節を知る」という植物学者の説もあるそうですから、科学を核として生まれた発想だともいえますが、私の心に映るのは、世界の果ての美しい崖の上にある一本の「木」、時間を司る「夜」の神へひたすら「祈り」を捧げる「木」、そんな神話のような世界であります。

地

洛陽に無為の秋分過ごしけり　初蒸気

「洛陽」は、【中国の都市名、京都の異称、平安京の左京の異称】と、三つの意味があります。一読した時は、京都だと読み、旅の時間を「無為」と表現したと解したのですが、何度か読んでいるうちに、時代を遡った平安京、空間を飛び越えての中国など、次第にイメージが広がっていき、次第に惹かれました。

「秋分」という季節の折り返し地点に立てば、こんな時空間移動によって「無為」な時間が手に入るのかもしれないと、そんな気持ちにさせられた一句です。

また天を地に秋分の砂時計　ほうじ茶

「また天を地に」で神話のような世界へ行くのかと思いきや、「砂時計」を引っ繰り返すという動作にもってきた一句。こんな手もあったかというコロンブスの卵ですね。「秋分」という季語が持つ「時間」「平分」「折り返し」等のイメージが、「砂時計」というモノでストレートに表現されました。

秋分の入り日巨石をまつぷたつ　野風

「秋分」という夜と昼が同じ長さになる日の「入り日」には、何やら特別な力があるようにも思えます。「巨石をまつぷたつ」は、光線の当たり具合でそのように見えたのだと推測しますが、「秋分の入り日」にある特殊な呪詛によって「まつぷたつ」になったかのような読後感があり、そこが一句の面白さだと感じました。

秋分の日を留めたる鎌の先　みなと

「秋分の日」とありますが、これは人事の「秋分の日」ではなく、「秋分」の日差しという意味ですね。先ほどの「巨石」に当たる「秋分の入り日」を、違う角度で取らえたのがこの一句でしょう。

折しも、稲刈り等の農作業も忙しくなる頃。「鎌」の出番も増えてきます。たまたま「鎌の先」に反射した日差しを、「秋分の日を留めたる」と表現することで、次第に日暮れが早くなる「秋分」という時候を描いています。「留めたる」という動詞の選択が、そのような読みを投げかけていますね。

秋分に鳴らす形見の弓弦かな　樫の木

お月さまの満ち欠けは「上弦の月」「下弦の月」というふうに「弓弦」に喩えられます。「秋分」という時候の気分を、「弓弦」との取り合わせで表現しようという工夫が、一句の眼目。さらに「形見の弓弦」であることが短調のイメージを醸しだし、「鳴らす」という動詞が美しい詩語として一句の世界に響き渡ります。

秋分のぼうずり真っ直ぐ立たぬわけ　冬井いつき

「秋分」＝左右が釣り合っている＝真っ直ぐ立つ、という連想でしょうか。それにしてもいきなり「ぼうずり」が出てくる取り合わせの愉快！　好きだなあ、こういう発想。

普通に考えれば、「ぼうずり」のブラシ部分の片側がすり減っているのだろうよ、で終わりそうな些事ですが、それをわざわざ「真っ直ぐ立たぬわけ」と言ってみることで、「秋分」という時候の持つ不可思議な力をほのめかすのです。夜と昼が同じになるなんて、きっと何か特別な理由があるにちがいないよ、だからほら、この「ぼうずり」も「真っ直ぐ」立たないだろ～って、強引な詩の作り方が、やっぱり愉快な一句！

秋分や兎の耳に口づけて　ちびつぶぶどう

選んだものの実は困っています。なぜ、この句に惹かれるのだろうとさっきから自問自答しているのですが、「兎の耳に口づけて」という行為と、「秋分」という季語の出会いにハッと心を衝かれたとしか言えないのです。

もし、理由というものがあるとすれば、（本当かどうかは知りませんが）淋しいと死んでしまうという「兎」の「耳」に口づけする作者の強い淋しさが、ここから夜が長くなっていく「秋分」という季語の気分に、微かに微かに触れている……ということなのかな、とも思います。

上五の季語はまだまだ動くだろうと思い、あれこれ違う季語を当てはめてみるのですが、「秋分や」よりも色褪せてみえるのはなぜだろう。それはやはり、この季語が主役として機能しているということではないのか。今しばらく、この句と対話していたいような、不思議な作品であります。

第34回　2013年9月12日週の兼題

秋高し（あきたかし）

天

荒馬を諌める神事秋高し　すな恵

今週の兼題「秋高し」と傍題の「天

高し」、両者の違いは、その言葉どおり、方や「天」という場所が高いと指摘し、方や「秋」という季節そのものが高く、その空も「高し」と詠嘆している点にある、と考えます。仮に「荒馬を諌める神事天高し」と比較してみると「秋高し」は空の高さだけでなく、季節への賛美も加わってくるのだと思います。

愛媛県菊間町の御供馬という神事があります。室町時代から続く家内安全、五穀豊穣祈願の神事です。「乗子（のりこ）」と呼ばれる子どもたちが、色鮮やかな装飾具をつけた馬に跨がり、鳥居から境内まで約300メートル（最後は急勾配の坂）を一気に駆け上がります。

この一句を読んだとたん、御供馬の神事が鮮やかに蘇ってきました。作者のすな恵さんは関東在住の方ですから、別の神事を観て作られたのでしょうが、全国津々浦々で催される様々な「荒馬を諌める神事」は、まさにこのような「秋高し」という大きな時空の中で行われるのだなあ～と、爽快な気分になりました。

ただの馬ではなく「荒馬」、乗る駆けるではなく「諌める」という言葉の選択がこの「神事」を活写。荒ぶる馬を見事に御する時、人々の豊穣への願いが「秋」を司る神の心へ届くのでありましょう。

地

筆洗に空のかけらや秋高し　花屋

「秋高し」という季語の世界で、絵を描く場面を想像した句は他にもありましたが、「筆洗」の水の中に「空のかけら」を見つけるという発想の句はありませんでした。

秋空を描くための絵の具、その筆を洗う水、水に滲む絵の具、それらの断片的な映像が「筆洗に空のかけらや」という詩語によって、読み手の心にありありと像を結びます。

カルデラに光返して秋高し　マーペー

「カルデラ」とは【火山の中心にできたほぼ円形の大きな凹地】です。ここに水がたまるとカルデラ湖になるわけですね。火山の中心を覗き込むと、「秋」の日差しがきらきらと弾かれています。

下五が「天高し」だと、火口に対して「天」という平面が頭上にあるイメージになりますが、「秋高し」だと巨大な「秋」という半球の中にすっぽりと火山が入っているイメージ。火口の「光」が「秋高し」という豊かな詠嘆となって広がる一句です。

牛繋ぐ長きロープや秋高し　木よし

「牛」が自由に動いて草が食べられるように「長きロープ」で繋いであるという一句。「や」という切字は、すぐ前の言葉を強調したり詠嘆したりする働きをもっていますから、この句の場合は「ロープ」というモノに視点がいってるわけですね。

「牛」がゆっくりと太っていく「秋」という季節の豊穣が「秋高し」という空の美しさへと繋がります。

秋高し漢詩の如き暮らしなり　蘭丸

「漢詩の如き暮らし」ってどんな暮らしだろう。荒れた国を思い国を愁う暮らしだろうか、学問にいそしむ暮らしだろうか、仙人みたいな暮らしだろうか、詩を書いて絵を描いて酒飲んでるような暮らしかもしれないぞ、と僅かに知っている漢詩があれこれ浮かんできましたが、季語「秋高し」によって、清貧にして充実した暮らしぶりが想像されます。

仮に上五を「天高し」とすると「漢詩の如き暮らしなり」のイメージは少し平たい感じになるというか、今この空を見上げているだけの感じになりますが、「秋高し」だと秋空の深さ＋豊かな季節のイメージが重なってくるのではないかと考えます。この句の場合も季語「秋高し」が実に佳い効果をもたらしていますね。

六尺を超す石棺や秋高し　魚水

古代人を葬る「石棺」ですが、「六尺を超す」ほどの大きさであることに作者のささやかな驚きがあります。描かれているのは一つの「石棺」ですが、その柩を守るために建造された古墳がそこにあり、古墳をさらに覆う半球の空が広がります。その空を豊かに表現するためには「天高し」ではなく、「秋高し」という季語の力が必要なのだなと、納得させられた一句です。

豊胸の弁財天や秋高し　みなと

この豊かさもいいですね。「弁財天」は、琵琶を弾く天女の姿で描かれる七福神の紅一点。たまたま目にした「弁財天」の「胸」がなんともグラマラスだという愉快が「豊胸の弁財天や」という措辞に弾けます。季語「秋高し」が持つ豊穣のイメージは、福徳・諸芸能上達・財福の神である「弁財天」にも通じます。「豊胸」の女神ともなれば、その感は尚更でありましょう。

秋高しカヌーの渦にへさきあぐ　やにほ

「秋高し」という空の光景から、いきなり「カヌーの渦に」への切り替えが鮮やか。「カヌーの渦に」の中七によって一気に急流が広がり、「へさきあぐ」で制御しがたいカヌーの動きが描写されます。そこに生まれる波飛沫の白が、「秋高し」の青空に映えます。

秋高しカンバス上で乾く黒　もちずきん

「秋高し」の句として、これは些か趣きが違います。中七の助詞も「で」ではなく、「カンバス上に」ではないかと一度は思ったのですが、いやいや、このゴツゴツした言い方がこの句の味となっているのだと思い直しました。

「秋高し」の光景を描いている「カンバス」でしょうか。そのところどころに置かれた「黒」は、眩しい秋空の光を描くために配された影の部分。「秋高し」の美しい眩しさを描くためには、より「黒」い陰影を必要とするのでしょう。

「カンバス上で」の「で」は、その箇所をことさら強調する措辞として機能し、それによって季語「秋高し」がより深いものとして表現されるのだと、次第に納得してきた一句です。

ふられたというのにこの秋の高さ　鼓吟

女心と秋の空なんて言いますから、ふられたネタの句も多かったのですが、この句の叙述の正直さに笑ってしまいました。季語「秋高し」を「秋の高さ」とアレンジした点も、口語の句としての佳さを引き出しました。「この」の一語が現場証明となり、「秋の高さ」ゆえに、溜息も倍増してくるのでしょう～（笑）。

第35回　2013年9月19日週の兼題

秋祭（あきまつり）

天

水神の石を上座に秋祭　青蔦

今週の兼題「秋祭」については、「春祭」「祭（＝夏の季語）」「秋祭」の違いを認識しなくてはいけません。

【春祭＝その年の豊作を祈願するものが多い】

【夏祭＝疫病・災厄などをはらう祈願から発生したものが多い】

【秋祭＝秋の収穫を神に供えて感謝する祭り】

五穀豊穣を神に感謝する季語「秋祭」の本意をどう表現するか、そこが工夫のしどころだったわけです。

今週の「天」に推す一句には「水神」という言葉が出てきます。稲作には切っても切れない重要な神です。

「水神の石を上座に」に据えるとは、一体「秋祭」のどんな場面でしょう。私が想像したのは御旅所です。祭礼の日、神輿は何カ所かで休憩しますが、その御旅所の一つは、村の辻に祀られた「水神の石」の前だったのでしょうか。町の消防団詰め所に祀られている「水神の石」かも？なんて想像も膨らんできます。

汗にまみれた担ぎ手たちは、暫しの休憩がてら「水神の石」を「上座」として次々に座り込みます。ある者はそこに湧き出す水で顔を洗い、ある者は

振る舞い酒を飲み、冷えた缶ビールを手にし、ここまでの無事な巡幸を喜び合います。

氾濫することもなく今年の豊かな実りを支えてくれた「水神の石」に感謝する心が、「上座に」という表現にさりげなく読み取れるあたり、実に滋味のある巧さです。

地

地下足袋に金糸の刺繍秋祭り　てんきゅう

「秋祭り＝収穫、豊穣のイメージ」をどう表現するかという点において、この句が工夫したのは中七の色彩でしょう。「地下足袋」は本来労働のための地味なものですが、中七「金糸の刺繍」によって一気に華やぎます。労働の地下足袋から祭礼の地下足袋へ、一句全体が鮮やかに変容します。

雲散って秋の祭りになりにけり　木よし

なんと爽やかな語り口でしょう。「雲散って」の後に「秋の祭り」と続けば、その雲は波のような鱗雲に違いないと、読み手の心に映像が生まれます。「雲散って」秋の真っ青な空が広がり始めます。「秋の祭りになりにけり」のゆったりとした措辞が、いかにも牧歌的な秋祭りの光景を描きあげます。

火の粉浴ぶ異形の神や秋祭　樫の木

こちらは「水神」ではなく火の神でしょうか。いやいや、「火の粉浴ぶ」としか言ってないですから、火の神だと限定する必要はないでしょう。同じ稲作をする異国の「異形の神」かもしれないなと想像しました。秋の実りを感謝する「秋祭」もまた、異国の趣きなのだろうと。中七「や」の詠嘆する「異形の神」の激しい姿が、季語「秋祭」をひと味違ったものに見せてくれます。

秋祭あとの星増えゆくふしぎ　大塚めろ

独特のメロディーをもった一句ですね。一語一語がうねるように次の語へつらなっていく調べが魅力です。

「秋祭」が終わったあとの空には一気に「星」が「増えゆく」ことは、ひょっとすると皆知ってるんだけど、それを「ふしぎ」だと感じるのが詩人の感性。それを的確に17音の器に盛りつけられるのが俳人の技術。五七五を越えた一行詩のような味わいの一句です。

鎌鍬の泥を落として秋祭　はまゆう

上五中七の措辞はことさら珍しいものではありません。が、下五に季語「秋祭」が座ったとたん、「鎌鍬の泥」を落とす動作は、日常のそれではなく、特別な感謝を捧げる行為へと変容します。

私は、宵宮の夕暮れを思いました。稲刈りも終わり農事も一段落して迎える「秋祭」は、いよいよ明日から始まります。

秋祭り田の神様を見送りぬ　ぽよむ

正直なところ「秋祭り」が終わって「田の神様」を見送るという伝承は日本中にあるわけで、その内容にオリジナリティがあるわけではないのです。が、「田の神様（たのかんさあ）」という呼び名が実にいいですね！「たのかんさあ」という響きが、その背後にある豊かな伝承の世界を想像させます。どの地域の方言なのだろうと、そんな興味も広がります。

秋祭そろそろ天狗出るころか　ポメロ親父

「天狗」とは、「秋祭」のお練りの役どころであるのか、日本昔話に出てくるような「天狗」なのか。どちらに読めば一句にとってシアワセかなあ～と色々考えたのですが、どちらかに限定しないのが、この句を最も豊かにする読みだ！と思い直しました。

「天狗」の面をつけ「秋祭」の行列の前を後を歩いている「天狗」役の人物「そろそろ」この界隈に現れてもいい時間なんだがなあ～なんて待ってる感じ、楽しいですよね。「天狗」の面を取れば、そこにあるのは親しい知人の顔。振る舞い酒の一杯でも饗さねばと待っているのかもしれませんね。

かたや、虚の世界に跋扈する「天狗」殿は、「秋祭」の夕暮れ方になると、何やら悪さをしに「出る」んだよな……って感じでしょうか。「出るころか」のつぶやきは、こっちの読みの雰囲気。そんなことをあれこれ想像していると、たった一句に立ち止まったまま豊かな時間が過ぎていきます。

秋祭りごろごろ産んだ子集まる　果林

ははは！「秋祭り」になると、「子」どもたちが故郷に帰ってくる！というだけのことなんだろうけど、「ごろごろ産んだ子」という表現の無造作な可笑しみ、「ごろごろ産んだ子」がさらに「ごろごろ産んだ子」を引き連れて帰ってくる愉快。豊穣なる「秋祭り」ならではの爆笑の一句！

第36回　2013年9月26日週の兼題

夜食（やしょく）

天

帰る群れに夜食の袋ぶんと当たる　ミル

「夜食」とは「夜なべ」が終わったあとに食べる夜更けの食事、というのがそもそもの季語の本意でありました。秋の夜長をもう一仕事片付けようという「夜なべ」。家族だけのもう一仕事ではなく、近在の若者たちが夜なべ小屋に集まり語り合いながら手仕事をし、世間智を蓄え、ほのかな恋心を育てることも「夜なべ」の場でありました。

そんな「夜なべ」は過去のものとなった今、平成の時代には平成の時代なりの「夜なべ」があり「夜食」があるはずだと考える心に、こんな一句が飛び込んでまいりました。

「帰る群れ」は仕事を終えて家路をたどる人々の「群れ」ですね。広い交差点の横断歩道を、人々は駅へ向かって大きな波のように動いていきます。その波の真ん中に一人「夜食の袋」をさげたワタシがいます。嗚呼、皆さんはこれから家に帰って美味しい夕飯を家族と共に食べるのですね、それとも同僚と一杯やりに行くのですか。ワタシはこれから残業ですよ、今夜のうちに仕上がるかどうかも分からない大仕事を抱えてますよ、と恨みがましい気持ちが湧いては消え湧いては消えしているのでしょう。

この句の眼目は、なんと言っても下五の「ぶんと当たる」ですね！コンビニで買った「夜食の袋」を振り回していたわけではないでしょうが、心は振り回したい気分。「ぶん」というオノマトペは、コンビニのビニール袋の感触であり、腹立たしい心の表現でもあり、さらに6音の字余りに未練がましい気持ちが籠もっているかのようでもあり、現代の「夜食」の一コマを実にリアルに切り取った作品でありました。

地

答弁案夜食のそばののびにけり　ぐわ

「夜食」という季語の本意を考えるならば、どんな「夜業」をしている場面での「夜食」なのかをしっかり揶揄して欲しいと思うわけですが、そのような視点から掲出句を読めば、「答弁案」という上五が実に巧いですね。

「答弁案」の一語から、議会の答弁を作成する事務方の姿が浮かんできます。明日の議会での「答弁案」がまだ出来てない、あるいは急な事情が発生して、用意していた「答弁案」が使えなくなった等など、さまざまな事情も想像されます。

傍らに置いた「夜食のそば」は「のび」放題にのび、秋の夜長はしんしんと更けていくのです。

大鋸屑のスープに浮かぶ夜食かな　樫の木

一読、上五字余りにしてまで「大」の一字は必要か？と考えたのですが、「鋸屑」だと細かな屑に思えますから、それが「スープ」一面に入ってるという印象になるかと。「大鋸屑」だと、ちょいとつまんで取って、心づくしの「夜食」の「スープ」を飲んだに違いないと想像できます。こういう細かなリアリティーが一句を支えているのだなと納得した次第です。

終い湯を落とし磨いてのち夜食
小市

こちらは家庭の「終い湯」ではなく銭湯のそれだと読みたい一句。最後のお客を送り出し「終い湯を落とし」びしょ濡れになりながら大浴場、露天風呂、歩行浴と次々に「磨」きあげていきます。「落とし磨いて」と動作を畳みかけ、さらに「のち」との時間情報をさりげなく入れ、最後に「夜食」という季語が出現する、この語順が巧いですね。ピカピカに磨かれた浴槽が労働の心地よさを思わせ、それによって「夜食」の美味さが倍増する一句です。

手に残るドリルの震へ夜食食ぶ
たま

「手に残るドリルの震へ」によって、これも職種がありありと想像できますね。私は、夜間工事でアスファルトを剥がしてる「ドリル」を想像しましたが、他にも色々な工事が想定されるでしょう。

「手に残るドリル」の感触を労働の過酷と受け止めるか、労働の感謝と感じるかは読み手の心にゆだねられますが、「夜食喰う」ではなく「食（た）ぶ」という動詞の選択からして、後者の読みを取りたいと思います。今日も一日仕事があって、こうやって「夜食」をいただけることに感謝しつつ、ご馳走様でしたと「夜食」の箸を置くのでありましょう。

おごそかに薬缶をまはす夜食かな
渕野陽鳥

町工場の夜業の「夜食」を想像しました。運ばれてきた「夜食」がおにぎりかパンか、なんてとこに目をつけるのではなく、ドスンと置かれる大きな「薬缶」に目をとめるあたりが、いかにも俳人らしい視線です。

工場の年配者が座っている席から順に大きな「薬缶」が回されていきます。それぞれが自分の湯飲みに注いでいくこの場の空気を、「おごそかに」と表現できるこの作家のアンテナの感度の佳さ。下五「かな」の詠嘆も「おごそかに」広がります。

夜食にするか角のポケットウイスキー
猫ふぐ

会社勤めの残業で、「角のポケットウイスキー」を取り出すのはなかなか難しいかと……（苦笑）。「ポケットウイスキー」ではなく、堂々と「夜食」の伽のウヰスキー飲めますもんね。自宅や自分の工房ではない場所で仕事をする職種って一体なんだろ？ 漁師や猟師、夜中の取材してるフリーライター、興信所の調査員、麻薬Gメン、やさぐれ刑事～（笑）。

「夜食にするか」という呟き、取り出す「ポケットウイスキー」、しかも銘柄は「角」。この人物の立ち居振る舞いから、声音までが彷彿とする一句であります。

葱小屋の曲は三郎（さぶ）ちゃん夜食らし
もね

「葱小屋」は今、出荷の最盛期。夜も煌々と電灯をつけて作業が続けられています。「葱」は冬の季語ではありますが、この句の主役はやはり「夜食」という季語。小道具として「葱」が使われていると考えるのが妥当でしょう。

「葱小屋」にはいつもラジオが流れていて、ちょうど今「三郎ちゃん」の歌声が響いています。笑い声もかすかに聞こえ、そろそろ「夜食」のようだなと耳をすませる作者は「葱小屋」とは無関係な近所の住人。それを表しているのが「らし」という推量の助動詞ですね。

警戒の夜食をすする雨合羽
妙

なるほど、こんな「夜食」もあるに違いないと納得した一句。「警戒」「雨合羽」の二語が、緊急事態に備える夜の「夜食」であることを如実に語ります。

私が想像したのは、地域の消防団詰め所。近所の川を見回り、警戒水域になり次第住民に避難を知らせねばという「警戒」の夜。近づく大型台風は朝方に近づくにつれてさらに激しくなる予報だから、今のうちに「夜食」をすっておこうぜ、という一場面。「夜食」に対して「食う」は言わずもがなの叙述ですが、「すする」という動詞が効果的であることは言うまでもありません。

パイプ椅子に同僚眠る夜食かな
神戸鳥取

「同僚」の様子に焦点を当てることで「夜食」の場面を描くという工夫を誉めたい一句。明日のプレゼンのための作業でしょうか、入稿しないといけない編集作業でしょうか。時間との勝負の夜業を終え、全員が安堵の脱力状態のところに届く「夜食」でしょう。

傍らの「パイプ椅子」に座ったまま、机に被さるように眠っている「同僚」の肩をたたき、「夜食」の弁当を渡すシーンもありありと想像できる一句です。

夜食とる励めランゲルハンス島
ゆきる

「プチ医学的な話になりますが、ものを食べて血糖値が上昇すると、それを下げるためのホルモン（インシュリン）が膵臓にあるランゲルハンス島のβ細胞から放出されて血糖値がコントロールされます。読みは『らんげるはんすとう』。ドイツ人の病理学者ランゲルハンスが発見し、その名前に由来するのだそうです。／ゆきる」

かれこれ三十年俳句をやってますが、「ランゲルハンス島」を詠んだ句に出会ったのは、これが三句目です。十年に一度出会うネタってやつですね（笑）。このような長い固有名詞を一句に取り込んでくると、季語＋固有名詞でほとんどの音数を使ってしまいます。となると、残りの短い音数をどう使うかが勝負の分かれ目です。

この句の場合でいうと、「励め」の一語が非常に効果的！「夜食」をとってしまえば、自分にできることはもうない、あとは「ランゲルハンス島」よ、存分に「励め」よと無責任なエールを送る愉快。いやはや楽しませてもらいました。

夜食くふ動点Pは待たせおき
とおと

現代の「夜食」が「夜更けの軽食」という意味を持ち始めている以上、このような句材も許容していくべきではないかと考えます。

何が巧いって、「動点P」の一語でどんな教科であるかを語り、さらに「動点」を「待たせ」たままで「夜食」を食うというウィットの鮮やかさ！

この場合の「くふ」も本来は言わないでよい言葉ですが、この位置におかれた「くふ」の一語が、中七下五の展開の伏線となりますので、その効果は明らかです。

夜食なぜ夫人は殺されなかつたか
初蒸気

同じく、読書のための夜更かしの後の軽食を「夜食」と言って良いのか、と厳密な疑問を持つ俳人もいらっしゃるとは思いますが、これらを「夜食」と許容しても良い時代の流れがあり、秋の夜長を楽しむ心は息づいていると考えます。

「夜食」の後の「なぜ夫人は殺されなかつたか」というフレーズによって、作者が読んでいるのは推理小説だろうと想像がつきます。さらにワタクシは個人的な好みで、アガサクリスティーに違いないと決めつけました（笑）。本を置いて「夜食」を食べながら、脳の中では「なぜ夫人は殺されなかつたか」という疑問がぐるぐる渦巻いているのでしょう。

さらに、小説の場面でも「夜食」が殺人の現場にあったのではないかと深読みしました。同じ鍋から同じスープを飲んだのに、同じ皿から同じサンドイッチを手にしたのに「なぜ夫人は殺されなかつたか」……そんなことを考えてニヤニヤ楽しんでいると、私もマジでお腹が減ってきました。今週の「天・地」が書き上がった夜更け、軽い「夜食」とナイトキャップのウヰスキーで、空腹をなだめます。今週は面白い句がたくさんあって、いやはや大満足でありました。

第37回　2013年10月3日週の兼題

木犀（もくせい）

天

木犀の流れて退路断たれゐる
鼓吟

季語「木犀」といえば、その芳香を詠まないではいられないのですが、だ

からこそ類想類句が束になって押し寄せます。そんな今週、「香り」と言わずして香りを描く句があればいいなあと思っていたところ、この句が目に飛び込んでまいりました。

「木犀の流れて」だけだと、散った花が水面に漂っているとも読めますが、後半の措辞に「香り」であると特定する力がありましたね。津川絵里子さんに「見えざうな金木犀の香なりけり」という句がありますが、まさにその「見えざうな金木犀の香」によって自分の「退路」が「断たれゐる」という状況に俄然興味が湧いてきます。

誰かに結論を詰め寄られているのでしょうか、言い訳の余地のない負い目があるのでしょうか。「木犀」の香りが漂ってくる場所ですから、自宅の庭か、公園か、はたまた秘密の話し合いがもたれている料亭の離れか(笑)。相手の投ずる詰問に対し、何も答えられない自分に絶句していると、風向きのせいか急に「木犀」の強い香りが、背後に鉄壁のごとく在ることに気づきます。

一読した時、「流れて」という動詞の是非について迷いました。「漂い」ぐらいでもいいのかなと。ならば、「ただよい、たいろ、たたれる」とタ音で韻も踏めるし……と思ったのですが、よくよく考えてみると、やはりここは「流れて」ぐらいのはっきりとした香りの動きを描写しないと、「退路断たれゐる」と言い切る力が削がれるな、と納得。香りによって「退路」を断つことのできる花とは、やはり「木犀」しかないだろうと、その身に迫るごとき香りを追体験した一句であります。

地

木犀やうしろは誰もいないはず　ichiei

この句も「天」の句に近い感覚があります。「うしろは誰もいないはず」なのに、何か気配を感じてしまい、何度も振り返るのでしょう。その気配が「木犀」の香りであることに気づいた時、季語の持つ嗅覚の力に作者は深く納得したのでしょう。「木犀や」の切字の効果も大きいですね。

やることリスト木犀に会いにゆく　ミル

「やることリスト」、私も毎日スケジュール帳に箇条書きしては日々の仕事をこなしてますが、そんなリストの中に「木犀に会いにゆくこと」なんて一項目があるとは、なんと素敵な俳句のある生活！ 勿論、「木犀」でなくても成立する句ではありますが、香りの強い「木犀」だからこそ、この香りの本体を探しにいく俳人OLの昼休みプチ吟行！みたいな読みも広がってくるのだと思います。

木犀と子象が同じ空の下　ゆきる

今年生まれた「子象」でしょうか。「子象」がこの世に生まれて初めて嗅いでいる「木犀」の香り。小さいけれど長い鼻を空に伸ばして、「子象」は存分に香りを味わっているのでしょう。「同じ空の下」には、「木犀と子象」と、それを見ている私もいます。小さな三点の三角形がほのぼのとした詩的空間を創ります。

木犀匂う英検のリスニング　かなぶん

「木犀匂う」が嗅覚、「英検のリスニング」が聴覚ですね。このように二つのパーツを畳みかけますと、読み手もまたその嗅覚と聴覚を刺激されます。「木犀」が匂いくる窓、これから始まる「リスニング」の緊張感。五七五を外した独特のリズムが、この句の内容をうまく表現しています。

小さき地震木犀の香のさらに濃し　きのと

「地震」は「なゐ」と読みます。「小さき地震」は触覚、「木犀の香のさらに濃し」は嗅覚、この句も五感を刺激します。

今、たしかに揺れたよね、地震だったよね。ささやかな感覚を感知し直そうとすると、五感はさらに鋭敏になり「木犀の香」を強く意識します。「小さき地震」に揺すられることで「木犀」もその香を「さらに」濃く放つのでしょう。

木犀やピアノの放つ音の粒　せいら

音楽をやってる人たちにとっては「ピアノの放つ音の粒」という感覚はよく感じることなのでしょう。

私がこの感覚を生々しく体験したのは、二三年前、ニックことナサニエル・ローゼン（私の妹の夫。チャイコフスキー国際コンクール優勝のチェリスト）が、高知のホールで開いた演奏会でした。落合淳さん（フェリス女学院大学教授）との共演はこの日が初めてでした。最初の曲目は別の演奏会でも聴いたことのあるものだったのですが、落合さんの一音目が零れたとたん、「ピアノの放つ音」がまろまろとした球であることにビックリ！ 私のような音楽素人の耳にもその違いが分かることに二度ビックリしました。

この句を読んだとたんに、あの日の感動が蘇ってきました。そして、せいらさんが聴いたこの「ピアノの放つ音の粒」は「木犀」の香のような「粒」であったのだろうなと。中七下五のフレーズに対して上五に入る季語は他にもあるとは思いますが、「木犀」の香り、「木犀」の花の粒のような「ピアノ」の音を聴いてみたくなりました。

鞄には音叉金木犀の駅　ぐわ

「木犀」という季語の世界の中に音楽を感じた人たち、多かったですね。この季語の持つ香りの印象が音楽への連想を引き出すのでしょう。

「鞄には音叉」が入っているのですから、音楽を仕事としている人、趣味としている人でしょうか。「金木犀の駅」に降り立ったとたん、強い香りが漂います。作者の体は否応なく、その香りに反応します。そのとたん作者は思ったに違い有りません、「鞄」の中の「音叉」もまたこの香りに反応して小さく鳴ったのではないか、と。

「鞄には音叉」とのみ語り、それ以上のことは述べていないのですが、「金木犀」という季語が詩的連想を広げます。

木犀の圏内に息あまくなる　野風

「木犀の圏内」とは、香りの圏内でしょう。くっきりと香りの輪郭が感知できる「木犀」ならではの表現ですね。「木犀」の香りを直接的に描写するのではなく「圏内」という言葉に託し、さらに自分自身の「息」が「あまくなる」かのようだと畳みかけた点に工夫があります。

木犀や息も吸い続ければ死ぬ　初蒸気

「息あまくなる」と受け止める人もいれば、「木犀」の香に対してあまり良いイメージを持っていない人もいるでしょう。

中七下五「息も吸い続ければ死ぬ」は、「木犀」の香への罵詈雑言ともとれますし、どんなに良い香りであっても過ぎたるは及ばざるがごとし的格言のようにも読め、さらに「息も吸い続ければ死ぬ」という生々しくも理不尽な肉体の死、鬱々たる精神の死を暗示するものとして解釈することも可能です。

いかなる解釈をとるにしても「木犀」という季語は、絢爛にして鬱蒼たる香りを撒き散らしつつ、読み手の鼻孔をみっしりと塞ぎ始めるのでしょう。

第38回　2013年10月10日週の兼題

鵙（もず）（百舌鳥（もず））

天

鵙鳴いて神宿りたる巨石かな　桜井教人

今週の兼題が「鵙」で、次回が「鵯」と続くハードルの高い二週間。ワタクシも鳥類図鑑やネット動画を見て、「鵙」と「鵯」の違いを確認しました。少なくとも本物の「鵙」と「鵯」に出会ったら、この二羽の区別だけはつけられそうな気がします（笑）。今週来週の兼題に挑む条件として、二つの季語を入れ替えても成立する句では困ります。これは「鵙」以外にはあり得ないという作品を見つけ出したい！と思う心に、ズシンと入ってきたのがこの一句でした。

肝となるのは中七「宿りたる」＝「動詞・宿る＋完了の助動詞・たり」という表現です。「鵙鳴いて＝鵙が鳴いたことによって」「神宿りたる巨石かな＝今、神が宿った（神が宿るという行為が完了した）巨石であるよ」という意味になります。

普通、〇〇することによって〇〇した、という構文を俳句に取り込むと、一句に因果関係が発生しがちで、嫌われるのですが、この句の場合は逆にそこがミソとなります。

「鵙」の甲高い声がキィーキィーと響く神の杜の巨石でしょうか、神の山の小高い頂きに祀られた巨石でしょうか。秋の澄み通った空気の中、激しく鳴き渡る「鵙」の声によって、眼前の「巨石」に今、「神」が宿ったかのような心気を感受した作者がここにいます。

「鵙」が「早贄」を作る行為の意味は、まだ科学的に解明されていないようですが、この句を読んだとたん、「鵙」は「神」のために贄を捧げているのかもしれないと思いました。「鵙」とはこの世に宿る森羅万象の神に贄をささげる、アニミズムの巫女なのかもしれないと、そんな感興をかき立ててくれた一句でありました。

地

千の鵙鳴きをり万の贄求め　　**樫の木**

「鵙」と「鵙の贄」は別物の季語だという認識を明確にしつつ、「贄」という言葉を使って「鵙」そのものを描いてみせる、という発想もあっていいでしょう。それを見事にやってみせてくれたのがこの作品でした。

「千の鵙」は「万の贄」を求めて鳴いているのだと言われたとたん、ヒイラギの棘に刺された幾万のカエルがその手足をヒクヒク動かしながら、やがて干からびていくさまを、早送りの映像で見せられた心持ちになりました。下五読み終わった後の空白に、「万の贄」という名の「万」のカエルの映像がシュールに広がり、勝手にたじろいでしまいました。

鵙鳴きて我の気配を消されたる　　**舞**

「鵙」がやってきて、威嚇の高音で鳴きだしたとたん、「我の気配」が消されてしまったような気がするというのです。一読、他の鳥でも成立するのではないかと、あれこれ鳥の名前を入れてみるのですが、この感知に見合う鳥がなかなか見つかりません。あんな小さい体で他者の「気配」に影響を及ぼせる「鳴き」声をもっている鳥として、「鵙」の一語は動かしがたく一句を支配します。

鵙晴や熊の燻製炙る小屋　　**杉本とらを**

「鵙晴」という傍題は、いかにも秋らしい澄んだ青空を見せてくれます。その晴天を切り裂くように「鵙」の高音は響きわたっています。

この上五に取り合わせられた光景が印象的ですね。「熊の燻製炙る小屋」は狩人たちが利用する山小屋でしょうか。「熊の燻製」の匂いって嗅いだことないんですが、なんとなく想像できるような気もします（笑）。「鵙」も人間も生きるために狩りをしそれを蓄える、そんな思いも一句の底に潜んでいるのかもしれません。

肉汁のじうとしたたり鵙の声　　**笑松**

肉食である「鵙」のイメージから、「肉汁のじうとしたたり」というフレーズが生じたのでしょうか。「肉汁」の音としての「じう」がいかにも熱くしたたっている感じで、巧いですね。

下五「鵙の声」とのみ取り合わせて、それ以上のことをクダクダ述べないことによって、「鵙」という存在を際立たせたテクニックも誉めたいところです。

鵙の空きっちりたたむ鯨幕　　**たま**

「鵙の空」は、鵙たちが高音で威嚇し合う空です。「鵙晴」は晴天の青が印象づけられますが、「鵙の空」は色ではなく空間のイメージが強くなりますね。その「鵙の空」という上五に取り合わせられたのが、「きっちりたたむ鯨幕」という措辞。黒白の「鯨幕」を「きっちり」畳んでいるのは、葬儀屋の職員でしょうか。それとも作者自身でしょうか。お葬式が終わった後の空虚が「鵙の空」という空間に反響していきます。

鵙猛る小鉤がうまくおさまらぬ　　**あねご**

「鵙」の高音が「猛る」ように響きわたることと、「小鉤がうまくおさまらぬ」ことは何の関係もないのですが、上五の季語のイメージは中七下五のフレーズにも影響をおよぼし、何か心に不安があるのではないか、怯えがあるのではないか、と読者の想像を刺激します。私は、喪服のための足袋の「小鉤」を想像しました。「鵙猛る」の不穏な気配が、指先の震えとなって伝わってきます。

ただ、作者があねごさんだと分かったとたん、女御興の足袋の「小鉤」かもしれないぞ！と思いました（笑）。こうなると、「鵙猛る」声に、勇ましい女たちの声がかさなっていきますね。このような読みも、同時に成立する一句でもあります。

鵙やむや紙を離るる筆の先　　**安**

こちらは「鵙」の高音がふっと「やむ」瞬間を切り取りました。「紙を離るる筆の先」は書道作品でしょうか、筆でしたためている手紙でしょうか。個人的には前者の読みを採りました。「紙を離るる筆の先」に集中する意識と、「鵙やむや」という瞬間が共鳴しているように感じられたからでしょうか。息を深く吸うてから、一気に書き上げ、最後の最後に「筆の先」が「紙」を離れると、息をゆっくり吐いていく。「鵙」がその裂帛の静けさを感じとって、鳴き止んだかのような一句です。

あのときも鵙は警告呉れていた　　**こま**

「あのとき」が、どんな時であったのか、一句は一切語っていません。が、「あのときも」の「も」によって、それが手痛い出来事あったことを想像させます。「あのときも」鵙だけはそれを知っていて「警告」を「呉れていた」のに、私たちは今回もまた「鵙」の「警告」を無視するのか、という静かな憤り。いや、ひょっとすると全てが終わった（一度目の警告を無視した）後の静かな嘆きかもしれません。

この「鵙」とは一体何を比喩しているのでしょうか。寓喩ともいうべき一句の読みは、様々に枝分かれしながら広がっていきます。

百舌鳥告げよ王様は裸であると　　**鞠月**

「裸の王様」の話を下敷きとした、寓意の一句。さまざまな鳥の声色を真似する習性をもつ「百舌鳥」ですから、「王様」が実は「裸」であることを、様々な鳥の声で「告げよ」と唆しているのですね。「鵙」ではなく「百舌鳥」と書く効果を狙っての一句であることは言うまでもありません。

ヒッチコックヒッチコックと鵙笑う　　**花屋**

「ヒッチコック」とは映画『The Birds』の監督、あの映画を初めて観た時の衝撃は忘れられませんが、それにしてもいやはや、こうきたか！という発想勝負の一句です。

「鵙」は【鳥はもとよりツクツクボウシ、ネコ、イヌの鳴き声まで真似することがある】のだそうです。そんな「鵙」たちなら、「ヒッチコックヒッチコック」と鳴くことぐらい朝飯前かもしれません。

「鵙」は、「鵙高音」のけたたましい鳴き声や「鵙の贄」のような習性にはそぐわない可愛げな表情の鳥ですが、その「鵙」が何百羽も集まってきて「ヒッチコックヒッチコック」と笑い出したら、恐怖に神経がやられてしまうかもしれません。下五「鳴く」ではなく「笑う」の一語が、ヒタヒタと恐怖を募らせます。

第39回　2013年10月17日週の兼題

鵯（ひよどり）

天

ひよどりのあれは青き実食みし声　　**とおと**

鳥類図鑑のヒヨドリたちは、みな赤い実をくわえてポーズをとっているかのようですから、この手の類想類句がでてくるのは当然のことなのですが、それを逆手にとったコロンブスの卵的一句です。

うっかり「青い実」を啄んでしまう「ひよどり」も、そりゃいるに違いないよという愉快。「ひよどり」のヒーヨヒーヨと騒ぐ煩い声も、あ、こりゃ青い実だったよ、オレ青い実食っちゃった、みんなこれ苦いぜ!なんて、大袈裟に騒いでいるのかもしれないという空想的実感。

発想勝負の一句ではありますが、語順がよく工夫されています。「ひよどりの」と始まる上五の後に「あれは」と置きました。代名詞をこの位置に入れることで、何が「あれ」なんだろう?と読み手の好奇心は動き出します。そして何よりもここから後の展開が鮮やか。「青き実」を食べてしまった……で終わらせず、最後に「声」を提示することで、読後の余白に「ひよどり」のヒーヨヒーヨという煩い声が響きわたります。言われてみると、あの声はなんだか苦いものを食べて騒いでいるようも聞こえてきます。作者の思うツボにまんまと嵌る愉快を味わわせてくれた一句でありました。

地

鵯の嘴漱ぐ水甘からん　**ハラミータ**

「鵯」の特徴の一つに甘い実が好物である、というのがありました。貪欲に甘い実ばかり食べている「鵯」のことだから、水を飲む時に「嘴」をすすぐ「水」もきっと甘いに違いないよ、という発想そのものが詩です。

赤い実、甘い実……という類想の向こうに、美味しい実を食べた後は水を飲みにいくに違いないと想像を膨らませていく発想方法は、句作のヒントにもなります。

「天」の句と同じように語順にも心を配っていて、的確な言葉が的確な位置におかれています。これも「天」に推したかった愛唱の一句です。

墓石の色の鵯ばかりかな　**ぐわ**

「鵯」の灰色の体を様々に表現した句もありましたが、「墓石の色」という比喩が巧いですね。あくまでも比喩の言葉に過ぎないのですが、一句の光景として墓地が浮かんでくる効果があり、さらに「ばかりかな」で複数の「鵯」がいることも描写しています。「墓石」の前のお供えものの柿なんぞをつついているのかも……と想像も広がります。

鵯の潜り抜けたる枝の波　**不知火**

「鵯」の飛び方は独特の波形を描きます。「鵯」が敏捷に枝枝を「潜り抜け」るさまを「枝の波」を潜り抜けていくよ、と表現。これが「鵯」の飛び方の表現にも転化していく効果をもっている点を大いに誉めたい一句でした。

撃つても撃つても鵯の次から次　**ポメロ親父**

かつてウチの祖父さんも空気銃で「鵯」を撃っていたという話、聞いたことがあります。そんな時代のリアルな場面なのでしょう。「鵯」の群れの迫力を思う時、「撃つても撃つても」「次から次」はどうしようもない実感だったのだろうと。

勝手な深読みなのですが、次から次に現れる「鵯」を「ヒト」の暗喩だと読むことも可能ではあるなと。『坂の上の雲』の二〇三高地の戦闘がふとあたまをかすめたりも致しました。

鵯鳴くや木霊に遠慮することなく　**マーペー**

「鵯」の煩い鳴き声を表現した句もたくさんありました。ヒーヨヒーヨと鳴き声をそのまま使うと、類句の山に埋もれてしまいます。その声を「木霊に遠慮することなく」と表現することで、無遠慮に群れで鳴き騒ぐ様子を描きました。こういう発想力も今後のヒントにできそうですね。

何事の起こる日ひよの大騒ぎ　**金子加行**

似たように鳴き騒ぐ「ひよ」を描いた句ですが、こちらは声だけではなく、実から実へ飛び騒ぐさまも見えてきます。それを暗示するのが「何事の起こる日」という表現。一体、今日は何が起こる日だというのか、世界が終わる日というわけじゃあるまいに、この「ひよ」たちの「大騒ぎ」は一体なんなのだろう、と鵯を見上げる作者がいます。

ひよ啼くや訃報はいつも後ろから　**ぼたん**

「ひよ」の喚きぶりを「ひよ啼くや」と詠嘆したあとの、「訃報はいつも後ろから」というつぶやきが、読み手の心に覆い被さってくるかのような一句です。「訃報」は、後ろから圧迫してくるように届くものだという感慨は、中年以降の世代にとって親しいものではないかと思います。「ひよ」が啼く度に、誰かの訃報が誰かの元に届く、そんな不穏な鳴き声でもあります。

カメラおろしぬ鵯と風の音　**神楽坂リンダ**

「カメラおろしぬ」という描写がありますから、ケイタイで簡単に撮影しようとしているのではありませんね。鳥を獲るための望遠「カメラ」をひとまずおろして、「鵯と風の音」を聴いているという場面。「鵯」は珍しい鳥ではありませんから、「カメラ」を覗いて、なんだヒヨドリか……と「カメラ」をおろしたのかもしれません。別の鳥を探そうと、鳥たちの声に耳を澄ませると、頭上の梢を渡っていく「風の音」が耳に集まってきます。

北京語のざわめく路地や鵯の鳴く　**理酔**

中国の猥雑な「路地」には、怒鳴るような「北京語」が飛び交っています。「北京語のざわめく路地や」という詠嘆によって、場面がありありと立ち上がり、さらにその頭上にいる「鵯」の声や動きが読者の脳裏に飛び込んできます。

雑踏の両側には様々な売り物の屋台もあるのでしょう。ついさっきまで飛んでいた「鵯」たちは捕らえられ、店先にぶら下げて売られているのかもしれないと、そんな想像もかき立てられる中国の「路地」であります。

第40回　2013年10月24日週の兼題

初時雨（はつしぐれ）

天

縫ひて絞り縫ひて絞りて初時雨　**七草**

地味な句なので最初はうっかり通り過ぎておりました。注意深く二度目の読みにかかり、「縫ひて絞り」とは一体なに?と思ったとたん、これが絞り染めの作業工程だと気づきました。白い布を「縫ひて絞り縫ひて絞りて」しながら、頭の中にある図案を刺していく、根気のいる作業です。縫い具合によって絞り具合によって変化していく紋様を、作者は脳内に自在に描き出しつつ、一針一針作業を進めていきます。

「縫ひて絞り縫ひて絞りて」が何を意味する動作かがわかったとたん、リフレインの後に出現する「初時雨」という季語の鮮やかさにハッとしました。「縫ひて絞り縫ひて絞りて」の白布の色、その工程が終わった後の藍染めの色、藍の匂い、時雨の匂い、進み行く針の動き、降っては止む銀色の時雨。それらの光景が「初時雨」という季語によってモンタージュ（映画で、多数のカットを組み合わせてつなぎ、一つの作品にまとめる手法）されていきます。一句の字面そのものは「縫ひて絞り縫ひて絞りて」としか語ってないのですが、季語というものがここまで豊かな力をもって、季語とは関係のないフレーズを際立せるのだという事実に唸ります。

染め上がった紺色の地に、花咲く白い紋様。「初時雨」の匂いは、藍の匂いかもしれないと、そんなことも感じた作品でした。

地

太陽を粉々にして初時雨　**てんきゅう**

「時雨」ではなく「初」の一字の存在価値に思いを馳せれば、「太陽を粉々にして」という描写に惹かれないではいられません。冬に入って初めての時雨「太

陽」はまだ秋の力を残しています。きらきらと通り過ぎていく雨は「初」の字を冠するに相応しい明るさがあり、静かな躍動感があります。

芯固き香草粥や初時雨　ちとせ

「香草粥」の香しさが「初時雨」を美しく匂わせます。「香草」の緑と、白々と走る「初時雨」の色の印象も鮮やかですね。

「芯固き」という一見マイナスイメージを与える描写が、なぜこの句に佳い影響を及ぼしているのだろうと、少し自問自答しましたが、くたくたに煮られた「粥」ではなく、米粒がしゃんと立っている感じが「初時雨」の初々しさを支えているのだと納得。食べ物の句は美味しそうに詠んでやるべきだと思っておりますが、まさに香しくおいしそうな「香草粥」であります。

初時雨匂天神町上ル　ぐわ

この句、「上ル」という表記で京都ではないかと想像はつきますが、「初時雨匂ふ」の「ふ」を入力し忘れたのか？とも疑いました。が、いやいや待てよ「匂天神町」という町名がほんとにあるとしたら、これこそ「初時雨」に相応しい地名ではないかと思い立ち、検索してみました。

〒600-8414 京都市下京区匂天神町（においてんじんちょう）

あるんだ！とちょっと感動。「匂」は地名の一部なのに、「初時雨」が匂うよ、という印象を読み手の脳に滑り込ませます。地名でこんなこともできるのかと、楽しませてもらった作品でした。

ステッキを銀座に求め初時雨　薄暮の旅人

「初時雨」は一種の明るさや華やぎをもった通り雨ですが、「時雨」という季語が本来もっている寂寥感も内包しているわけですから、そこが難しいさじ加減です。

そういう意味で、「ステッキ」「銀座」「初時雨」の三つの言葉がほどよい距離で構成されている一句。「ステッキを銀座に求め」という行為や地名によって、ロマンスグレーの人物が浮かんできます。古き良き時代の日本の紳士には「銀座」がいかにも似合います。

半過去で語るセーヌの初時雨　野純

「半過去」とは、フランス語の文法用語。【過去のある時点で継続している状態】を指します。「初時雨って、半過去に似合ってませんか」と語る野純さんですが、まさにおっしゃる通りです。

「半過去で語る」過去とは、作者にとって過去に成り得ていない過去ではないかと思います。しかも場所が巴里の「セーヌ」だというドラマチックな世界に「初時雨」は美しいひかりを添えます。

スクリューの鈍い金色初時雨　松本だりあ

どんな「スクリュー」を思い浮かべるかで作品の評価はずいぶん変わってきそうですが、私が想像したのは新造船のタンカーがまだドックに入っているところです。

巨大な「スクリュー」の「鈍い金色」を見上げていると、光を撒き散らすように「初時雨」が走ります。なんと美しい造形だろう、色だろうと見上げる人物にとって、「初時雨」は完成を祝う金色のシャンパンにも似てみえるのではないでしょうか。「初時雨」からこういう味わいの句もできるのかと、勉強させてもらった一句でした。

初時雨揺るるなゆるるな蔓橋　お手玉

もしこの句の季語が「時雨」だと中七「揺るるなゆるるな」の台詞はただただ悲しげなつぶやきになります。が、「初」の一字が冠されるだけ「揺るるなゆるるな」と言いながら「蔓橋」を渡っていく心楽しさが生まれてきます。

「蔓橋」の半ばで、サッと雨が降ってきたけれど、いきなり走り出すわけにもいかず。大丈夫、「初時雨」だからすぐに止むわよ、と声を掛け合いながら、恐る恐る渡っていく「蔓橋」でしょう。

共にゐてさみしき獣初しぐれ　とおと

こういう感慨もあるのか……と惹かれました。「共にゐてさみしき獣」とは何でしょうか。動物園で眺めている檻の中のライオンでしょうか、犀でしょうか。「共にゐて」を強く読めば、自宅に飼う犬や猫を「獣」と認識した淋しさかもしれません。まさか「共に」暮らしている夫……とまで読むのは深読みか。切なさ倍増だよな（苦笑）。

「共にゐてさみしき獣」にとって、作者もまた「さみしき獣」であるという自己認識。「初しぐれ」が慰めるように光ります。

初時雨ほらまたすぐに時計見る　猫ふぐ

ははは！　こうきたか、猫ふぐさん。「ほらまたすぐに時計見る」という台詞から、どんな人物を思い描くか、読者は自由に想像を膨らませます。心が離れ始めている彼とのデート、仕事から心を解放するためにやってきた休暇なのについつい「時計」をみてしまう夫、家族の元へ帰る時間が気になる不倫相手等々、この一句で五夜連続ドラマが書けそうですよ。五夜とも冒頭「初時雨」が降り出す場面から始まるドラマね。

第41回　2013年10月31日週の兼題

枯葎（かれむぐら）

天

枯むぐら我等は笑ひつつ亡ぶ　くろやぎ

「枯」という一字があるのにどこか温かみを感じさせる季語「枯葎」の不思議は、やはり「あたゝかな雨がふるなり枯葎」の力かもしれないなあと再確認した今週でしたが、いつまでも正岡子規のこの一句に引きずられているだけでは、私たち不甲斐ないですよね（笑）。子規の句の世界を裏切りつつ、さらに季語「枯葎」を掘り下げてゆく作品を私たちは産みだして行かねばなりません。そのヒントとなりそうな一句を、今週の「天」に推します。

「枯むぐら」と季語を提示したあとの「我等は笑ひつつ亡ぶ」というフレーズのなんと怖ろしい事実でしょう。「むぐら」がやがて枯れてゆくように、私たちも皆やがて死んでいきます。個体として「笑ひつつ亡ぶ」のは抗えない事実ですが、ひょっとすると「我等」という人類がいつか「笑ひつつ亡ぶ」日が来るかもしれません。

一句を読み下したときの不穏な心持ちは、「枯むぐら」の蔓に引っかかっている幾万の顔を想像させます。「枯むぐら」の奥にある「我等」の顔の一つ一つが笑っている。なんと怖ろしい一句であることかと鳥肌が立ちます。

子規句の「枯むぐら」に降る「あたゝかな雨」は、次なる再生を促し約束する雨です。「我等は笑ひつつ亡ぶ」を個体の死と読めば、子へと繋いでいく命のイメージを掬いとることもできます。が、平均寿命を八十年と仮定すれば、私たちは八十年をかけてゆっくりと死んでいく者たちです。「我等は笑ひつつ亡ぶ」という詩語が宣言する真実を、季語「枯むぐら」が優しく怖ろしく突きつけているようでもあります。

地

きんいろはかなしい色ね枯葎　すな恵

「天」の句を味わった後で、この句を読むと「きんいろはかなしい色ね」という言葉の明るい切なさに癒やされます。「きんいろ」とは一面の「枯葎」にそそぐ太陽でしょう。そして「枯」という状態が放つ色でもあるでしょう。「かなしい色ね」という呟きのあとに「枯葎」は温かな存在として、読み手の心を包み込みます。

あの鳥もあの鳥も枯葎へと　吾平

なぜ「あの鳥もあの鳥も」羽ばたいてはあの「枯葎へ」降りていくんだろう。小さな観察眼から生まれた一句の表現は確かです。「枯葎」の中に塒があるに違いないと思えば、当たり前の光景となりますが、そう結論づける前の心がキャッチした新鮮な光景です。

枯葎より少年が次々と　じろ

なんてったって映像が面白いじゃありませんか！ 俳句でもヒネろうと「枯葎」を眺めていたら「少年」が一人、「枯葎」をかき分けて出てきた……と思ったら、「少年が次々と」続いて出てくるという、驚きと謎と愉快。「枯葎」という季語で、こんなに生き生きした作品が作れるんだ！と感嘆した一句です。

枯葎まだ少年のボールたち　ミル

「枯葎」の中に飛び込んで見失った「ボール」という発想の句、沢山たくさん届きました。その発想のラインでたった一句「地」に推したのがこれです。

「まだ少年のボールたち」とはどういう意味か。草野球をしていた少年たちが、その「ボール」を探しているうちは「まだ少年のボールたち」なのですね。彼らが「ボール」を探すことを諦めて去ったとたん、そこにある「ボールたち」は「少年のボールたち」では無くなってしまうという詩的事実の把握。

勿論、季語は「夏草や」でも成立するのですが、「枯葎」によって「ボールたち」という擬人化に悲哀が生まれてくるのは確かです。

枯葎給水塔のそびえ立つ　富士山

「枯葎」は雑草一般を指していると考えてよいのですが、本来の「葎」は蔓性の植物でしたね。「給水塔のそびえ立つ」という措辞は、何かに這い上がっていく本来の「枯葎」の姿をしっかりと見せてくれます。しかもただの鉄塔ではなく「給水塔」に這い上ったまま枯れている「葎」は、水を求めて生きるものの姿を象徴しているようでもあります。

枯葎風に酸味の残りたる　ハラミータ

「枯葎」に対して「風」を配する句も沢山届きました。「枯葎」だけでなく「枯」の現場に「風」は付きものですね。それらの中で異彩を放っていたのがこの句です。

「風」の中に「酸味」を嗅ぎ取る、いや味わい分ける感覚に強く惹かれます。「枯葎」の「風」は、作者の心理的な「酸味」となって吹き渡っているのでしょうか。

枯葎の家にて夢を紡ぎ居る　空

まるで安部公房著『砂の女』の「枯葎」版のような「家」だなあと、興味を惹かれました。枯れきった「葎」でできた「家」には、女が一人住んでいて、古い糸車をカラカラ回しながら枯れた「夢」を紡いでいるのでしょうか。安らかなような怖ろしいような虚の「家」を覗き見せてくれた作品です。

あの先が事件の家よ枯葎　軌一

同じ「家」でも、こちらは現実の家。かつては噂の的になった「事件の家」は、今、住む人もなく「枯葎」に覆われているのです。「あの先が」という上五が述べる方向と距離、「事件の家よ」という噂話のような中七の語りが、下五「枯葎」に収斂していきます。

カピカピの平凡パンチ枯葎　天宮風牙

読んだとたんに笑ってしまいました！「平凡パンチ」という誌名が懐かしすぎますが、確かに草むらに捨てられたこんな雑誌見たことありますよね。しかも雨風に晒されて「カピカピ」になっているという擬態語の質感が、なんともリアル。季語「枯葎」と「平凡パンチ」という固有名詞の出会いの妙にも爆笑です。

第42回　2013年11月7日週の兼題

蓮根掘る（はすねほる）

天

蓮根掘る水蒼穹へ試し撃つ　田中憂馬

「蓮根掘る」作業の大きな特色となっているのが、ホースの水圧で泥を動かす「水」の存在です。ゴム長、ゴム手袋で全身を鎧い、蓮田に降り立ち、作業用のホースを手にした男が、まずはその「水」を頭上の「蒼穹＝青空」へ放った、という場面。「蓮根掘る」という作業の性質上、どうしても視線が下に行きがちなのですが、そこを裏切ってくれてるのも小気味よいですね。

さらにこの句には動詞と複合動詞が一つずつ入っていて「掘る～試し撃つ」だけで7音を占めているので、他の言葉とのバランスの取り方が難しいのですが、「水」「蒼穹へ」という二つの要素が良い位置に配置され、鮮やかな効果を発揮しています。

地

蓮根掘るエンジン音となにか鳥　ぐわ

「エンジン音」とは、ホースから水を押し出すためのポンプでしょうか。「蓮根」を積み上げた田舟を引き寄せるための装置の機械音でしょうか。「蓮根掘るエンジン音」に対して「なにか鳥」という、一見無造作に投げ出したような表現によって、季語の現場のリアリティーが表出します。できそうで出来ない、肩の力を抜いたベテランの味ですねえ！

ねこそぎてふ痛快蓮根ゆみなりに　野風

「蓮根掘る」という季語をアレンジしての一句。「ねこそぎてふ痛快」だけだと、大根とか山芋だとか他にも当てはまってくる季語は出てきますが、後半の「蓮根ゆみなりに」という措辞が巧いですね。季語が動く動かないではなく、「蓮根」という存在を鷲掴みに見せてくれた作品です。

抜けば沈む抜けば沈むと蓮根掘る　みちる

「抜けば沈む」のリフレインだけで「蓮根掘る」という季語を表現しようという発想の愉快。それがそのまま「蓮根掘る」作業のリアルな描写になってるところがニクイですね。使われている自立語は「抜く」「沈む」「掘る」という動詞三つと「蓮根」という名詞。技あり！の一句であります。

蓮掘ればぐいと河童が引き戻す　二重丸

レンコンを頂こうと蓮池に入ったものの、思った以上の重量感でなかなか抜けるものではない。抜けかけたかと思うと泥の重力でまた「ぐい」と引き戻されてしまう。この感触を「ぐいと河童が」引き戻しているのだと言い張ってみたら、こんな句になった！というところでしょうか～（笑）。日本昔話みたいな味わいの一句であります。

蓮根の寝ているうちに掘ってやれ　ドクトルバンブー

これも日本昔話だなあ～。「蓮根」が「寝ているうち」ならば案外簡単に掘れるんだが、何人もが蓮田に入って泥をかき回し始めると、「蓮根」も目を覚まして根茎に力を入れ始める。早朝の「蓮根の寝ているうち」に静かに掘ってやれよ、という村の長老の言葉みたいだよね。でも、こういう言葉は案外、その農作業の大事なコツを伝える知恵だったりもするんじゃないかなあ～。

掘れども掘れども痩せた蓮根ばかりなる　とおと

片手に水の噴き出るホースを握り片手で泥の中を探りつつ、こんなに苦労しながら作業を続けているのに、さっきから手に触れるのは「痩せた蓮根」ばかりではないか！という愚痴が、そのまま一句になった可笑しみ。「掘れども掘れども」のリフレイン、「ばかりなる」のあとの余白の効果など、細かいところにも気遣いのある作品です。

折れ口のひやりと白き蓮根掘る　カリメロ

根菜類を掘り出していてうっかり折ってしまうのはよくあることですが、「折れ口のひやりと白き」という措辞が、まさに「蓮根」ですね！ 泥にまみれた「蓮根」だからこその「白」であり、冷たい泥にまみれての作業だからこその「ひやりと白き」の実感でありましょう。

畦に鍬刺して上がりぬ蓮根掘り　杉本とらを

泥の深い蓮田から上がる時の動作を、「畦に鍬刺して」と表現した点、実によく観察していますし、言葉の選び方にブレがありません。さらに一句のカメラワークも丁寧。「畦」を映し、そこに刺し打たれる「鍬」の動きがあり、それにすがるようにして「上が」ってくる人物の姿があり、下五で「蓮根掘る」田の全景が映り込んでくる。俳句が「言葉の映像」であることを、しっかりとアピールしてくれる一句でした。

有能な社員の蓮根掘る休暇　江

実家が蓮根栽培をやってると読んでもいいのですが、「有能な社員」とわざわざことわっている面白さを考えれば、自己研修的な「休暇」をとって「蓮掘る」体験をしている「有能」なんだけど変わり者の「社員」だ！と読みたいなあ。

アイツ、今度の「休暇」で蓮根掘ってきたんだって。ふーん、あいかわらず変わってるよな。「有能」なヤツが考えることって、オレたちには分かんないよな（苦笑）……って感じ。ははは！

第43回　2013年11月14日週の兼題

霜柱（しもばしら）

天

子どもらの空へと予鈴霜柱　七七子

一句のどこにも「踏む」「壊す」等の動作を表す言葉を使ってないのに、「子どもら」が学校に来るまでの間にやっていたであろう行動や歓声やおしゃべりまでもを生き生きと想像させる、その表現力のなんと見事なことでしょう！

「子どもらの空」と語ることで、その「空」の下にいる「子どもら」が動き出しますし、「へ」という助詞の効果で「予鈴」は空に向かって響きわたります。勿論「予鈴」の一語が、学校という場面やこれから授業が始まるのだなという状況をさりげなく伝えることは言うまでもなく、言葉の経済効率も抜群です。最後に「霜柱」という季語が目に飛び込んできた瞬間、冬の朝の冷たい空気、痛いような青空、その空に響く予鈴の澄んだ音「あ、あと五分だ！」と走り出す子どもたちの声が、一気に立ち上がってきます。

子どもたちがいなくなった校庭や校門の辺りには、踏まれて壊れた「霜柱」もあれば、まだ踏まれていない「霜柱」がびっしりと広がっているところもあるのでしょう。やがて、国語の本を読む声や音楽室の歌声が聞こえてくる頃には、「霜柱」の小さなひかりは冬の冷たい青空に吸われるように溶け始めるのです。

地

霜柱の農大を突っ切れば近い　初蒸気

こう言われてみると「農大」という言葉の持つだだっ広くて、土というものに親しいイメージが「霜柱」という季語にぴったりだなあと納得します。しかも、この「農大」を「突っ切れば」目的地に「近い」という状況や呟きも実にリアル。朝の「霜柱」をシャキシャキ踏みながら急ぐ作者の姿も見えてきます。

霜柱立ちてすがやか地鎮祭　うに子

「霜柱立ちて」の後の「すがやか」という言葉が実に美しい一句。「霜柱」のさまや、頭上の冬晴の空や、凛とした朝の冷たさを「すがやか」と言っているのだろうと思った瞬間に、下五「地鎮祭」という言葉が出現します。紅白の幕、準備を始める人たちの動きや声、そんな場面が一気に立ち上がり、このハレの日の行事もまた「すがやかに」執り行われるに違いないと、気持ちのよい想像が広がる作品です。

霜柱みとめてはいるにじり口　いっちょう

「にじり口」ですから、茶室に入る小さな入り口ですね。腰をかがめ、頭を低くして入るその視線の端に、まだ残っている「霜柱」がちらりと映ったのでしょう。この「みとめてはいる」という動作の描写が実に巧いですね。「霜柱」をみとめる視線の低さが、「にじり口」という場所ならではのリアリティにも繋がります。

飛び込み営業噛みつく霜柱　ドクトルバンブー

「飛び込み営業」という言葉の持つ勢いや出たとこ勝負だ！という捨て身の印象に対して、後半「噛みつく霜柱」という現実をぶつけてくる対句表現。「噛みつく」はまさに今、ザックザックと「霜柱」を踏みながら、飛び込もうとしている場面でしょう。さらにこの一語は、営業は上手くいかなかったのではないか……という首尾まで想像させます。そこもまた計算済みの作者なのでしょう。

霜柱踏んで労働基準局　ちびつぶぶどう

「霜柱踏んで」はありきたりな発想なのですが、そこからどう展開するかによって、作品は様々なオリジナリティーを獲得していきます。後半「労働基準局」と場所を取り合わせただけの作品ですが、この場所に出入りする人たちのさまざまな事情、歩幅、表情を想像させるのが面白いですね。厚生労働省内のそれではなく、都道府県に設置されている労働局を思わせるのが「霜柱」という季語の力かとも思います。

霜柱跨ぎ離るる寡婦の家　蘭丸

うわーなんか凄いドラマを内蔵してるな、この一句は。「霜柱」を「跨ぎ」でその足下を捉え、「離るる」で人の姿へと移り、さらにこの人物がどこから出てきたかを「寡婦の家」と述べる、語順のニクさ！この「寡婦」と夜を過ごしたのか、早朝の訳あり訪問であったか、いやはや脚本が五本書けるような作品であります。

「じゅうりん」てどう書くのだか霜柱　カリメロ

自分が喜んでガシガシ「霜柱」を踏んでいるのでしょう。そして、ふとこういう感じを「じゅうりん」って言うのか……なんて思うのだけれど、その難しい文字は全く思い浮かんでこない。「〜どう書くんだか」という投げ出したような語り口にリアリティとユーモアのある一句です。

霜柱ワシコフの足十六文　猫ふぐ

西東三鬼に「露人ワシコフ叫びて石榴打ち落とす」という句があります。この句に出てくる「ワシコフ」を想像しての一句ではないかと読みました。叫びて石榴を打ち落とすような「ワシコフ」氏の足はきっと「十六文」ほどもあるに違いない、という発想が愉快。しかもこの数詞は、ジャイアント馬場の十六文キックを想像させるので、尚更インパクトがあり、「霜柱」の句としては痛快な怪作となりました。

霜柱巨大インコの居る花屋　クズウジュンイチ

最後にこの句について語りたいと思いつつ、悩んでおります。なぜこの作品に魅力を感じるのか。端的に言えば、「霜柱」「巨大インコ」「花屋」という三つの言葉の出会いのインパクトということなのですが、そこを分かり易く解説しようとして、悩んでおるわけです。

「霜柱」の白、「巨大インコ」の極彩色、さらに色彩の溢れる「花屋」、それぞれの言葉が持つ色とイメージが17音の中で、ぶつかり言葉の火花を飛ばしている、としか言いようがないのです。言葉と言葉が取り合わせられた時に発する言葉の火花こそが、詩の正体に違いないのですが、そこを解明したいという欲求が沸々。

今、ネットへの更新作業を急ぐスタッフから原稿催促の電話。うーむ……この句については、何かの機会に再度解釈鑑賞に挑みたいと思います。乞うご期待。

第44回　2013年11月21日週の兼題

室咲（むろざき）

天

シャガールの年譜の長し室の花　樫の木

季語「室の花」には、濃厚な薫り、艶やかな色彩、人工的なイメージが内蔵されているわけですが、その季語

と「シャガール」という画家の名の取り合わせに惹かれました。シャガールの作風の特徴は、多彩にして微妙な色合い、浮遊する恋人たちや鳥や馬、美しい非現実、香り立ってくるような物語性。それらのイメージは季語「室の花」に似合いすぎるぐらい似合っています。

この句を単純な取り合わせに終わらせてないのが中七の展開です。「年譜の長し」は、単にシャガールが長生きをして業績も多いということを述べているだけではなく、「シャガールの年譜」が掲示されている場も想像させます。美術館や絵画展が浮かんでくれば、そこに飾られているに違いない花々=「室の花」も見えてきます。

待ちに待ったシャガール展。「室の花」が飾られた会場入り口は、色彩と薫りにあふれています。チケットを渡して会場に入ると、最初に掲示されているのが「シャガール」という画家の「年譜」。なんと長い年譜であることよと見上げながらも、丁寧に読んでいく作者なのでしょう。

「年譜」を読み終わった目が、次に捉えるのは「シャガール」独特の色彩。その絵の中から溢れてきたかのように、会場に飾られた沢山の「室の花」は薫り立っています。

地

室の花ミシンの音が日におどる
あつちやん

大事な梅の盆栽でしょうか。戸外の寒さに負けないように、縁側に並べているのかもしれません。同じ縁側の隅が「ミシン」置き場。カタカタと「ミシン」を踏む「音」が聞こえ、冬の「日」ざしに満ちた硝子戸もカタカタ鳴りそうです。「ミシンの音が日におどる」という表現が、昭和の懐かしい音色のように、我が耳に蘇ります。

加湿器に少し霞める室の花
登美子

「加湿器」というものが一般家庭に置かれるようになったのは、いつ頃からでしょうか。「加湿器」から噴き出すこまやかな霧、かすかな音、傍らに置かれた「室の花」、かすかに揺れる花びら。そんな映像が表現された一句です。

中七「少し」の3音が、少し惜しいかな。ここを徹底して描写すると、さらにレベルアップしそうな可能性を残しています。

的を抜くダーツの音や室の花
みなと

「ダーツ」の一語だけで、パブのような場所が思い浮かびます。「〜音や」の詠嘆によって、まさに今「的」のど真ん中に当たった「ダーツ」の音を響かせる表現、巧いですね。その音の向こうには、人々のさざめき、拍手、音楽、グラスの触れあう音も聞こえてきます。季語「室の花」は、様々な音の中で、その色彩と芳香を放っているのでしょう。

室の花奥より客の埋まりきて
大塚迷路

こちらは小劇場でのお芝居か、小さなホールのコンサートか。「室の花」と置かれた上五に続く「奥より客の埋まりきて」は、そんな場所を思わせます。さらに、「奥より」という描写で「客」の動きや状態が分かりますし、「埋まりきて」によって現在進行形の状況も表現されています。下五の切れのない型が、一句の内容に見合っていることも言うまでもありません。ベテランの手堅い表現、学びたいものです。

室咲の不穏に並ぶショーケース
七七子

一句において「不穏に」という言葉が成功するケースはそんなに多くないと思います。では、なぜこの句が成功の部類に入るかというと、「不穏」の一語が心理や状況を述べるのではなく、映像を想像させる言葉として使われているからでしょう。

さらに、咲くはずのない季節に咲かせられている「室咲」が「ショーケース」いっぱいに並んでいる様子は、作者の心持ちをいささか「不穏」にさせているに違いないと、読者はちゃんと読み取ってくれるはずです。

室咲や首へ貼り付くフェイクファー
カリメロ

「室咲や」という季語+「や」の詠嘆から、画面が切り替わって「首」がニョキリとでてきます。その「首」に張り付く「フェイクファー」はいかにも偽物っぽい肌触り。「首に」ではなく「首へ」ですから、静電気っぽい感じで何度でもしつこく張り付いてくるのかなと読みました。安っぽい華やかさを持つ「フェイクファー」は、人工的なイメージを持つ「室咲」という季語に似合いますね。

消灯のロビーに吾と室の花
てんきゅう

「消灯のロビー」はマンションの一階？それとも、ホテルのロビー？ 劇場かもしれませんね。「ロビー」に華やかに飾られた「室の花」は、「消灯」した後の薄暗がりの中でさらに匂い立つのでしょう。「吾と室の花」のシルエットが、その薫りの中に見えてきます。

室の花夜の秘書室を知っている
奈津

「秘書室」に飾られている「室の花」は頂き物の花束を飾ったのでしょうか。それとも、花屋に注文し調達する、日々の「室の花」でしょうか。一読、なぜかカサブランカを想像しました。人間に近い意識をもっている花のような気がするからかもしれません。「室の花」は「夜の秘書室」での出来事も、その後の静寂の深さも知っているのでしょう。下五「知っている」という呟きが、不穏に響く一句です。

水つぼく腐つて室咲きの仕舞ひ
初蒸気

人工的に咲かせた「室咲」の終焉を、冷静にして皮肉な目で見つめる一句。どんな花でも「腐つて〜仕舞ひ」になるのは当たり前ですが、「水つぼく」という捉え方がいかにも嫌みで、そこに季語「室咲」の本意のある側面が表現されています。

下五「仕舞ひ」と突き放したかのような名詞止めによって、溶けてゆく茎、色褪せていく花びら、濁っていく芳香などが、読者の脳内にどんよりと再現されていきます。

室咲がくたばりやがる歌舞伎町
蘭丸

こんな「室咲」もあるに違いないと、思わずニヤリとしてしまった一句。今週の「天」の句「シャガール×室の花」とは違ったやり方で、この季語の本意の、ある部分を表現しました。

「室咲×歌舞伎町」の取り合わせを、リアルに見せてくれるのが中七「くたばりやがる」という悪態。この街の喧騒や嬌声やネオンや暗がりが、街に溢れる「室咲」を萎えさせていくかのような味わいの作品です。

第45回　2013年11月28日週の兼題

枯野（かれの）

天

鉄筆で描く枯野のすさまじき
麦太朗

「鉄筆で描く」とは銅版画でしょうか。蕭条たる「枯野」の草の一本一本、風にゆれる枯草の表情、雲の裂け目から射す光の明暗を、ニードルと呼ばれる「鉄筆」は彫りだしていきます。銅板に刻まれる微細な傷がやがて銅版画の線描となっていくそのさまを、作者は「すさまじき」と表現しました。と、同時にその傷によって表現される「枯野」という存在もまた「すさまじき」ものであるよと詠嘆しているのでしょう。銅版画として刷り出される黒白の世界もまた、「枯野」という存在を表現する色彩であります。

「すさまじ」も季語ですから、季重なりを指摘する向きはあるかと思いますが、この句の場合は「枯野」という主たる季語の修飾語として機能しつつ、補助的な季語として効果を発揮していると考えてよいでしょう。

また、銅版画で描かれた「枯野」は季語として機能していないと断ずる考え方もあるかとは思いますが、この「すさまじき」銅版画を描いている人物の眼の奥には、「枯野」という季語が生々しく息づいているに違い有りません。そ

の手応えこそが、季語を感知させてくれるのではないかと考える次第です。

地

富士といふ突起枯野の地平線　ポメロ親父

「富士といふ」あまりにも巨大な土塊を、いきなり「突起」と表現する一句に引き込まれました。遥か上空から、小さな「突起」のごとき「富士」を捉えたかと思うと、一句の映像はその「突起」に向かって一気に急降下していきます。真っ白な雪の頂から、ゴツゴツとした茶色の地表へと舐めるように画像は動いていき、やがては裾野たる「枯野」の「地平線」を目指して疾走していく。そんなCG映像が脳内を駆け抜けました。

巨船めく枯野の縁の工場群　甘えび

「巨船めく枯野」とは何？と思ったとたん、「〜の縁の工場群」という措辞が目に飛び込んできます。そして、脳内には作者が見たに違いない映像がありありと再生されていきます。枯れ色の野の果ての灰色の「巨船」は、今にも出航せんばかりに黙々と煙をあげているのでしょう。

枯野端せり上がったる墓三基　花屋

「枯野端」という表現がやや乱暴かとは思いますが、「枯野」の「端」が「せり上がっ」ているような場所にある「墓三基」という光景に、ゾクリとします。開拓者の墓か、石もて追われた一族の墓か、はたまた大陸の馬賊の墓か。「枯野」という季語が暗示する物語は、さまざまな想像を呼び起こしていきます。

臍帯の小川の在りて枯野かな　クズウジュンイチ

「臍帯の小川」とは何でしょうか？その色や形が「臍帯」を連想させる「小川」でしょうか。それとも、次なる春へとつながる命のイメージでしょうか。萩柔たる「枯野」の中を流れる「小川」の存在をこんな比喩で表現できるとは、新鮮な驚きでした。兼題「霜柱」の週の「霜柱巨大インコの居る花屋」にも驚かされましたが、この作家の個性、注目していきたいものです。

枯野行く我をうかがう目玉あり　睡花

季語「枯野」に生命のイメージを受け止める作家もいれば、油断のならぬ強迫神経症的イメージを持つ作家もいるのですねえ。いやはや面白い！

二面に枯れきった野のどこかで、「我」をうかがう「目玉」があるという断定に詩の力があります。「あり」と言い切った下五の後に、読者一人一人が自分を見つめる「目玉」を意識し始める、そこがこの句の怖さでありましょう。

何処までが私何処からが枯野　めいおう星

さらにこの作家は「枯野」と同化しようとしています。かつて「枯野」に佇んでいた自分も、同じ思いを味わったことがあるかのような気持ちにさせるのが、この句の魅力。「花野」や「夏野」ではない、「枯野」の光と風が「私」を透きとおらせていくのでしょうか。

「人ひとり気化するとしたらその体積は一体どのくらいの広がりなのだろう……なんていう夢想」という作者のコメントにも心惹かれました。

笛吹いて枯野になったつもりかよ　とおと

同化という発想の中にも、こんな変化球があるんだなあ。「枯野になったつもりかよ」という揶揄するかのような台詞もさることながら、「笛吹いて」という措辞が一句の世界を広げます。

そんな「笛」吹いたからってさ、「枯野」になれるわけじゃないんだよ、と言い募る作者は、「笛」「枯野」の二語にどんな暗喩をこめているのでしょうか。

枯野など何度渡つて来たことか　今野浮儚

暗喩という意味では、この句の「枯野」もさまざまな比喩を暗示して、読みを押し広げます。「枯野など」という見下した表現、「何度渡って来たことか」という捨て鉢な台詞。精神世界にひろがる荒涼たる「枯野」が、我が胸にも押し寄せてくるかのようです。

「枯野」を渡り歩くスナフキンを想像してしまったのは、個人的な深読みですかね（笑）。

滑稽なことに枯野はそこに在る　猫ふぐ

「枯野」の目玉から逃げだそうとした。私を同化させてしまう「枯野」に抗おうともした。「枯野」に同化するために笛を吹いてもみた。そんな「枯野」を、俺はどれだけ渡り続けてきたか。……が、気づいてみれば「滑稽なことに枯野はそこに在る」。逃げても逃げても追っても追っても捉まえられなかった「枯野」を、俺の目玉はこの歳になってやっと感知できるようになった……か。

かれのさんスープをどうぞさむいでしょ　ひろしげ6さい

大人たちの「枯野」に込める暗喩との取っ組み合いが続いた今週。最後の最後に、こんな一句はいかがでしょう。なんとも温かくて優しくて、ああ、実は「枯野」ってこんな存在だったのかもしれない、と心が癒やされます。読者である私自身が「スープをどうぞさむいでしょ」と労ってもらっているかのような、この手にスープカップを持たせてもらったような、ほんわりとした嬉しさ。

こんな句を前に「かれの」と「さむい」は季重なりだ、なんて指摘に耳を貸す必要はないでしょう。小さな作家の小さな言葉に癒やされる十二月です。

第46回　2013年12月5日週の兼題

橙（だいだい）

天

橙あまねく清貧に甘んず　もね

「橙」という季語、曲者でしたねえ。秋の季語として載っている歳時記もありますが、本サイトの底本としている講談社版『新日本大歳時記』では冬の季語として採録されています。そして、大きな落とし穴となったのが、「橙飾る」が新年の季語であるという事実。「橙＝代々」という駄洒落のような目出度さが、この果実を正月のお飾りとして定着させたため、「橙飾る」という季語も生まれたのでしょう。

さあ、そんなハードルの高かった今週は、この破調の一句を「天」に推させていただきましょう。

「あまねく」とは、形容詞「あまねし」の連用形から派生した副詞。【もれなくすべてに及んでいるさま。広く。一般に。】というのが辞書的意味です。さらに「清貧」とは【私欲をすてて行いが正しいために、貧しく生活が質素であること】ですから、おおよその意味は理解できますね。

直訳をすれば、「橙」というものはどれもこれも「清貧」に甘んじている（ような果実であるよ）となるでしょうか。が、この句の魅力は、単に「橙」のことを「清貧」であると言ってのけるだけではなく、作者自身の生きざまをも匂わせている点でしょう。食用には適さず橙酢として使われることが多かった「橙」の清々しい酸味や地味なんだけれども地に足を付けて生きているような印象は、そのまま作者の佇まいとして想像されます。

五七五を裏切った独特のリズムは、数えてみればちゃんと17音。美しい漢詩の一節のような調べも一句の味わいを引き立てます。「橙」という季語の本質をこんな形で表現し得た発想を、心から讃えたい作品です。

地

橙や神の名知らぬ御札棄つ　初蒸気

初詣に行って新しい「御札」を戴く折に、昨年の古い「御札」を神社に託して焼いてもらったりしますね。「御札棄つ」はそういう場面ではないかと読みました。「神の名知らぬ御札」という措辞の微量の皮肉（あるいは自嘲）が、ピリリと利いている一句。

「橙飾る」と言わずして、お飾りの「橙」を思わせるあたりのテクニックもさすがです。「橙」というと鏡餅に飾ることしか思いつかなかったよ〜という嘆きの声

も多かった今週ですが、その発想上においても、このような句が工夫できるのだなと感心しました。

神鏡に映り込みたる橙よ　吾平

こちらの一句も同じような発想から生まれたのではないかと推測します。「神鏡」の一語の効果、巧いですね。

神社の本殿の奥の奥。拝殿に並べられた供物の中にある「橙」が、奉納してある「神鏡」に映り込んでいるというのです。「神鏡」は現代の鏡とは違い、鏡面がぼんやりしてますが、そこに映り込んでいる「橙」の黄色がありありと想像できます。「橙＝代々」の目出度さが、拝殿の供物棚を彩ります。

橙の刺のつよさよ鬼子母神　ゆらり

「橙＝代々」のイメージから、母子を連想した句も沢山ありましたが、そこをさらに一ひねりすれば「鬼子母神」という言葉も浮かんでくるのだなあと納得。

「橙」の特徴の一つである「刺」に着目した句は少なかったですが、「刺のつよさよ」という詠嘆が、下五「鬼子母神」の猛々しさと響き合う実に巧い取り合わせでした。

橙よ産んでみたしや一人でも　松蔭　眞由美

決して巧い語り口ではありませんが、「橙＝代々」という掛詞に対する冷ややかな思いが率直に語られた一句にも、心が動きました。「橙よ」「産んでみたしや」という強い詠嘆が重ねられていますが、「一人でも」と添えられた下五が際どいバランスを保って、一句の調べを成立させています。

句に添えられていた「結局、子供を産むことは出来なかった。500年以上続いた私の家も、これにて終了である」という作者のコメントにも胸を衝かれました。

橙も男も座して腐りけり　蘭丸

「橙」だけでなく、果実はなんでも「座して腐りけり」なのですが、地味だけれど酸っぱいけれどつしりと在る「橙」に「男」という存在を重ねることで、こんな取り合わせも成立するのかと納得。

「橙」も「男」も「座して」いるだけではいかんのだ！という自身に対する叱咤激励か、他人に対する苛立ちか。下五「～けり」の詠嘆がずっしりと読み手の心に伝わります。

橙をかかへその僧海より来し　緑の手

さまざまな産物は海を越えて日本に伝わってきましたが、その伝え手として布教の「僧」も一役買った時代がありました。伝えられたものは「橙」だけではありませんから、季語が動くと言われれば、そりゃそうなのですが、墨染めの「僧」が「かかへ」ている物として「橙」の黄色や大きさは印象的。下五「海より来し」の1音の字余りも、ゆったりとした口調として効果を発揮しています。

三寸の橙子規を慰める　小市

嗚呼、この病床にも「橙」があったなあと感慨を深くしました。以下、正岡子規の『墨汁一滴』の冒頭です。

【病める枕辺に巻紙状袋など入れたる箱あり、その上に寒暖計を置けり。その寒暖計に小き輪飾をくくりつけたるは病中いささか新年をことほぐの心ながら歯朶の枝の左右にひろごりたるさまもいとめでたし。その下に橙を置き橙に並びてそれと同じ大きさほどの地球儀を据ゑたり。】

子規は、この地球儀がお気に入りで、赤く塗られた日本の未来、二十世紀末の日本に思いを馳せ、【とにかくに状袋箱の上に並べられたる寒暖計と橙と地球儀と、これ我が病室の蓬莱なり。】とこの日の日記を結んでおります。

三寸ほどの地球儀が子規の心を躍らせたように、同じぐらいの大きさの「橙」もまた彼の心を「慰め」たに違いありません。『墨汁一滴』の文章を踏まえた上でのこの一句、見事の一語です。

食べれんことないけどと橙売り　猫ぶぐ

ははは！確かにこういうこと言いながら「橙」売ってるおっちゃんおるやろな～と、リアルな納得。「食べれんことないけど」と言いつつ、橙酢の絞り方とかそれをどんな料理に使えとか教えてくれはるんやろな～と、その場の光景をあれこれ想像させてくれた一句。

六五六という破調ですが、全部でちゃんと17音になってるところも、作者の腕の見せ所であります。

だいだいをうまとこっそりとりかえる　ひろしげ6さい

うわー！なんや、この発想！「だいだい」と「うま」がこんな形で取り合わされるとは、実に愉快です。

わらしべ長者みたいに、「だいだい」を何かと交換しているうちに最後は「うま」を手に入れたと読んでもいいし、馬屋に二頭いた「うま」を、大きな「だいだい」と「こっそり」取り替えて、馬の持ち主を吃驚させる!?と読むのも楽しいなあ。

ひろしげ6さい、やりたい放題の面白さを発揮して、ただ今絶好調です♪

第47回　2013年12月12日週の兼題
仏の座（ほとけざ）

天

ほとけのざ口伝遠野につまびらか　野風

「口伝」とは、語り伝えること。「遠野」とは、柳田國男著『遠野物語』のもとになった町。「つまびらか」とは、くわしいさま。「口伝」というものは、あの「遠野」にて「つまびらか」に語られているよという句意をたどっていくと、作品世界がゆっくりと膨らんでくるかのような感触。ふーむ、こう来たかという新鮮な驚きと共に、心に飛び込んできた一句です。

「ほとけのざ」と呼ばれる植物は一つではないという季語の特徴もありますので、「遠野」であれば「ほとけのざ」についての「口伝」も「つまびらか」に残っているかもしれないよ、と解釈しても良いのだろうと思います。

が、個人的な好みからいうと、彼の地に残る民話の天狗や河童や座敷童子たちについての数々の「口伝」が「つまびらか」に語られる「遠野」という地の「ほとけのざ」がしきりに思われる新年だよ、という意訳を含んだ読みを展開したいと思います。「遠野」という地への思いを鑑賞の真ん中に据えることで、雪の下で地に這いつくばるように葉を広げ、やがて来る春を待つ「ほとけのざ」という植物がいかにもけなげに愛おしく思われます。雪の匂いと土の匂いと草の匂いが、一句からこぼれ落ちてくるかのような感覚を愛します。

新年の七草を祝うために探す「ほとけのざ」は、妖怪や死者や神が生き生きと存在する「遠野」の地の特別な植物として、集められます。七草を刻むためのこの地独特の唄もあるにちがいありません。「仏の座」と名づけられた植物と「遠野」という地名は、出会うべくして出会ったかのように、美しくも静かな言葉の火花を放っています。

地

鬼の子に角生える頃ホトケノザ　ちとせ

この句も『遠野物語』の中にいそうな「鬼の子」です。春の七草である「ホトケノザ」は、小鬼田平子（コオニタビラコ）と呼ばれる植物ですから、この名前もうまく使いこなしていますね。春がくれば「角」が生えて一人前になれる「鬼の子」なのかもしれません。

下五の季語を片仮名で書いた意図が少々掴みきれないところもあるのですが、楽しい発想に惹かれた作品です。

田の隅に祀れる岩や仏の座　ポメロ親父

「田の隅」に神として鎮座する「岩」があるのでしょう。棚田の中にドデンと場所を占めているこんな岩、見覚えがあります。「や」はすぐ上の言葉を詠嘆しますから、その「岩」を強調することで「祀れる」という動詞の光景をありと見せてくれます。張り巡らされた注連縄、お供えの御神酒、そして岩

の根方に「仏の座」がその葉を広げているのでしょう。

道端もまた修行の場仏の座　根子屋

何の「修行」でしょうか。巡礼かもしれないし、寒行の類いかもしれないし、人生という修行かもしれないし、俳句修行だって当てはまるかもしれません。「道端もまた修行の場」という行者めいた言葉に、新年の季語「仏の座」が見事に嵌まりました。

七日目に生まるる地球仏の座　緑風佳

イザナギ・イザナミの物語だと読んだのですが、日本列島ではなく「地球」とありますから、作者としては聖書の物語をイメージしているのかもしれません。「仏の座」という季語との取り合わせが、日本の神話を想像させる力を持っているので、そのラインでの推敲もあり!?かなとは思います。

が、ともあれ「仏の座」という季語に対して、このような発想を持てることを讃えたい作品です。

仏の座大和の国を発つ書簡　大塚迷路

歴史の世界に発想を飛ばした一句でしょうか。かつて都があった「大和の国」を発つ一通の「書簡」、と読ませていただきました。現代の日本を「大和の国」と表現したと読むよりは、歴史という背景を背負ったほうが、この季語は息づくように思います。新年の季語「仏の座」に対して、古い「書簡」の取り合わせが、付かず離れずの宜しさ。「国」の思いや願いを託した「書簡」は、一体どの国に届けられたのでしょうか。

仏の座粉となりたる人の骨　寒天

火葬場の光景と読んでも良いのですが、私は散骨の場を思いました。「粉となりたる人の骨」を野山に返すという行為に対し、「仏の座」は嵌まりすぎてはいるのですが、いやいやこれは植物の名前で、しかも新年の季語なのだと思えば、悼む心を受け止めてもらえそうで、素直に合掌できそうで、いやはやこういう発想もあったかと唸った一句です。

仏の座死んだら俺は犬になる　理酔

一読ギョッとしましたが、この偽悪的な呟きをもまた季語「仏の座」が受け止め得ることに驚きました。「犬になる」という輪廻転生の思いに対して、「仏の座」という季語はなんと懐の深いことか。地に葉を広げる「仏の座」が花をつける頃、「俺」なる人物はどんな思いでその黄色を眺めているのでしょうか。

仏の座うさぎも犬も家族なり　ミル

飼っている「うさぎ」も「犬」も「家族なり」という断定がいいなあ!

「犬」と取り合わせた投句は結構ありましたが、掲出句の断定には心が溢れています。家族である「うさぎ」には「仏の座」をむしってきて食べさせているのかもしれませんし、「犬」は散歩に行く度に、「仏の座」を嗅ぎ回っているのかもしれません。新年の季語「仏の座」の心が、そのまま下五の断定となったほほえましい一句です。

第48回　2013年12月19日週の兼題

竹馬（たけうま）

天

産まれたての子馬のやうな竹馬よ　神戸鳥取

季語「竹馬」とくれば、子どもが遊ぶ様子を描くか、郷愁の遊びとしてオトナの感慨にふけるか。そういう発想は想定内でしたが、こんな新鮮な比喩の句がでてくるとは思っていませんでした! しかもこの句、春の季語「子馬」を比喩として軽やかに使いこなしているのですから、大したものです。

表現の可能性として「産まれたての子馬のやうに竹馬は」とすることも考えられますが、こうなると「竹馬」は飛び跳ねるようにカッカッと走っている感じですね。なぜそのような印象を与えるかというと、「やうに」は助動詞「やうだ」の連用形ですから、下五「竹馬は」の後に「跳ねる」「走る」などの動詞が隠れていると考えられるからです。

それに対して掲出句「産まれたての子馬のやうな竹馬よ」の「やうな」は連体形ですから「竹馬」にそのままかかってきます。ですから句意のニュアンスとしては、匂い立つような青竹で出来た「竹馬」が今、出来上がったところで、これからこの「竹馬」で走り出すであろう子どもの様子などを想像している、という感じでしょう。父が我が子のために作ってやった「竹馬」を想像しました。

さあ、「竹馬」が完成したぞ!「産まれたての子馬」みたいな「竹馬」だぞ!「生まれたての子馬」がすぐには立てないように、我が子もすぐに「竹馬」には乗れないだろうけれど、この「竹馬」を自在に乗り回し、走り回る日もすぐにやって来るに違いないよ!

「父」という言葉を使って、「竹馬」を表現した句は沢山ありましたが、「父」という言葉を使わずして若い父の思いを伝えることができるのだなあと、一読清々しい気持ちになりました。

地

竹馬や春の足音とも思ふ　じろ

これも季重なりですが、実に軽やかですし、子どもたちが遊んでいる「竹馬」の音はまるで「春の足音」のようだよという句意に実感があります。「竹馬」が冬の季語であることを踏まえた上での断定に詩があり、さらに叙述として「〜とも思ふ」と柔らかな表現を選んでいる点も言葉の質量のバランスを考えた表現になっています。

母は子を竹馬の子は空を見る　七草

カメラワークが実に巧い!「母」という人物の視線の先に「子」がいて、さらに「竹馬の子」の視線の先に「空」が現れるという映像が生き生きと描かれています。特に、「母は子を」「竹馬の子は空を」というふうに助詞「を」で対象を示し、最後に「見る」という一語の動詞で受け止めたあたりが、巧さの秘密ですね。

竹馬や父にも次郎物語　やのたかこ

「にも」なんて助詞は下手な使い方をすれば散文的になるのですが、この使い方が巧い!「父にも次郎物語」という措辞だけで、この「父」なる人物の少年時代がありありと想像されます。

え?「次郎物語」を読んだことない人には分からない?……そりゃ、勿論ですね(笑)。でもこんな句に出会うと、どんな小説だろうかと興味が湧いてきませんか。読んだことなくても、何か不遇な少年時代を送ったに違いない「次郎」が想像されませんか。「竹馬」という季語は、そんな「次郎」の姿や思いを受け止める絶妙な季語。この句も「天」に推したかった一句です。

石蹴りの中に竹馬乱入す　不知火

愉快だなあ! こんな光景、あったに違いないと思わせる臨場感がいいなあ。「石蹴り」をしているのは女の子たち。「竹馬」で「乱入」するのは男の子。好きな女の子の気を惹きたくて、こんなことをするのが男の子の常套的手口でありますね(笑)。

竹馬やおかもちのカブより怒声　天宮風牙

おおー、これもありそうな光景をうまく映像にしましたね。たったこれだけの言葉で、「おかもち」の兄ちゃん、走り行く「カブ」の姿、その怒鳴り声までを活写しているのですから、大したものです。やっと歩けだした「竹馬」の様子もありありと想像できます。

駄菓子屋に竹馬のまま入りけり　山走子

昭和の頃の「駄菓子屋」ならば、こんな光景もあったでしょうね。「竹馬」がちょっとばかし巧くなったら、嬉しくて誇らしくて、ついつい「竹馬のまま」入っていくようなことをやってみたくなるのが、ガキってやつです(笑)。「〜のまま

入りにけり」という詠嘆も、昭和のノスタルジーに似合います。

竹馬やしっぺデコピン馬場チョップ　北大路南天

まずは、北大路南天さんのこんなコメントから。

『しっぺデコピン馬場チョップ』というのは、小学生当時にゲームで負けた時などの罰ゲームでやってたものです。そして、『馬場チョップ』はジャイアント馬場さんの必殺技〝脳天唐竹割り〟のことなのですが、平成生まれの子どもたちには、なんのことやらわからないでしょうね。」

いやはや、おっしゃる通りですね。「しっぺデコピン馬場チョップ」とここまで畳みかけられると、昭和の人間としては郷愁のてんこ盛りですワ（笑）。ここまで名詞を連ねるのも、一つのアイデア。「竹馬」がノスタルジックな季語として、「しっぺデコピン馬場チョップ」を率いていく感じが愉快です。

竹馬やまっくろくろすけ踏み飛ばせ　ちびつぶぶどう

現代の子どもたちは「まっくろくろすけ」のほうがなじみ深いか～（笑）。『となりのトトロ』に出てくる煤みたいな黒いヤツらが、「まっくろくろすけ」ですね。「竹馬」という季語の持つ郷愁を、あの映画にくっつけてくる発想が面白い！

下五の複合動詞は、「踏み潰せ」でも「蹴り飛ばせ」でもなく「踏み飛ばせ」としたのがいかにも「まっくろくろすけ」らしくて、心の行き届いた選択です。

伝説の竹馬乗りがヒール脱ぐ　大塚迷路

ははは！これも愉快だなあ。「伝説の竹馬乗り」とは、かつておてんば娘で鳴らしていた人物なのですね。もう乗れないだろ？これぐらいへっちゃらよ！なんて会話があったのでしょうか。

「ヒール脱ぐ」とすることで女性だと分かる効果があるのは勿論なんですが、「ヒール」を脱いだその足はきっとストッキング履いてるはずだし、そのストッキングの指で「竹馬」を挟んでいるところまで、鮮明に想像したものだから、リアルに笑えました。さらに「竹馬」し終わった頃には、ストッキングばりばりに破れとるよな……と二倍笑えました。

竹馬の集団迫る迫る迫る　東脇々

個人的にツボに入りました、シュールじゃないですか、これ！暴走族に囲まれるのもコワイけど、「竹馬の集団」が「迫る迫る迫る」なんて夢みたりしたら、ちとコワイ～。小学校の校庭で、「竹馬」に乗った子どもらが「先生みて、みて！」なんて場面かもしれんが、そうは思わせない悪夢っぽい感じがするのは、やっぱ「迫る」三連発の威力かなあ～（笑）。

竹馬がぐにゃぐにゃだからこれは夢　雪うさぎ

夢の中のことだから、この「竹馬」は季語ではない！と主張する俳人も勿論いるわけですが、この妙にリアルな「夢」に惹かれました。一生懸命「竹馬」に乗ろうとしているのに、肝心の「竹馬」は「ぐにゃぐにゃ」してて、どうやっても乗れないのです。「竹馬」がこんなに「ぐにゃぐにゃ」してるのは「これは夢」だからよ、と自分に言い聞かせるんだけど、一向に「夢」は覚める気配をみせず、我が両手にある「竹馬」はますます「ぐにゃぐにゃ」し、なぜかこの「竹馬」に乗らねばならぬという強迫観念に迫られ、じわじわと冷や汗が浮かんでくる……ような悪夢。こんなコワイ「夢」を繰り返し見てしまうこと、皆さんもありませんか？

第49回　2013年12月26日週の兼題

霜（しも）

天

霜のトラクターへ拳骨のごとく火を入れる　初蒸気

上五だけで9音もある破調が、堂々たる一句に仕上がっていることに快哉を叫びたいですね！

どうしても字余りになる場合は、上五で音数を吸収しておいて、中七下五で声調を取り戻すのが定石ですが、この句は中七も「げんこつのごとく」で8音になっています。ひょっとすると「拳骨＝げんこ」と読ませたいのかもしれませんが、個人的好みでは、8音で読みたいですなあ。一句全体のごつごつした調べは、その内容に似合っていますし、一語一語が絶妙な位置に置かれ絶妙なバランスを保っています。

一面「霜」の降りた畑を横目で睨みながら「トラクター」に歩み寄り、シートの「霜」をごしごし払い、レバーを引きキーを回す！のですが、余熱ランプは一向に点灯せず、「トラクター」は凍りきったままです。何度も何度も、よし！もう一度！とキーを回す、この気合いを「拳骨のごとく火を入れる」と表現したことが、この句の眼目。いやはや見事な比喩であります。

上五の助詞「へ」の効果もさることながら、「拳骨のごとく」という比喩は「～入れる」という動詞と手を結びます。この勢いこそが、セルが回り出す瞬間であり、「拳骨」が入った瞬間！「火を入れる」の「火」の一字の効果も絶大ですね。畑やトラクターを真っ白に凍らせている鉄壁の「霜」への反撃は、この「火」から始まるのです。全身に「霜」を纏ったまま唸り始める「トラクター」のなんと逞しいことか。そして、こんな方法で描き出される「霜」という季語の、なんと新鮮なことか！

地

日は昇る霜飛び散らし犬は起く　理酔

「日は昇る」から始まる一句は、「霜飛び散らし」という躍動的な中七に繋がります。「霜」を飛び散らすとは何か？と思った瞬間に飛び込んでくる「犬は起く」という措辞は、前出の複合動詞と一体となって、弾むような映像を表現します。

一句に「昇る」「飛び散る」「起く」とこれだけの動詞が入ると、普通は落ち着かない作品になってしまうのですが、言葉の質量のバランスがよく練られているので、違和感はありません。さすがはベテランの技術です。

夜が明けて霜の重機が動き出す　ポメロ親父

「天」の作品は「トラクター」と具体的に述べていましたが、こちらは「重機」としました。読み手が思い描く「重機」とは、工事現場のブルドーザーだったり、造船所のクレーンだったり、それぞれ違ったものになりますが、そこがこの句の一長一短。とはいえ、いずれの「重機」を思い浮かべるにしても、「霜の重機」という映像の作り方が巧みであることは、ゆるがない事実であります。

はろばろと霜吹く原をバスが来る　あつちゃん

言葉の選び方が丁寧に配慮されています。上五「はろばろと」から中七「霜吹く原」への映像化が美しいですね。「霜降る」ではなく「霜吹く」という表現に詩を感じます。凍るような風が、「原」に降った「霜」を時折散らしているような光景を思い浮かべました。そんな「霜吹く原」の向こうから「バス」がやって来る、遠い昔にこんな光景を確かに見たことがあるような気にさせてくれるのもこの作品の魅力です。

屍の鴉に降りて霜やさし　有櫛

「鴉の屍」ではなく「屍の鴉」という表現「降りて」の二語の位置、さらに「霜やさし」という形容詞の効果。それぞれが巧い具合に選択され、巧い位置におかれています。

普通「やさし」などの感情語は扱いが難しいのですが、この句の場合は、感情表現ではなく「霜」の形容として使われています。それでいて、一句が内蔵する感情にも触れているわけですから、そのあたりの言葉の斡旋がやはり巧いと言わざるを得ません。

優駿の凪ぎわたる眼や霜の朝　青蔦

「優駿」とは【すぐれた競走馬】ですね。その馬の「眼」を「凪ぎわたる」と表現したところが素晴らしい！「馬」の濡れたように光る黒い眼が、生き生きと描写されています。「凪ぎわたる眼」は、優しさの中にある躍動感を思わせます。

「霜」の降りた馬場に出ていく「優駿」の表情。「や」の詠嘆の後にひろがる「霜の朝」という時間と空間のなんと清々しいことでしょう。

霜降りていよいよ甘くなる畑　舞

ほうれん草などは「霜」に当てると甘くなりますが、この句の発想の面白いのは、「畑」そのものが「甘くなる」と表現したところです。「畑」に植えられたままの野菜たちに、大丈夫大丈夫もっともっと甘くなれるからね～と話しかけているようでもあります。

霜踏みて凶事伝ふる紙の束　牛後

下五「紙の束」をどう読むか少々迷ったのですが、ひとまずは「凶事伝ふる」新聞あるいは号外、と読ませていただきました。「霜踏みて」ですから、朝一番の光景を思います。日々報道されている内容に凶事が多いという皮肉な意味での「凶事伝ふる紙の束」なのか、号外として伝えられた今朝の「凶事」と読むかで、「霜踏みて」の足音が違ってくるかとは思います。

未来を予言する句でないことを祈るばかりです。

しりしりと夜霜の匂ひ薄荷飴　クズウジュンイチ

二つの読み方が可能です。「しりしりと」句っているのは「夜霜」のような「匂ひ」の「薄荷飴」だと読むか、「しりしりと夜霜」が匂っている日に「薄荷飴」を舐めていると解釈するか。

前者だと、季語を比喩に使っているので、季語としては機能しないと考える俳人もおられますが、個人的な好みとしては前者読みしたいなあ。

「夜霜」を踏みながら「薄荷飴」を舐めている帰り道。「しりしり」というオノマトペは、「夜霜の匂ひ」であり「薄荷飴」の味でもありましょうね。オノマトペの実感に強い共感を覚えました。

霜降ると防災無線星の夜　雅酔

これは「霜」の句なのか、「霜夜」の句なのか、迷いますよね（笑）。季語「霜」は目に見える現象で、「霜夜」は霜の降りそうな気配であると区別すれば、この一句は微妙なラインにあります。

ただこの句の内容から判断すると、「霜夜」のしんしん冴ゆる気配が核となっているというよりは、明日降ると告げられている「霜」を思う（なんらかの対策を講じておくようにと、防災無線が告げている）ことに一句の核があるように感じられます。「防災無線」という一語の向こうに見える「霜」の光景というべきでしょうか。

第50回　2014年1月9日週の兼題

葉牡丹（はぼたん）

天

迎ふるに送るに父は葉牡丹まで　三重丸

「葉牡丹」は、どうしても好きになれない面妖なものだと感じる人もいれば、よく見ると目出度さや華やかさがあると言う人もおり、なかなか掴みきれない季語でしたが、この句に出会って、おおーまさにこの場面に似合う季語だ！と膝を打った次第です。

前半の「迎ふるに送るに」という叙述が巧いですねえ。「迎えるにつけても送るにつけても」という意味がまず述べられるだけですが、後半の言葉によって具体的な映像が一気に引き出される構造に工夫があります。「迎えるにつけても送るにつけても」うちの「父」は「葉牡丹」の植わっている門のあたり「まで」なのです、という意味が脳に伝わったとたん、「父」の様子、ありありと立ち上がってきますね。

迎えられ送られているのは大学生の娘でしょうか、はたまた孫たちの声と共に到着する息子一家でしょうか。戻ってくることを心待ちにしているのに、それを表情に出さない「父」。その「父」とは対象的にはしゃいで迎える「母」の姿も浮かんできます。

「迎ふる」日の父の表情、「送る」日の父の気持ち、それらを想像すればするほど、この複雑な思いを受け止め表現してくれる季語は「葉牡丹」以外に無いなあ！と感心します。切れの無い型で終わる構造もまた絶妙。「葉牡丹」というとこの句を思い出しそうです。

地

葉ぼたんを母屋に負けぬよう並べ　とりとり

「母屋に負けぬよう並べ」で、分家の庭だということが分かる叙述がなんといっても巧いですね。「母屋」に対する対抗心が「葉ぼたん」の並べ様で表現されるのが愉快。確かにこの季語にはこんな表情もあるよなあ～と納得した一句です。

本家より少し小さき葉牡丹を　雪花

同じ発想なんだけど、思わず笑ってしまいました。こちらは対抗しない姿勢。「本家」の兄嫁さんはちょっとしたことで煩く物言いをつけてくるから、たかが「葉牡丹」一つでも「本家より少し」小さいものを植えておけば、万事波風が立たないのよ、という分家の嫁の処世術もまた「葉牡丹」で表現できるんだなあ（笑）。

葉牡丹のきっちりならぶ嫌な庭　有櫛

こちらは「葉牡丹」がどうも好きになれない方ですね。「葉牡丹」が測られたような等間隔で「きっちりならぶ」庭。こんなのは全く面白みがない！と切り捨てるような「嫌な庭」という口調が、一句の眼目。表現したい内容によく似合った叙述です。【小さめの葉牡丹が5×8くらいで等間隔に整列している庭】という作者ご本人の具体的なコメントに、思わず笑いました。

葉牡丹に芯あり妊娠三ヶ月　清水ゆうこ

「葉牡丹」の「芯」や「渦」や「襞」に注目した句、たくさんありました。その中でこれ推したのは、後半「妊娠三ヶ月」という言葉との取り合わせの妙！「葉牡丹」の「芯」のような胎児が自分のお腹にもいるのだなあという実感が、新鮮です。「芯あり」と言い切った点も、一句をきりりと引き締めています。

葉牡丹は妻を愛せと言うばかり　四万十太郎

「葉牡丹」は、自分を縛り付けている家庭のイメージでしょうか。毎日帰宅する度に、手入れの行き届いた庭の「葉牡丹」が目に入るのでしょう。こんな出来た「妻」を愛さないでどうする⁉と言われてるような気持ちになる作者には、何か後ろめたいところがあるのでしょうか（笑）。「言うばかり」という切れのない終わり方が、作者の逡巡を表現しているかのようで、笑ってしまいました。

葉牡丹のひらきて通常営業や　かなぶん

こちらは手入れの行き届いている店か会社か。一代でたたきあげた質実な店主のいる店、昔気質の社長がいる営業所を想像しました。

「通常営業」という詩語になりにくい言葉を果敢に取り込んで、俳句に仕上げている点を誉めたいですね。しかも下五に「や」を置く形は非常に難しいのですが、言葉のバランスを巧くとっています。

葉牡丹の並ぶ景品交換所　ヤッチー

「葉牡丹」がどんな場所にあるかと発想した句もたくさん届きましたが、その中でこの句、妙な現場証明があって（笑）、気に入ってしまいました。

「景品交換所」はパチンコ屋のすぐ外とか裏とかにありますよね。手にした景品を換金する場所は少々胡散臭くもありますが、そんな雰囲気を少しでも払拭するために「葉牡丹」のプランターかなんかが申し訳程度に並べられている、というこのアルアル感！そうか、「葉牡丹」の光景にはこんな場所もあったか！と、これまた別な意味で膝を打った一句でした。

葉牡丹やぼたもち寺に開きをり　小市

「ぼたもち寺」とは愛称でしょうか、この寺の和尚が昔「ぼたもち」のアイデアを考えたという逸話が残っているのかもしれないなあ。「葉牡丹」の地味な味わい、「ぼたもち」という食べ物の懐かしい気分、「ぼたもち寺」という言葉の楽しさが、うまく噛み合った味のある取り合わせです。

葉牡丹の白きを火山灰の穢さざる　田中憂馬

「火山灰」と書いて「よな」と読みます。九州、阿蘇地方の呼び名のようです。「葉牡丹の白」は純白ではなく、クリーム色がかった白。他の植物の葉には「火山灰」が降ってその色をくすませるのに、「葉牡丹の白き」部分を「火山灰」は穢すことはない、という視点が佳いですね。下五「穢さざる」の連体形の余韻は、再び上五に戻って「葉牡丹」をクローズアップする働きもしています。

葉牡丹を老婆白杖振りて打つ　四万十のおいさん

当たり前のことですが、俳句は上から読んでいきますから、一語一語が脳に飛び込んでくると、脳は瞬時に意味や像を構築し始めます。「葉牡丹を」とくれば、葉牡丹をどうするんだろうと……と脳は勝手に先走ります。次の瞬間に「老婆」「白杖」と言葉が出現すると、またまた脳は先走って、杖をつく？杖で指す？と可能性のありそうな動作を勝手に想像し始めるものだから、最後の「振りて打つ」の衝撃に驚きが走るのです。

打たれる度に、その葉を飛び散らせる「葉牡丹」が痛々しくも目に浮かび、「白杖」の動きや「老婆」の表情が、否応なく読み手の脳を支配していきます。

第51回　2014年1月16日週の兼題

節分（せつぶん）

天

節分や護符貼り換へて山晴るる　江戸人

立春から始まる二十四節気は、大寒の最終日「節分」で終わります。ですから「節分」という季語の核には「今までの永い冬に思いを寄せつつ、いよいよ明日から始まる春を喜ぶ心」があるのだと考えるべきですし、その知識を持って読むと先人たちの作品はやはり素晴らしいですね。

節分や灰をならしてしづごころ　久保田万太郎

節分や梢のうるむ楢林　綾部仁喜

映像を持たない時候の季語として「節分」をどう描くか。そんな悩みの中で、次第に強い魅力を感じるようになった一句を今週の「天」に推します。

「節分や」ではなく、「節分の護符張り換へて」とする方法もありますが、「節分」と「護符」という二つの単語が直接くっつくのは、ちょっと興ざめ。ここは「節分や」としっかり切って、季語を際立てるべきでしょう。この操作によって、下五「山晴るる」という展開が非常に鮮やかになってきます。

句中の「護符」は「節分」の行事で賑わう神社で戴いてきたものなのでしょう。神棚を清め、古い御札を剥がし、新しい「護符」を貼り、春を迎える準備が整うと、向かいの遠山がみるみる晴れくるのが目に入ります。小さな青空が広がってくるさまは、あたかも春の訪れを眼前にしているかのような思いです。清々しくも冷たい「節分」の青空を見上げる作者の心には、明日からの春を喜ぶ気持ちが満ち満ちています。

地

節分の風呂濛々と沸かしけり　尚川

「節分や」と切ることも考えられるのですが、この句の場合は「節分の」がいいですね。「の」という助詞は、「の」の上にある単語によって、下にある単語を限定していく働きがあります。風呂にも色々あるけど「節分の風呂」を沸かしている、という「限定」の意味になります。

「節分」は二十四節気最後の日。明日からまた新しい二十四節気が始まるというその日に、まずは「風呂」を沸かし、永い冬の間の身の垢を落とそうというのでしょうか。「濛々」たる湯気の匂いが一句の世界に広がり、その香もまた「節分」の気分を盛り上げます。

節分や鬼射る弓の如く月　ドクトルバンブー

「節分」×「鬼」という取り合わせの句は沢山たくさんありましたが、時候の季語としての特徴を表現するのは、至難の業でありました。

この句の工夫は、「鬼」の一語を含むフレーズを比喩として機能させている点です。あくまでも「節分」の日の「月」を描きつつ、そこに「鬼」のイメージを滑り込ませるとは、実に巧い発想です。そういえば先日、こんな「月」が美しい弧を描いていたなあと思い出しました。

節分や湯宿に鬼の大金棒　みなと

「節分や」で切って「鬼」の一語を含むフレーズからは切り離すという手法は同じですが、「鬼の大金棒」といういかにも豆撒きの現場っぽい言葉を使いつつも、「湯宿」に飾られているという状況によって、ベタ付きを回避しました。これも巧い工夫です。

温泉にゆったりと入ってからいただく「節分」の夜の御膳には、豆撒きの豆も用意されているのかもしれないなあ、とそんな想像も広がります。

口開けてゐる節分の土間の闇　初蒸気

「節分〜闇」という発想の句も沢山ありました。この句は比較的ストレートな表現で「節分の〜闇」を表わしています。「口開けてゐる」のは、ただの「闇」ではなく「節分」の日の「土間の闇」なのだと限定していくことで、「闇」は次第に口を濃くしていくかのような味わい。「土間」の冷たく湿った感触もまた「闇」の手触りです。

節分や闇は大きな鬼の口　やのたかこ

こちらは「闇」そのものを「大きな鬼の口」だと比喩した一句です。「節分の闇」ではなく、「節分や」と切ることで、「闇」は独立した存在として、その「口」をゆっくりと開け始めます。「闇」が「大きな鬼の口」をぽっかりと開くと、生臭い息が闇の底から吐き出されるのかもしれないと、生々しい想像も膨らんできました。

小料理屋出て節分の雪に会ふ　じろ

季重なりですが、味な一句ですね。「小料理屋」の美味しい料理と酒に満足して、店を出ると、あら雪だね、ほんと雪ですね、なんて見上げているのです。いやいや、一人で店を出てきたと読んでもいいな。明日から春になるというその夜の「雪」だからこそ、しみじみと見上げているのでしょう。「会ふ」の一語にその思いが籠もっています。

節分や鳩の寄り来る精米所　杉本とらを

「節分〜豆〜鳩」という連想ゲームのせいか、「鳩」のでてくる句も散見されました。取り合わせの距離をこのぐらい離してくれると、読んでて安心するなあ〜（笑）。

「精米所」の零れた米を啄みに集まってくる「鳩」たちも、明日からは春だということを知っているに違いありません。「鳩」たちと「節分」の日差しを共有しているような味わいの一句。

節分の何かひつかかつてゐる雨戸　雪うさぎ

「節分」の夜には、邪気を退散させる豆を撒くわけですが、あれ？おかしいぞ、「何か」引っかかってるぞ、この「雨戸」……。

「節分〜豆〜敷居に転がる」という発想の句も結構あったのですが、「豆」とはどこにも書いてないところがこの句のミソ。ひょっとして豆ではなくて、「何か」邪気のようなものが「ひつかかつてゐる」のではないかしらん……という小さな不安が、作者の心に「ひつかかつて」きます。歴史的仮名遣いの表記、微妙な字余りの調べが、一句の内容に対して効果的であることは言うまでもありません。

節分の鯉の池ごとふくらみぬ　仮屋賢一

これが作品としての完成形だとは思

わないのですが、この感覚にも、季語「節分」の本意があるように感じます。

「節分の鯉」の「の」は、鯉にも色々いるんだけれども「節分」の日の「鯉」という具合に限定の意味を表します。そして「鯉の池ごと」の「の」は主格、つまり「鯉が」という意味になります。

ちょっと不思議な感覚ですよね。明日から春になるという「節分」の日「鯉」たちは「池ごと」ふくらんできたよ、という感知に、軽い驚きを覚えます。ぼんやりと発光するかのような不穏な光景のどこかに、邪気が隠れていそうな「節分」の気分でしょうか。

第52回　2014年1月23日週の兼題

二月（にがつ）

天

切株に立つや二月の木の如く　吉川千早

それにしても「二月の木の如く」とは不思議な感覚です。季語を比喩として使った場合、季語としての機能はなくなると考える俳人もいらっしゃいますが、「二月の木の如く」「切株に立つ」という行為自体に詩があることは間違いありませんし、四月でも五月でも九月でもない「二月」という季語が動かしがたくその力を発揮していることも明らかです。

森を歩いていると、大きな切り株を見つけました。伐り痕はまだみずみずしく、樹の匂いがつーんと鼻孔を喜ばせる、そんな「切株」です。樹の大さを確かめるように、樹に残る生気を嗅ぐように「切株」に立ってみると、自分自身が伐られた樹に成り代わったかのような感覚にとらわれます。冬から春へと移る月、余寒の冷たさの中にも春の息吹が立ち上ってくる月、そこには清新な風も吹いているでしょう。立ち上ってくる樹の匂いは、まさに「二月」の匂いであります。

地

新しき風倒木や二月晴　ポメロ親父

「風倒木」とは読んで字のごとく、強い風を受けて倒れた立木です。「新しき風倒木」という表現だけで、つい先日まではこの木は倒れていなかったこと、この木が倒れる前にすでに倒れている木が幾つかあること、作者自身はそのような状況を把握している人物であること等が読み取れます。

下五「二月晴」という季語の使い方には賛否があるかもしれませんが、響きわたるような余寒の青空が想像できますし、大風の翌日の晴天であることもありありと表現されています。

櫨林に生まれ二月の水となる　七七子

「櫨」は体内に水がながれているといわれる樹です。TV番組のロケで雪の「櫨林」を訪れたことがあるのですが、案内をしてくれた方が、聴診器をあてると「櫨」をながれる「水」が聞こえるんですよ、と体験させてくれました。

「櫨林に生まれ」てくる「二月の水」は、「櫨」の体内を走り、地を走り、やがて春の訪れを知らせる雪解けの水になっていくのでしょう。「二月の水」の「の」という助詞は、「水」にもいろいろあるけれども「二月の水」なのだと限定する働き。「二月」のような時候の季語を扱う場合に、効果を発揮する手法の一つです。

信号の二月の青が生ぬるい　あつちゃん

同じ「青」でも、こんな青もあったかと発想の妙を愉しませてもらった一句。「二月」という季語の持つ冷たい明るさを思う時、目の前の「信号の青」のなんとも「生ぬるい」色であることよ！と感じとる作者の感覚に共感します。

この句も「二月の青」という使い方になっていますね。いろんな青があるけれども「二月の青」と限定する「の」の働きが十分に活かされている作品。口語の口調も、内容に似合っています。

米を研ぐ二月の光渦にして　松本　だりあ

これも「光」に対して「二月の光」と限定します。しかもそれは「米を研ぐ」水の「光」であるという具体的な描写によって、読み手の脳内には映像がありと再生されていきます。さらに、下五「渦にして」と丁寧に描写することによって、「二月の光」はよりリアルな映像となります。「米を研ぐ」冷たい水の感触もまた「二月」の感触であります。

共同風呂のような場所ではなく、学校の手洗い場を思ったのは、「二月」という季語の持つ力かもしれません。

二月きて強くさびしい女優の死　らっこマミー

「女優」のどなたかが最近亡くなられての追悼句かもしれませんが、具体的な人物を思い浮かべなくても、十分鑑賞できる作品です。「二月きて」は春のさきぶれですが、まだまだ寒さも厳しい時期。「強くさびしい」は「二月」という季語のイメージにも重なりつつ、「女優」の人生を述べる言葉としてどっしりと中七を埋めます。どんな「死」であったのか、読者はそれぞれに「強くさびしい死」を想像し始めます。

洗ひ場の石鹸固き二月かな　クズウジュンイチ

「洗ひ場」に「石鹸」があるのは当たり前ですが、「固き」という描写が「二月」という季語と結びつくことによって光景が立ち上がってきます。「二月」の冷たい空気は「固き」という言葉と響き合いますし、「二月」の春を迎える清新な気分は「石鹸」の清潔な匂いに似合います。

卒論を仕上げ二月の椅子ぬくし　うに子

「卒論」を仕上げてしまえば、「二月」はぽっかりと空白の様に存在し始める期間。単純に「二月」だから「卒論」が仕上がっているんですねと読まれると底が浅くなりますから、「二月の椅子ぬくし」によって季語「二月」の手触りを表現した点に工夫があります。「二月」という季語の持つある側面を描いた作品です。

金管の音色の透きとおる二月　ぐみ

「金管」といっても色々な楽器があるわけで、それを具体的に述べる方法も考えられるのですが、「金管」という楽器全ての「音色」が「透きとおる」のが「二月」という季節なのですよ、という把握に詩があります。「二月」という季語を音で表現してみるのも楽しい発想です。

背景に巨船群を置いて二月　東脇々

これが完成形だとは思わないのですが、非常に個性的な発想に惹かれます。「二月」という季語の「背景」には「巨船群」が置かれているのだ、という感覚は一体どこから生まれてくるのでしょう。「二月」という季語は春を迎える明るい側面と、厳しい余寒が続く暗い側面とを併せ持ち、両者が徐々に逆転していく時間であります。「背景」としてある「巨船群」のイメージは、そのような季語の本意にかすかに触れる比喩表現です。

ただこの調べが、一句の内容にそぐっているのかどうか、判断に迷います。なんとか語順を変えて調べを整えることができないかと考えてみたのですが、やってみると作品の表情が変わってしまい、魅力が殺がれてしまいます。時間をかけて推敲してみて下さい。完成形として磨き上げられたこの句との再会を愉しみにしています。

第53回　2014年1月30日週の兼題

紅梅（こうばい）

天

紅梅を飾りて暗きクラブかな　じろ

「白梅」の特徴を「気品」だとすれば、「紅梅」は「華やぎ」ですね。その華やぎにも、濃淡明暗あって然るべしなのですが、ついつい一定方向のベクトルで「紅梅」を捉えがちだったなあと猛反省しております。

会員制高級クラブの扉を開くと、し

ずかなざめきとともに微かな芳香が広がっていることに気づきます。ん？これは……と踏み出すと、店の奥の大きな壺に、「紅梅」が見事に投げ込まれているのに気づきます。ああ、香りはこれだったかと腑に落ち、そうか、もう「紅梅」の咲く頃かと、心がふっと華やぎます。

「〇〇を飾りて」という植物系の句に対しては、他のモノを飾ってもエエんちゃうか？……と反問してみることが必須ですが、この句の「クラブ」という場所、「暗き」という描写によって、「紅梅」の豪華にして妖艶な姿はありありと立ち上ってきます。

青空の下で見る紅梅とは違う妖しげな美しさと馥郁たる香りを愛でつつ、グラスを傾けるその席には、裾に白梅をあしらった着物のママさんが凛と背筋を伸ばして座っているのかもしれない、と、そんな想像まで膨らんできた作品でした。

地

母も娘も歩はば紅梅びいきなる　**あつちやん**

「紅梅」というと、俄然「母・娘・妻」などの人物が登場しがちです。そんな類想がぽっかりと口を開ける中、「歩はば」の違いによって「紅梅」への思いを表現しようとする発想に、拍手を贈りたいですね。「紅梅びいきなる」という連体形の措辞が、再び「母」と「娘」の「歩はば」に戻ってくるという構造にも工夫がありました。

あの母の紅梅好むてふ意外　**雪うさぎ**

これも「母」ですが、「あの母」という物思わせぶりな措辞、「紅梅好むてふ意外」から想像される「母」という人物像が、類想感を払拭します。同じ梅であれば「白梅」を好むように謹厳な「母」を想像しました。「〜てふ意外」とのみ語ることで、「母」という人物を表現するテクニック、巧いですね。

紅梅やお先にどうぞお姉様　**やのたかこ**

一読、谷崎潤一郎著『細雪』の四姉妹を思い出しました。小説は大阪船場が舞台でしたが、「お先にどうぞお姉様」の台詞には東京っぽい気分がありますね〜（笑）。「紅梅」は、まさにこのような姉妹を描くに相応しい季語。しかもこの台詞、どんなニュアンスで声にするかによって、「お姉様」と妹の人間関係まで表現できそう。

先だって番組でご一緒させていただいた俳優の梅沢富美男さんが、「ばか」とか「好き」とか一語の台詞で、いかに様々な感情表現ができるか、やって見せて下さり、プロの表現力にほとほと感心しました。彼ならば、どう表現するのかなあ、「お先にどうぞお姉様」を〜。

紅梅や声よく揃う薙刀部　**根子屋**

こちらは「紅梅」の若々しさが表現された作品。「薙刀部」の「声」が「紅梅」という季語を溌剌たる存在として引き立てます。「紅梅や」でカットが切り替わり、「声よく揃う」と声が出現し、最後に「薙刀部」の面々がでてくるというカメラワークに工夫があります。

紅梅のはじけて遠き魚売り　**ぐべの実**

なんだか懐かしい光景を見せてもらったような一句。もちろん上五は「白梅の」でも成立はするのですが、白梅を追いかけるように咲く「紅梅」は春の進行を思わせ、遠き「魚売り」の声もほんのりとあたたかい気分です。そろそろあの魚もでてくる頃かしらなんて思いながら、「魚売り」が近づくのを待っているのでしょうか。それとも、遠ざかっていく「魚売り」の声をほのぼのと聞いているのでしょうか。

紅梅一つ清少納言の声を待つ　**安**

「濃きも薄きも紅梅」と言って、この花を愛でたのが「清少納言」ですね。ぽつんと咲いた「紅梅一つ」を見つけると、いつも「清少納言」のこの言葉を思い出すのでしょう。「紅梅」はまるで、「清少納言」に見つけてもらうのを待っているかのようだよ、という発想に共感を覚えます。

紅梅や袴に風をはらませて　**雨月**

「袴に風をはらませて」を、仮に「袴を風にひるがへし」と言い換えてみましょうか。目の前にある光景は変わらないのですが、視点が変化するのに気づきますね。

「紅梅や」から、映像は「袴」を身につけた人物に切り替わるわけですが、「袴を風にひるがへし」ならば風を受けながら歩いて行く人物の動きを捉えます。それに対して「袴に風をはらませて」は「袴」に風がはいって膨らんでいるあたりの描写になりますね。この措辞によって、映像は非常に生き生きしてきます。私は、巫女さんの赤い袴を想像しました。

紅梅に鳥の耳打ちしてふふふ　**ミル**

「紅梅」に集まる「鳥」たちの動きは、見ているだけで楽しいものですが、それを「鳥」が「紅梅」に「耳打ち」しているんだよといい、さらに「ふふふ」と笑っているんだよと語る、この発想のなんと可愛いことでしょう。「ふふふ」は「鳥」の含み笑いのようでもあり、「耳打ち」された「紅梅」の、くすぐったいよ〜という笑いのようでもあります。

紅梅や笑ひ上戸の床の壺　**田中憂馬**

「紅梅」の明るさに「笑」を連想する句はあるだろうと思いますが、なんと「紅梅」が活けられた「壺」が「笑ひ上戸」であるという発想にびっくり！「紅梅」がすごく似合っていて、「紅梅」を活けてもらえるのが嬉しくてたまらないように思える、そんな気分を「笑い上戸」の「壺」と表現したのでしょうか。「床」の間を一気に春らしい明るさで彩る、そんな「紅梅」と「壺」です。

紅梅に飽きてみたらし甘過ぎて　**とりとり**

梅林を歩いて「紅梅」を楽しんできたんだけど、だんだん見るのにも歩くのにも「飽きて」しまって、梅見茶屋に腰掛けて「みたらし」団子を食べ始めたけど、これがちょっと「甘すぎて」またまた飽きてしまって。切れのない叙述が、連鎖していく「飽き」を微笑ましく表現しています。

飼い犬に紅梅の香を嗅がせたり　**位子**

抱き上げられるような小さな「飼い犬」を思いました。ほら、こんなに良い匂いなんだよ、お前も嗅いでごらん、と犬を抱き上げる人物の動きが見えてきます。

勿論、「白梅」でも作品としては成立するのですが、「紅梅」の持つ明るさや華やぎが、春の喜びを「飼い犬」と共有したい思いを表現してくれます。

紅梅へゆるゆる噴水の上がる　**バーバラ**

「紅梅」と「噴水」、季重なりです。が、こう描写されると、なるほどこんな光景もあるに違いないと、脳内に映像が再生されていきます。

「紅梅へ」の「へ」は方向を示す助詞ですが、この選択が「噴水」の水の動きを描写しますし、なによりも「ゆるゆる」というオノマトペが（夏の勢いのある「噴水」とは違う）いかにも春らしい表情を描いています。まだ水の冷たい頃の「噴水」は、頭上に枝を広げる「紅梅」に遠慮するかのように、「ゆるゆる」と春のひかりをゆすります。

俳句ポスト３６５とは松山市が運営する、俳句の投稿サイトです。毎週新しいお題（兼題）が出題され、結果が発表されます。また、俳句を学べる「俳句道場」などもあります。どなたでも無料で参加出来ます。

俳句の街　まつやま

俳句ポスト３６５

とは？

http://haikutown.jp/

平成26年度兼題リスト

＊日付は兼題締切日。
予定を含みます。

2月12日 風光る（かぜひかる）
2月19日 ぶらんこ
2月26日 春菊（しゅんぎく）
3月5日 田楽（でんがく）
3月12日 伊予柑（いよかん）
3月19日 蘆の角（あしのつの）
3月26日 馬の子（うまのこ）
4月2日 巣箱（すばこ）
4月9日 蛍烏賊（ほたるいか）
4月16日 ライラック
4月23日 籐椅子（とういす）
4月30日 守宮（やもり）
5月7日 麦（むぎ）
5月14日 シャワー
5月21日 植田（うえた）
5月28日 蛍（ほたる）
6月11日 紫陽花（あじさい）
6月18日 ソーダ水（そーだすい）
6月25日 川開（かわびらき）
7月2日 青田（あおた）
7月9日 蓮（はす）
7月16日 炎天（えんてん）
7月23日 夏深し（なつふかし）
7月30日 法師蟬（ほうしぜみ）
8月6日 猿の腰掛（さるのこしかけ）
8月13日 秋草（あきくさ）
8月20日 名月（めいげつ）
9月3日 玉蜀黍（とうもろこし）
9月10日 落し水（おとしみず）
9月17日 不知火（しらぬい）
9月24日 後の月（のちのつき）
10月1日 万年青の実（おもとのみ）
10月8日 鰡（ぼら）
10月15日 黄落（こうらく）
10月22日 夜寒（よさむ）
10月29日 神無月（かんなづき）
11月5日 屏風（びょうぶ）
11月12日 ジャケット
11月19日 冬の鵙（ふゆのもず）
11月26日 鯨（くじら）
12月3日 牡丹鍋（ぼたんなべ）
12月10日 冬至粥（とうじがゆ）
12月17日 福引（ふくびき）
12月24日 寒蜆（かんしじみ）
1月7日 冬芽（ふゆめ）
1月14日 砕氷（さいひょう）
1月21日 冬服（ふゆふく）
1月28日 白梅（はくばい）
2月4日 蛤（はまぐり）
2月11日 海松（みる）
2月18日 水菜（みずな）
2月25日 三月（さんがつ）
3月4日 水草生う（みずくさおう）
3月11日 花種蒔く（はなだねまく）
3月18日 草餅（くさもち）

＊更新休止週（予定）
6月2日～6月6日
8月25日～8月29日
12月29日～1月2日

365オフ会

お花見編
2013年3月31日

俳句ポスト365がスタートして約3ヶ月がたち、365オフ会お花見編を行いました。

当日は満開の桜の中、100名を越える方が松山市道後公園に集まり、親睦を深めました。

午後からは、まつやま俳句でまちづくりの会主催の句会ライブに合流し、桜の一句を詠み合いました。

365オフ会

愛媛マラソン編
2014年2月9日

第52回愛媛マラソンに俳句ポスト365の特設ブースが登場しました。

当日は、Facebookサイトにて、「走」の時の入った俳句を募集しました。選者の夏井いつき氏が、リアルタイムで選句を行い、優秀句を発表しました。

HP「俳句ポスト３６５」
PC・スマートフォンサイト
http://haikutown.jp/post/

「俳句ポスト３６５」
Facebook ページ
http://www.facebook.com/haikupost

APP「スマイル松山ハイク&安心ナビ」
松山市公式アプリ
http://smile-matsuyama.com/

松山市